怪人を狩る怪人

成金ヤック

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある晴れた日の事Ｚ市のマンションに住む、一般リーマンのアシナ。彼は会社を首になったショックからか高熱をだして寝込んで仕舞う。翌日の朝起きると体に違和感があることに気づいた。（なんか体冷たくない？）怪人となってしまった彼はどのように過ごして行くのか。

失踪しないように気をつけます。いや本当にコメント等励みになるのでお願いします。１コメ送る度に作者の失踪率が下がりますんで。でも見てくれるだけでも嬉しかったりもします。作者は馬鹿なんで文章力皆無です、それでもいい人は読んでってください

怖かったのでＳＥＫＩＲＯタグの追加…まぁ分かってる人なら名前で察したでしょうが…タグ付け遅れました。

こちらの作品一応本編完結致しました！だいぶ無理やりでしたが・・・ 残りは番外編を執筆中になります！それでもいいならお楽しみ下さいませ！

目次

キャラ設定等
アシナ技まとめ及びオリキャラ纏め。 1
番外編：平穏を求む怪人。
何時か在りし日の物語。 7
紅色 9
捕食者 11
怪人協会 14
衝動 18
怪人を狩る怪人
首切り 20
カッパエビクッキー 23
始動開始 26
強者と怪人 29
手合わせ 31
手合わせ2 35
手合わせ（ジェノス視点） 39
煙 46
銀の牙 49
破壊 52
楽しさと雨 56
攻めと守り 59
油断と慢心と甘え 61
アメノヒ 64
怪人を狩る怪人 67

首さ置いてけ、血さ置いてけ　69
男のロマン　73
拳法　76
グレイ　78
卑怯物　82
類まれなる強者　85
自信　88
終幕　91
ヒーロー　94
怒り　98
友愛と己の義　102
ピコピコ　108
侵食　113
救済　118
焔　121
復讐　124
悪意の獣　128
反抗　131
売り言葉に買い言葉　134
破壊と殺戮の衝動　137
信ずる心　140
疑惑　144
傍観者　147
秘密会議　150
怪人足る所以　155

進化と停滞 159
化け物 163
破滅 166
アシナと蝙蝠 170
幹部 173
動かざること山の如し 176
無念 178
恐怖（笑） 182
害虫駆除 185
怨嗟と主役 189
総力戦 193
救済と光 199
闘争そして説得 203
各々 210
高揚 214
目には目を歯には歯を 219
奇跡 222
決断 226
決断 231

キャラ設定等
アシナ技まとめ及びオリキャラ纏め。

技集。

血流技系統。

岩砕き

モデル。芦名流一文字。

文字通り岩をも砕く一撃を放つ、ポピュラーで威力が高く。低コストで放てる。反動が少しだけあるが経験を積んだアシナならほぼ無視できる代物。コスパ良し威力良し

血傀儡

自分の形をした血の塊をその場にぽん置きできる技。動けないし意思は無いため。囮に使うのが精々。許容ダメージ量を超えると爆破して目くらましに使える。使用には物凄く血液が必要になる都合上連発は出来ない。前述の通りコスパもあまり宜しく無い

血纏

エンチャ技。他の攻撃系の血流技を強化する。普通の攻撃のリーチも威力もかなり上がる。コスパが凄く良い。

血潮。

自らの周りに。高出力の血の壁を出現させて自分を守る技。小さな物なら吹き飛ばせる。コストは掛かるが。威力が大きい。

桜吹雪

硬質化させた小さな血の塊を相手に当てる。あまり致命傷は出せないが相手の集中は削げる。コスパはいいが威力不足。

大嵐

芦名無心流より禍雲渡り。血を媒介とひて無数の刃を発生させる大技。数の多さと威力の高さにより相手に致命を与えることも可能。コスパもいいし威力もいいが下準備が必要。

龍這い

モデル『奥義不死切り』

目の前に血の斬撃を出現させ長射程高威力と言った性能を誇る。コストはかかるがえげつのない威力が叩き出せる。

火炎派生及び、火炎技

焔の能力を使った血液を発火媒介とした技。応用で爆破も可能

散り散り

焔の能力を使い血の塊及び破片を爆破させる爆破に着いては範囲も威力も無い。

火炎血流

波打ちに炎と風を付けた派生技。1度の居合の構えを取って相手に隙を見せなければならないが、それに見あった威力が出せる。アシナの必殺技の1つこれ打っとけば倒せるだろうの認識。チャージすればするほど威力が上がる。モデルは時計塔のマリアの「ふぅ……らぁぁ!!!」

青銅の蛇『ネフシュタン』

血溜まりを使い炎の蛇を召喚する。呼ばれた蛇は対象を焼き尽くすか。自らの熱で血溜まりが蒸発するまで攻撃を続ける。下準備が多い。蛇の数は血溜まりの大きさに依存する。大血潮からのネフシュタンが強い。

幻影鳳凰斬

同化時の超強化された夕日でのみ使用可能。大きな炎の鳥を出現させて攻撃対象に突進させる。鳳凰は対象を飲み込み大きな炎の柱と化す。柱は敵に吹き飛ばされるか。力を使った物が解除するまで立ち上り続ける。

オリキャラ紹介。

あまりキャラのイメージを持たせたく無いため。見ない事をオススメする。皆の中にそれぞれのアシナを持ってください。それでもいい人は行きます。覚悟の準備をしておいて下さい。

アシナ

本作の主人公。元々は普通のサラリーマン。この世界では、サイタマは元々から、あのゴーストタウンのアパートに住んでいたものとしているため、サイタマとは就活時代からの友人である。アシナもヒー

ローに所属し始めたため、生活と時間に余裕が出来たため。良く食事を共にしている。元は人間である事に執着が強かったが、今は怪人である事を認めて、怪人らしく過ごしているつもり。

モデルはＳＥＫＩＲＯより芦名弦一郎。性格は別人となっている。使命感はそれほどないが、自らの手で救える範囲のものは救いたいと思っている。偶にネガティブになる。愛煙家であり飲酒を好む。食事や入浴は嗜みとして行っている。人間の心までは捨てる気ではないらしい。

蝙蝠

アシナの半身。モデルはＳＥＫＩＲＯより隻狼。アシナが首を切られたショックで発現した。元はアシナの体を乗っ取る気であったが。頼りない主を支えねばならんとする使命感か保護者のような立ち位置になってしまった。蝙蝠がアシナの人間性を軒並み奪って行ったため。アシナには体と魂しか残らなかった。主食は血液。主人であるアシナ以外が蝙蝠を使おうとすれば契約により血液を全て抜かれて死ぬ。アシナは自らの半身のため契約抜きで使用が可能。能力は主に『再生及び回復』『発火』『血の変質』『同化』『霧化』『瞬間移動』『成長補正』等どこのなろう人かな？と疑うハイスペックぶり。アシナの急成長も蝙蝠の力によるものである。今の蝙蝠本人の実力はボロス以上サイタマ以下である。主を獣から解放する際に自死と言う道を選んだ彼は、かつての主に反旗を翻そうとしていた影は無く、主を想い主の幸せを願った従者であった。

蝙蝠（ＴＲＵＥＥＮＤ人成り世界線）

アシナの願いにより完全な人と成った存在。山奥の荒れ寺に身を置く。主の願いにより主を切るそれと同時に主の背負っていた怨嗟も背負い常に幻聴と破壊の衝動に追われている。咎と罪を背負い、贖罪からか神に許しを乞い続け常に仏をほっている。しかし掘る顔全てに置いて怒り顔となってしまい彼が赦される日は遠い。門を叩いて来た少年がしつこく面倒を見ることにしたとか。

アシナ（ＴＲＵＥＥＮＤ人返り）

蝙蝠の決断により人に返ったアシナ。蝙蝠の居ない生活は虚しく、

悲しい、蝙蝠の抜け殻を振るい、死者の頃に出来た離脱や一部血流技は使用出来なくなってしまったが純粋な力だけで下手なレベル竜なら軽く葬れる。かつては存在せず、突然生活の一部となった蝙蝠。そんな蝙蝠はいつの間にか彼にとってかけがえのない存在となっており、蝙蝠が居ないと言う事実は日に日に彼の首を真綿で締め付けて行く。

ＨａｐｐｙＥＮＤ

ルイーツェ

ダークマター４戦士の内の１人。ボロスに絶対な忠誠を誓っていた。普段は甲冑状態で全てを粉砕して戦うが、本気を出すと、目にも止まらぬスピードで切りつけて来る。モデルはＳＥＫＩＲＯより甲冑武者。他Ｓｈａｄｏｗｖｅｒｓｅよりクリフト。柔軟性に長けており、戦場でこそ成長していく。色々技を持っており。その全てに置いて第２形態から使用可能である。同化アシナに呆気なく倒されているが。他のＳ級なら負けて居た可能性も強い。バングやタツマキなら彼に勝つことが出来ただろうか…災害レベルは竜以上である。鬼神宿しは自らの身体能力を極限まで強化する。一件自我が無いように伺えるが、無いわけでは無い。発声機関が退化しており言葉を放つ事が難しいだけである。アシナに倒された後別世界で勇者をしていると言うが…それはまた別の話

昆虫王

その名の通り、全昆虫の王者。仮面を常に付けており下の顔は未だ分からない。虫なので目は複眼でありカブトムシの頭にカマキリの腕と胴、イナゴの足、任意でサソリの尾も出せる。とても素早く常人なら捉える事も出来ずに死ぬ。アシナに２回ほどやられている。その内１回は殺されかけているため。かなりのパワーアップを遂げている。本来は虫たちと森奥でひっそりと暮らしていたが。ギョロギョロに怪人協会に誘われて暇つぶし感覚で参加。負けず嫌いなため後に引けなくなった。神経毒や血を固める毒も扱える。昆虫が出来ることは基本的に出来、昆虫怪人を配下に置いている。オロチが大嫌い。虫神との仲も良好とは言い難い。

昆虫皇

昆虫王と余り変化は見られないが身体スペックは化け物レベルであるレベルで言えば黄金精子以上怪人ガロウ以下である、蝙蝠に呆気なくやられた。

悪意の獣

アシナが狩り続けた怪人達の残留思念。全てを破壊し全てを喰らう。そこには意思も理性もない。　尻尾の数で脅威度が変化する。蝙蝠が観測した最大本数は４本。幼き子供の様に笑い、敵対対象を弄ぶ。声帯器官が発達しておらず言語を発する事が出来ない、その分音は出すため言葉であろう呻きが聞こえる。バインドボイスを放ち四足から繰り出される猛撃は最早人として扱っていい物ではないだろう、岩を穿ち木をへし折る、その膂力は恐ろしい物である。良くも悪くも生まれたばかりであり、好奇心が強く向上心も強い。

ときおり彼の発する咆哮は泣いているようにも聞こえる。

血刀蝙蝠

モデルＳＥＫＩＲＯより『拝涙もとい赤の不死切り』刀状態の蝙蝠それは最早、意志なき抜殻でありただ振るわれるのみの道具である。血を吸い取る事は記憶や感情をも力とする行為、それにはもちろん負の感情も多くの含まれるだろう。契約者はそう言った物も背負わなければならない。吸った血は主の体に経験として流すため憎しみ等も経験として流す、主を意図せず『獣』に変質させてしまうその刀は紛うことなき妖刀であろう。

怨門

モデルＳＥＫＩＲＯより『開門もとい黒の不死切り』内に囁く悪意がアシナに呼応して現界した姿、内に秘めた怨嗟は収まる事を知らず増大していく。刀を抜いた物は生半な精神では刀に意志を呑まれてしまい怨嗟の眷属と化してしまう。アシナが己に募る負の感情の拠り所として作ったもう一振の蝙蝠とも言える。

望まれるべく生まれたはずの其れは望まれぬ存在となってしまった。それはとても悲しい事だろう。

怪人アシナ

モデル　ブラッドボーンより血に酔った狩人ジョジョの奇妙な冒険より吉良吉影。血に溺れ、血に酔い、人である事を捨てた存在。血のように赤く変色した瞳は見るものを恐怖させる。本人はバレずに殺戮がこなせればいいとゆう吉良吉影寄りの思考を持っている。平穏を好み平時の争いは好まない、尚食事の時の『狩り』は争いではないらしい。本人曰く美食家であり食には拘りがあるらしい。愛刀夜影を振るい獲物を屠る様は正に『獣』と形容してもいいものがある。

蝙蝠（番外世界線）

身に余る野心でその身を滅ぼす結末を辿った愚かな存在。しかし主の選択が違えば彼を相棒と呼びパートナーとなりその命を賭したとしても護ろうと思える存在となりえれただろうか・・・

冥刀『夜影』

その柄や鞘、鍔は夜の様に黒く暗い、しかし刀身は対象に夜に輝く月のような光沢を放つ。その存在はアシナの中に存在した獣が自我と存在を得た姿である。自我が消滅し主の完璧な道具と化した。主の願いはあらゆる手段を持って完遂する。道具はただ振るわれていれば良いのだ。

番外編：平穏を求む怪人。
何時か在りし日の物語。

時は戻り、これは何時かあるはずだった…　あるべきだった物語。数多ある世界線の内の原初の物語。

Z市のゴーストタウンのマンション…　そこで1人のリーマンが首を切られて高熱を出して悶絶してる様子が見て取れる。彼の名前はアシナ、しがない…　なんの変哲もないただの1市民であり一般会社勤めのサラリーマンである。彼はこの高熱で怪人になるなどとこの段階ではよそうだにしていなかった事だろう。日が暮れ夜が訪れる。そして彼の呼吸が止まってしまう…　ここから始まる彼の物語。

アシナｓｉｄｅ

1日寝たら大分回復した。

そのまま上に体を伸ばして気分を変える。

…　え？あれ？なんか…手…冷たくない？

人間の体温では絶対感じることの出来ない。まるで血が通ってないように感じる。試しに脈を測って見るが……

あっ…これ死んでますわぁ。しかも、死んでるのに動けるとかこれ、完全に怪人ってやつですわァ

「ひっ…」

短い悲鳴が出た。どうやって活動出来てんのこれ？血が通ってなかったら普通動かなくなぁい？

怖くなって後ずさる。

ゴト…

何かに足がぶつかる。こんなとこにはものなんて置いた記憶がないが。

ん？刀？ふむコレで死ねと言うんじゃな？…いや無理無理無理。

いや…待てよ怪人になるって事はヒーローに狩られるってことか

？いやいやそれも無理でしょ…でも、どうせ死ぬのなら…我が刃で死んでくれようぞォォォォ

半ば狂乱になりながら刀抜いた

チャキ…スーーー

刀身は赤黒く驚く程に美しい。正に芸術品、昔の人達はこんな綺麗なもので殺し合いしてたのかと思い耽る。

はっ…気を取られてる場合じゃない

「さらば!!!!!!我が人生よ!!!!」

首に刃を推し当てようとした瞬間手が止まった。と言うより刀が進まない。

（またれよ我が主よ命は大切にするものだそれが自らの物なら尚更という物だ）

…こいつ脳に直接!?脳がプルプルと震えてるような感覚に陥る。十中八九こいつだよな？声の主は？

（左様）

刀は短く応えると部屋が霧で包まれる。そこに立って居たのは俺と同じ位の着物を着込んだ侍さん。

「我は其方の半身。其方が絶望の淵にたった時に我が生まれた。世界の不条理に対して抗う力を。この世の全てを深淵に包む力を…」

え？なんかすごく壮大だけど仕事辞めたショックでこいつ生み出しちゃったの？やばくない？俺ってそんなに心に傷おってたの？

（なんなりとお申し付けを我が主よ。）

え？やば・・・ ヒーローに狩られそうになるならいっその事ヒーローになって内部で頑張・・・ いや無理だよそんなのそんな勇気があったら今頃昇格してうっはうっはだって・・・ 取り敢えず寝よう、寝て起きたら考えよう。

俺は惰眠を貪り夕刻まで寝ることを選んだ。

紅色

あー結局ふて寝しちゃったよ。相変わらず血のかよってない手で額を覆う。

飯は取らなくても何とかなりそうだな・・・ 経費が浮く、働かなくても何とかなりそうだ・・・ 問題は高熱費と家賃だけど・・・ 家賃は格安だから退職金と余りある預金で凌げ・・・ 高熱費も余裕やん・・・ 食費は出さなくていいし。あれ意外とこの体有能？喉が乾いた・・・ 水でも飲も。腹は減らないけど喉は乾くのか笑える。

自嘲しながら台所に向かい水を飲む。

おかしい・・・ 乾きが取れない。何が起きてる？水は今飲んだ筈だ。

「主よ如何したか？」

刀が侍になって訝しげに近づいてくる

「喉が・・・ 乾いた・・・ 乾きが取れないんだ。」

「ふむ・・・ 我は血に関する能力を有しており主食は血となっております・・・ 主の主食も一緒なのでは試しに我が昨日採って来たものをお飲みになっては？」

侍から渡された小皿には紅い血がドロリと注がれていた、それを舐めとると乾きが収まり落ち着く。

「はぁはぁはぁクッゥはぁはぁ。マジで血を飲んだら乾きが取れたよ・・・ 食費は浮くけど心労は溜まってくな・・・ 今後どうしよう。てか今の血はなんの血だ？お前の血か？」

「昨晩に殺した怪人の血となります。」

あー嫌悪感ゼロだわー、ふーんとしか思わなかった自分がすごい嫌だ。

「ふーん。あっお前って名前とかある？」

「ありませぬ、主が決めてくだされ。」

「んじゃあ『蝙蝠』でいいよ血を主食としてるし・・・ 赤いし。」

「では今後そのように名乗らせて頂きます。」

我ながら適当に名付けたなぁ。

その後数日間、昼間は寝て夜に人気が無くなった時を見計らって怪人や人を襲い・・・ 殺し、喰らい続けた。
街の路地裏で夜中までほっつき歩いてた女性を襲い、蝙蝠を首に突き刺して血を啜る。殺戮に対しての抵抗なんて最早無かった、これも食物連鎖と思ってくれ。貴様ら人間だって豚や牛を殺し食卓に並べ、あまつさえ道楽しているだろう?それと同じだよ。
路地裏の影の中1人で食事を楽しんでいると何か気配を感じた。人か?それとも怪人?どちらせよ食材であることには変わりない・・・濃厚で芳醇な血の香り・・・ 喉が自然と鳴るのが分かった。
「見つけたぞ!お前がミイラ死体の犯人か!?A級ヒーロー!ブリンクが相手だ!」
「あぁ今日は実に運がいい日だ・・・ 2度もご飯にありつけるなんて・・・ そして君は運が悪い・・・ 今日で人生が終わってしまうなんて・・・」
相手の方を振り返ると自然と笑みが零れる。
目は半目で赤く煌めき口は今宵月のように孤を描き、発せられる声は鈴の音が如く響く。ヒーローと名乗る男にはさぞ恐怖を植え付けた事だろう。
さぁ食事と行こうか・・・
それは勝負にすらならなかった。相手が動く前に相手の足を切り落とし、手も落とした、そして蝙蝠の能力で傷口を焼き止血する。悲鳴が出せないように手頃な布を口に突っ込み食事を開始する。
「んー!?んー!!んーんー!!」
「頂きます・・・」
サクッ
刃は首にスっと入っていき血をゆっくりと吸い上げる。
蝙蝠が吸った血が自分の中に流し込まれてくる感覚に高揚しながら切り取った腕から零れる血を喉に流し込んでいく・・・ 今宵夜が永く夜はまだ明けない。渇望は収まることを知らず次の獲物へと歩を駆りたてる。
彼は蝙蝠を引き摺りながら夜の闇へと消えていった。

捕食者

蝙蝠ｓｉｄｅ

時は昼間、我は今主の枕元にたっている。理由は一つ我が主の体を魂ごと喰らうためだ・・・ 血に酔い、溺れ、暴れ、嗤うこやつを既に主と見なしていないのが悲しきことだ・・・

「フッ」

鼻笑いが自然と出る。我は元と言えど主の剣詰まるところ主など歯牙にかけるほどでは無い。さしたる障害では無いのだ・・・ 我は主を吸収して完全な我となる。主の道具でも半身でも無く我自身として！我がアシナになるのだ！

「済まぬな・・・ 主よ・・・ 我とひとつになられよ・・・ 御免！」

刃の切っ先を魂の上に持っていき突き刺す。しかし刃は手に捕まれ勢いが止まる。

「ヒトツニナルノハ、キサマノホウダ」

主から主でない声と煙が飛び出し、刀を構える間もなく体が包まれる。

「ぐっ!?なんだこれは！離れろ！離れ！はな・・・」

これが・・・ 野心に飲まれ主を暗殺しようとした者の末路か・・・

蝙蝠の意識は途絶え、後に残ったのは黒色に変色した蝙蝠の抜け殻の刀のみであった。

アシナｓｉｄｅ

「腹減った・・・ 飯食いいくか」

日がな寝て過ごし今日も狩りに出かける。今日はどこに食べに行こう・・・ 怪人が人を襲ってる時が良いな・・・ 綺麗に助けて感謝された所を喉にブスリ・・・ 堪らねぇヨダレが出る・・・ 人は絶望した直後の血が１番濃厚で味わい深い味をしているのだ、目をひん剥いて何故って顔してるのを摘みに血肉を啜り喰らう、かぁーー堪んねぇなぁ。俺はグルメなのだ、美味い味を求めて何が悪いのだ。

「蝙蝠出るぞ・・・ って、ん？」

蝙蝠を呼ぶが返事は無く足元には別の黒い鞘の刀が無造作に置か

れていた。
　刀を抜いて刀身を見てみる。蝙蝠とは違い普通の鉄のような金属で作られており、Ｔｈｅ刀と言う印象を受けた。しかしその刀にも蝙蝠同様美しさと芯がありその輝きに魅入られてしまう位には心が動かされた。名前が気になるとふと思った。刃の根元に目を向けていくと鍔の周辺に『夜影』と掘られていた。その名を見て認識した途端夜影の蝙蝠を飲み込んだという記憶が流れてきた。
　そうか･･･ お前は俺を守ってくれたんだな？
　刀は何も言わない、動かない。しかし肯定しているように感じた。
「お前は･･･ 人になって喋れるか？」
「肯定します･･･ なんなりとご命令を･･･ 主よ。」
　髪は白色で西洋人形のように整った顔に黒色の着物を羽織っており、女性を思わせる発達した胸部に病的なまでに白い肌。人並の感覚器官が備わっていたとしてもそれを穢すなど、考えられない位整っており刀の見た目通り芸術品をイメージさせる外見となり目の前に現れた。人になれるなら最初からなってくれよ･･
「お前が夜影なのか？」
　試しに問いかける、意思の疎通ができるか分からないからな。
「肯定します。」
　どうやらできるらしい。ならば蝙蝠についての正確な答えを聞こう
「お前は蝙蝠より強いのか？蝙蝠をどうした？」
「先ず蝙蝠より強いと言う質問ですが肯定します。先程までの私ならまともに戦えば粉微塵にされておりました。しかし今の私はかの刀を凌ぎます。そして２つ目の質問の回答です。私はやつを喰らいました。私はかの刀の能力は一通り継承しておりますのでご安心下さいませ。」
「おっおぉ･･･ 分かった理解した。まぁいいや刀に戻ってくれ。」
「仰せの通りに。」
　刀に戻り俺の手に収まる夜影。どこのなろう主人公だよ･･･ 美少女擬人化刀が相棒とか･･･ まぁいいや飯食ってから悶えよ･･･

俺はベランダから外へ出て夜の闇へとその身を溶かした。

怪人協会

路地裏でびちゃびちゃ、ずるずる、ぐちゃぐちゃと言った咀嚼音が児玉する。口を弧に歪め、目は座り、血を啜り肉を噛む。獣の様な食べ方をする影が1人。

「おい・・・ 本当にこいつなのか？スカウトするのは・・・」

「位置情報と人物像は合致してるからそうなんじゃないのか？」

まるで太古のプテラノドンの様な外見と、人と同じ大きさの人ならざる物、そしてティラノサウルスのような顔をした人型の物・・・ アシナを探していたようだが食事中の彼に遭遇してしまったのが彼等の運の尽きと言わざるを得ないだろう。

怪人達の声を耳に入れた彼はゆっくりと立ち上がり。怪人と思われる人ならざる物達に背中を向けながら言葉を連ねる。

「あぁ今日もご飯に困ることは無さそうだ。くくく・・・ 女性の柔らかい肉や、味わいが深い血もすごくいい物ではあるのだが・・・ 偶には妙齢の男性や怪人のさっぱりとした血肉を屠らないと、舌が疲れてしまうと言うものだ。なぁ？そう思うだろう？」

彼はゆらりと首だけ怪人達に向けて、ニタリと笑ってみせる。月明かりに照らされ、血まみれの口周りに血のように紅い瞳は、見たものに確実に恐怖を植え付ける事だろう。現に怪人達の顔はひきつりながら体は後ろに後ずさる

「あっ・・・ あぁ!?なんだよ!?お前！おっ俺様は災害レベル鬼のプテノ様ママママママ・・・」

「あ？お前どうし・・・ ッ!?」

ティラノ型の怪人が気づいた時には何もかも遅かった。なぜなら既に翼竜の首が切り落とされており。身体から鮮血が飛び散っているところだったのだから。友を殺され、残された怪人には何が起こっているかなど見当すらつかなかった。今まで見据えて居たモノはその場から1歩足りとも動いておらず、依然背中を向けた状態。変化といえばただ黒い刀を抜いており右手にそれが握られていると言うだけの状態だったのだから。

「お前!何をし・・・」
それが彼の・・・ 最後の言葉だった。

ぐじゅぐじゅびちゃびちゃ。再び路地裏には咀嚼音と啜り上げる音が木霊する。バリバリボギョ。かの物は殺したもの達に経緯を示し骨の1片すら残さないのだろう。その全てを糧として自らに収める、なんと貪欲な事だろうか。
「ご馳走・・ 様でした・・・」
食べ終えて手を合わせ終えた彼の元に1人の男が現れる。
「見事な食べっぷりだな?推定災害レベル虎と言われている・・・ 怪人闇喰らい殿?」
アシナは最初その名前にピンと来なかった。それもそのはず彼がヒーロー協会に既に目をつけられ怪人名が付けられているなどと想像としていなかったからだ。
「随分と落ち着いているな?先程とは大違いだ。」
それもそのはず、彼は狩の時と平常時を使い分けている。惑えば死に行く。狩ることができるのは常に狩られる覚悟がある物だけ・・・なれば狩りに手は抜かないし相手の油断が取れるならどんなことだってしてのける・・・ それがアシナと言う1人の狩人の考えである。
「ＯＮとｏｆｆの使い分けぐらいできるさ・・・ それで?君は僕に何の用だい?私のご飯になりに来たって訳ではないだろうし俺と世間話でもするつもりかい?残念ながら僕は今の世俗に疎くてね。君の期待に応えられるような回答は・・・」
「・・・ ふむ?まぁいい・・・ 要件は怪人協会・・・ 怪人のみで構成された集まりに貴様を招待しようって言う上からのお達しが出た。」
そう言って鳥男が自らの名刺と怪人協会と言う子供が書いたようなカードを渡される。
「とりあえず話だけでも聞きに来ないか?」
アシナは暇だったので話だけならいいかと言う浅はかな思考の元鳥男に案内されながら怪人協会のアジトを目指した。

暫く歩きZ市の地下深くに到着する。彼が地下深くで目にしたのは1つ目で手が頭から沢山生えた太った怪人と、物凄く大きく凄まじい威圧感を放った怪人だった。
「よく来てくれたねぇ… 怪人闇くらい… いやアシナ君?」
非常に声がねっとりとしており、耳に… いや脳髄に染み付くような語り方だった。
「私の名前はギョロギョロ、怪人協会で参謀と言う立ち位置に着かせてもらってるよ… 早速本題に入らせてもらおう。君はまだ怪人になっても日が浅い、それにも関わらず災害レベル鬼2人を一瞬でやっつけてみせた… それに過去にはA級ヒーローを瞬殺している実績を持っていると言うじゃないか。S級下位なら既に相手取ったとしても負けない実力を持っているだろう?是非とも我が協会に加わって貰いたいと考えている… そうすれば幹部の座は固い… いや幹部の座を用意すると誓おう。」
ギョロギョロから絵がで褒められて入るように言われた。が、特にメリットも思い浮かばないので断わろうと口を開きかけるとさらに好条件を提示された。
「君はまだ迷っている、若しくは断ろうとしているね?ならば君には宿も提供するし、ある程度なら衣と食も提供しよう… もちろん家賃も高熱費もタダだよ?なんなら部屋を見てもらってから決めて貰っていいし部屋も好きに改造してもらって構わない… どうだい。」
確かに好条件だった… 雨風凌げる場所どころかご飯も多少支援してくれるらしい… しかも幹部レベルは確実と言うことはある程度のワガママや融通は聞きやすいと言うことにほかならない… ある程度好きに暴れられて重責も感じず悠々とすごせる… ここまで言われたら答えはひとつだ。
「わかった。ギョロギョロと言ったか?私も怪人協会に加わろう。俺が入ったからには相応の活躍には期待して貰って構わない。僕は今そこそこ強いみたいだからね。」
ギョロギョロが笑顔になり。それは良かったと良い、部屋に案内してくれるらしい。部屋に着くまでにギョロギョロが独断と偏見で決

めた今の俺の推定災害レベルと怪人協会で必要最低限守ってもらいたい事、他に存在する災害レベル竜以上の説明やフロアに居たクソデカ怪人（オロチと言うらしい）の事を教わった。
「ここが君の部屋になるよ…　それじゃあまた集会の時にね。」
部屋は真っ白で無骨な部屋だった…　後でホームセンターで家具を一通り揃えよう。
紅い目を煌めかせながら1人ウキウキしたまま部屋を出て地上に向かう。

衝動

部屋を改修し終えたアシナは刀を腰に差して協会内の探検に出掛けた。

暫く道を覚えながら進んでいくと後ろから声を掛けられる。

「少しいいかい？君は新入りだろ？ならばなぜこの昆虫王である僕に挨拶に来ない？不敬ではないか？細切れにされたいか？」

カブトムシの頭にカマキリの腕と胴、イナゴの足をしたよく分からない物に声を掛けられる。アシナは先程のギョロギョロの言っていた幹部の1人である昆虫王なる人物の名前と一致させる。

そうか… こいつが。

「これはこれは… 失礼致しました昆虫王殿。では不詳ながら名乗らせて頂きます、本日から怪人協会に入会させていただきました、アシナと申すものでございます、手土産等はございませんが以後お見知り置きを…」

下手に問題を起こすことを嫌ったアシナは下手に出ることを選んだ。

「ほう？君は目上への口の聞き方を心得ているようだなぁ？ククク… いいだろう君のその態度に免じて細切れは勘弁しておいてやる。感謝しろよ？… ん？おい!?そこの害獣！僕の配下に手を出すなァァァ!!!」

昆虫王は凄まじい速さで俺の横を通り過ぎてはるか向こうの方まで行ってしまった。あれが竜の速さか… 対峙するのも面倒くさそうだ。

引き続き探検を続けた。暫く廊下を歩き続けお腹が空いてきてしまった。腹がキュルキュルと栄養を求める、目が血走り口端からヨダレが垂れていく… ギョロギョロは余り協会内の怪人を食うなと言っていた… 問題も起こすものでは無いだろう… しかし非常ひまずいことになった。溢れる欲を抑えられない。目が獲物を求めひっきりなしに動くが瞳に獲物は捉えられない。

もう… 限界だ…

「ん?お前は新い・・・」
1つ目の肉が曲がり角からちょうど現れたので首を跳ね飛ばす。
グチグチ、ビチィ、チャグ・・・ チャグ、ジュリュリュ。
生物的嫌悪を催す音が廊下に木霊する。手で血を掬い啜り、肉を噛みちぎる。衝動で行動する悪癖をどうにかしないと行けないな。口元の血を拭いながら今しがた起きたことを反省する。
血液パックでも作るか?まぁギョロギョロに要相談だな。
衝動は収まったのでまた歩みを進めた。

sideギョロギョロ
首輪を付け手懐けるのは骨が折れそうだ・・・ 怪人闇くらいを遠隔カメラ越しに見た感想はそれだった。対価さえしっかり渡せば大丈夫だとは思うが・・・ 奴の秘める力とあの刀。育てれば下手をすればオロチ様をも超えうるかもしれない逸材。面白い・・・ 多少噛み付いてくれた方が育てがいがあると言う物だ。奇妙に感じた点だがなぜ彼は一人称定まって居ないのだ・・・ それどころか雰囲気が掴めない。幼い少女の印象を受ける時もあれば妙齢の紳士の時もある・・・ 田舎の荒くれ者かと思えば急にしおらしくなる・・・ まぁ使えると言うのなら詮無き事か。
「さて・・・ 戦力は整ってきた、闇くらいが落ち着けば本格的にヒーロー協会に攻める日も近いだろう・・・ ククク・・・ ハッハッハッ」
目の前すぐ近くにある怪人の勝利と言う2文字が浮かんで私は高笑いを抑える事など出来なかった。

怪人を狩る怪人
首切り

メールを見る、『明日からもう来なくて結構です』短く、無慈悲に、冷徹にそう告げられた今日。俺、アシナは…無職になりました……良し！寝よう！

俺はショックで考えることを放棄して不貞寝を選んだ

翌日の朝目が覚める、凄く体がだるい。ベッドの上でモゾモゾと動く。

「たっ体温計…」

這うように、寝室からリビングへ移動して救急箱の中から体温計を取る。

ピピッ

「よっ４３度……オイオイオイ死ぬわオレ」

どうやら精神的にだいぶ参ってた見たいだ…あの職場は、ブラックじみてたから。気を取り直して次に活かせばいいものをいつまでもぐじぐじと、まだうら若き２４歳だぞ。さぁ立つんだ…ウッグゥ…ゲボァ

ふぅ…薬を飲んで寝よう。

１日寝たらとても元気になった。なんだろう力がみなぎって来る感じ。今なら何だって出来そう！

両手をクロールの手にして上に伸びをする。

あれ？なんか…手…冷たくない？

人間の体温では絶対感じることの出来ない。まるで血が通ってないように感じる。試しに脈を測って見るが……

あっ…これ死んでますわぁ。しかも、死んでるのに動けるとかこれ、完全に怪人ってやつですわァ

「ひっ…」

短い悲鳴が出た。どうやって活動出来てんのこれ？血が通ってなかったら普通動かなくなぁい？

怖くなって後ずさる。
ゴト…
何かに足がぶつかる。こんなとこにはものなんて置いた記憶がないが。
ん？刀？ふむコレで死ねと言うんじゃな？…いや無理無理無理。
いや…待てよ怪人になるって事はヒーローに狩られるってことか？いやいやそれも無理でしょ…でも、どうせ死ぬのなら…我が刃で死んでくれようぞオオオオ
半ば狂乱になりながら刀抜いた
チャキ…スーーー
刀身は赤黒く驚く程に美しい。正に芸術品、昔の人達はこんな綺麗なもので殺し合いしてたのかと思い耽る。
はっ…気を取られてる場合じゃない
「さらば!!!我が人生よ!!!」
首に刃を推し当てようとした瞬間手が止まった。と言うより刀が進まない。
（またれよ我が主よ命は大切にするものだそれが自らの物なら尚更という物だ）
…こいつ脳に直接!?脳がプルプルと震えてるような感覚に陥る。十中八九こいつだよな？声の主は？
（左様）
刀は短く応えると部屋が霧で包まれる。そこに立って居たのは俺と同じ位の着物を着込んだ侍さん。
「我は其方の半身。其方が絶望の淵にたった時に我が生まれた。世界の不条理に対して抗う力を。この世の全てを深淵に包む力を…」
え？なんかすごく壮大だけど仕事辞めたショックでこいつ生み出しちゃったの？やばくない？俺ってそんなに心に傷おってたの？
（なんなりとお申し付けを我が主よ。）
とりあえず死ぬ気失せたから外に散歩でも出ようかなぁ？
（では我も同行致します。）
侍はそう言うと霧となり刀に戻った。俺はよくわかんなかったか

ら刀をベルトに帯刀して外に出た。
　扉に鍵をかけて公園辺りまでフラット出かけようとする
「あっお隣さん」
「ん？おう、こんにちは」
　この人は俺のお隣のサイタマさん趣味でヒーロー活動をしてる人だ。ヒーロー協会には登録してないらしい。
（主よあの者…只者じゃありませぬ。奴の纏う闘気。我の実力を遥かに凌いでおります。）
　いやいや貴方まだ生まれたばかりですよね？
（主が、寝込んでる間にこの市内の異形を一通り狩り尽くし学習した上での評価でございまする）
　え？やばっ…（；゛。，ω。，）…コワァ
「どうした？体調でも悪いか」
「いや！大丈夫ッスゥ！それでは自分公園まで散歩に行くので。またっ！」
「おっおうまたな」
　俺は怪人と勘づかれる気がして足早に公園まで向かった。

カッパエビクッキー

ゼェ…ハァ…ゼハァ…久しぶりに走った。たがだか数百メートルだが長く感じた。さて怪人になっちゃったけどどうしようか。（小並感）

「とりま一服……？」

部屋にタバコ忘れてきちゃった。やっべどうしよやっべやっべ。

（主よこちらを）

おっ俺の愛して止まないリィンシトーンじゃん気が利くね。侍状態の刀が俺のタバコを差し出してくれた

（火は我の術で付けましょう）

素直に感謝だわ。有能すぎん？この子？

スゥーーーハァーーー

あー^ たまらねぇぜ

（して主よ今後の方針は如何程に）

「怪人になっちゃったけどさ？今の俺の力ってどれくらいあるの？1太刀でビル切り裂けちゃったり？」

（我が主の体を操作して我の力を付与すれば可能でございます）

「俺個人のステータスは？」

（生前と変わりませぬ）

まぁじかー怪人になったからって俺自身が強くなったわけではないのかァショックだなぁ

（只主も我と同じで体に成長機能が着いて居られますから生き物を倒せば倒すほど強くなることができます）

ゲームみたいな感じか。んじゃお前でパパって殺ればいいの？

（我で狩っても主は少ししか成長なさりません。我は主の半身、成長具合も半分でございまする）

ズルはするなってか

（ですので主の身体能力が定まるまで我では無くこちらの、焔刀『夕日』をお使いになさって下さい）

何？これどこから出したの？

（我の能力の1つの焔纏いを具現化させ無理矢理刀の形にした拘りの一振でございまする。）
いやそんなドヤ顔で言われても
夕日と言われた刀を見てみると真紅の刀身がとても綺麗な素人目から見てもとても素晴らしいと思える1品だ。
そういやお前の名前って聞いてなかったなお前なんて言うの？
（名はありませぬ）
そうか俺が付けてもいい？
（身に余る光栄でございまする）
そうだなぁ妖刀っぽいしなぁ血とか吸ったりするの？
（左様）
あっほんとに吸うんだ怖ァ。血を吸うとかドラキュラっぽいしドラキュラとか蝙蝠だし名前蝙蝠でいいや
（はっ）
さてじゃあ本題に戻るか。とりま怪人狩りは確定として。
光熱費とかどうしよう水道代とか職につかなきゃ…やっぱヒーローしかないのかぁ…まぁ怪人狩ってればなんとかなるでしょ…てか今の俺一般人のままだよね夕日貰っても振れねぇじゃん
（安心してくだされ我の記憶を一部譲渡致します。今の主の身体能力で着いて行けるか分かりませぬがないよりはマシでしょう。）
おっおっやっべやっべ頭の中になんかめっちゃ入ってくる。
ぐわんってなったぐわんって
（これで少しは変わると思われます）
んじゃテキトーにぷらっと歩いて怪人探すか

「私の名前はエビビール。カッパエビクッキーをツマミにビールを飲んでたら怪人になって（スッ）ｔｏあーーーアトゥイアトゥイアトゥイアットゥイ」
おーすげこれが感覚って奴か、記憶通りに刀降ったら相手の腕が落っこちたぞ。
「ククク」

なんだろうこの全能感やっべぇすげぇ暴れた……はっ!?俺今何考えた?いかんいかん
「オレハニンゲン　オレハニンゲン　オレハニンゲン」
自己暗示だ自己暗示を掛けろ俺は心は人間のままだ、心まで怪人になったら狩られちまう
(大丈夫か?我が主よ)
あぁ大丈夫だ大丈夫大丈夫そうだ怪人討伐を協会に報告しようそうすればヒーローに慣れるかも。信用を勝ち取ればいざバレてもなんとかなるはず!
「あのーすいません怪人に襲われたんで討伐したんですけど」
「はい?あの今から確認に向かいますので場所をお願いします。」
「Z市の××○○です」
「はっはい分かりましたすぐ伺います」
「なんであんな焦ってたんだ?まぁこのZ市だしゴーストタウンだし人がいる事にびっくりしたんだろうなぁ」
でも俺…引っ越す金もない(ＴωＴ、)まぁ俺が引っ越したら、サイタマさんの世間話し聞けなくなるし、あの人とは何気に付き合い長いし髪ある頃からだしなぁ。
まぁいいやタバコ吸お…あっライターないや。
(火です我が主。)
おっサンキュ。まじで一家に一振『蝙蝠』が欲しくなるなぁ
俺は一服しながらどうでもいい事を考えていた。

始動開始

あの後協会の役員がヒーロー連れて調査に来た。
そしたら試験を受けて見ないか？って言われたから来てみました！ここヒーロー協会本部！
（主よ身体能力の件は我の力を６割譲渡致します。自分を強く持って下さい。）
１０割じゃないのか？
（自我が崩壊して破壊の権化となりえますぞ？我は元々…）
わかったわかったわかったから。でもまぁまだ成長は始まったばかりだしなぁ。でもあの怪人倒しただけで力が底から湧いてくるんだよな。これが成長ってやつか人間ってことを忘れずに成長していく。目指せ人間らしい生活！
目指せ夢のヒーロー生活。
さて本番だ
「次！反復横跳び（ふー）３０秒！」
シュタタタタタタタタタタタタタ
やっべコレで６割かよ制御効かねぇ
ピー
ホイッスルが鳴る。
足が吹き飛ぶ足が吹き飛ぶ足が吹き飛ぶ足が吹き飛ぶ。てか感覚はあるのに、痛覚ないのまじで気色悪ぃ。俺ほんとに死んでんだな（；ω；）
その後１５００メートル走や重量上げ。垂直跳び等など、色々やったがどれも人間辞めてる結果だった。
コレで怪人だと疑われてたらどうしよう死ぬよな？確実に死ぬよな？
俺はビクビクしながら筆記会場に向かった

いや筆記簡単やったわ一般の会社の入社試験レベル。これでも元社会人です。まぁ落ちまくって行き着く先はブラック企業でしたけど。（；ＴωＴ；）

でもあのレベルなら９０点は硬い…（　•；∀•；　）ドヤァ…面接の質疑どうしよう志望動機とか今のうちにサラッと下準備しとこ

全ての内容が終わって待合室で待つことになった蝙蝠と夕日を帯刀して座ってタバコ吸いながら結果を見てる。

【９８点貴方をｓ級に認定します】

あっ…蝙蝠からの譲渡３割にしとけば良かった…

まるでライトノベルの主人公みたいなことになったが１つ言わせて欲しい。・・・・・・『蝙蝠』は俺の半身だから俺の力ですぅ。誰がなんと言おうと、俺自身の力デスゥ…はいすいませんガッツリ不正しました許してぇお兄さん達許してぇ心壊れちゃーう

ふざけてないでセミナーを真面目に受けて帰り道Ｚ市のゴーストタウンに入ったところで手頃な怪人を夕日で切りながら公園でタバコ吸って帰った。

Ｓ級になってから数ヶ月経ちました。いやぁ今日も世界は平和ですヒーローネームも決まって怪人も沢山狩ってだいぶレベルアップもしました。最近成長止まりがちだけど

「ヒーロー首切り！直ぐにＡ市に向かってくれ!?」

連絡が来た。さてヒーロー活動だ。今日も偽れ人間生活

Ａ市に比較的近くに居たから早く着いたけどこれは酷い。

む？

「私は人間共が環境汚染を繰り返すことによって生まれたワクチンマンだ！」
おーおーなんか言ってる言ってるあれは…誰だろう遠くて見えねぇあっやばなんかパワーアップしてる見てる場合じゃない。
俺は全力でワクチンマンなる怪人の元に駆け出そうとした。その時だった
ドボグジャー
は？
怪人が一撃で弾け飛んだのだ。漫画だったらアホ顔で鼻水出しながらポカーンってしてる事だろう
（この高エネルギー反応間違いない…やつだ）
うそ？サイタマさん？
あっだれか飛んでった気になるし追うか。あぁ俺の手柄じゃないから協会にそれだけ言っとかないと
「あーもしもーし」
「おー首切りさん終わりました？」
「いや俺が行った時には全部終わってたよ。死体の破片残ってるし俺がやった事じゃないのは分かるはずだから後よろしく。」
「はぁ今そちらに協会の者が向かってますので。」
「あっそう？んじゃ後よろしくぅ」
「あっまってく…」
ツーツーツー
さてサイタマさんの所に話聞きに行こうか
（主よ奴は家に戻った見たいです）
わかった行こう。

強者と怪人

急いでサイタマさんを追ったけど。僕が家に着いた時には既にまたどこかに出かけていた。
あの人立ち去るの早過ぎない？
（エネルギー反応の追跡を致しますが如何なさいますか？）
いやいいよ。一服してからパトロールでも行こうか。
（御意）
俺は家に入ってベランダに出る。
シュボッ　スゥーーーフゥーーーー
にしてもまさかサイタマさんのヒーロー話が本当だったとはそれが1番の驚きだな。この人作り話すっげぇうめぇって
思いながら倒した怪人とかの話し聞いてたけど。ワクチンマンをワンパンかぁ。今の俺でも全力の一閃で首断ち切れるかどうかなのに。
「あの人と戦って勝てるビジョンが浮かばないなぁ」
もし俺がヒーローじゃなくて怪人として外に出ていたら。あの人のような人に為す術もなく殺られてたのかなぁ。A級の人達も何気強いしなぁ。でも俺個人のステータスは一般人レベルだったけど、蝙蝠はめちゃくちゃ最初から強強だったしなぁ。今じゃ多分蝙蝠だけで竜ありそうだもんなぁ。
どうでもいい事を考えながらタバコを消費していく
6本目を吸い終えて重い腰を動かす
「良し！動くか」
家の戸締りをして、玄関の扉に鍵をかける。
「あっアシナじゃん」
「ん？あぁサイタマさん。こんにちは」
「おう」
ちょうどいい所に来たな。ワクチンマンのことを聞くか
「サイタマさんさっきワクチンマンとか言う怪人と戦ってませんでした？」

「ん？ワクチンマン？誰だそれ」
　マジか。まぁワンパンだったし覚えてないか。
「ほら触覚ビヨヨーンってなってた紫色の奴」
「あぁアイツね思い出した。アイツがどうかしたか」
「いや普通に強そうだったのにワンパンで倒してたから凄いなぁって」
「いや今までもそう言った話してきたじゃん。まさかお前信じてなかったな？」
　サイタマさんは失礼なと言った少し不機嫌そうな感じで言ってくる。
　そりゃあ最初聞いた時はボロボロで血を流しながら話してけど。1年超えた辺りから無傷で帰ってきてどんな怪人をどんな風にワンパンしたかに変わったから。あぁ危ないこと辞めたんだなぁぐらいにしか思いませんて。
「いやぁすいません。でもワクチンマン見てて確信に変わりましたよ。」
「そうか。なら良かった今後も怪人の話いるか？」
「是非お願いします。サイタマさんの怪人の伝え方擬音ばかりで面白いですし」
　トゲトゲでギュォーーーンって感じだったとか目がブツブツブツって会ったとか聞いててクスッと来る内容が多いのだ。
「お前も用事あるんだろ？俺は今から飯作るからんじゃまたな。」
「はいまたよろしくお願いします」
　あっサイタマさんにヒーロー協会のこと話損ねた前から言おうと思ってたんだけどなぁ・・・まぁいっか。あの人仕事としてじゃなくて趣味でやってるらしいし。趣味が仕事になったら嫌なタイプだろうし。
「おっとパトロールパトロール。」
　俺は蝙蝠と夕日を帯刀して今日も街を駆ける

手合わせ

ワクチンマンの件から数日たった。その間にジェノス君という子がサイタマさんの家に出入りするようになった。

普通に怪人狩りに言ってたから気づかなかったけど家のアパートの前に肉片やらなんやら散らばって1人で（´？｀）ウヒィってなってた日もあった。S級って何気多忙だし色んな市を回ってるから家にいる時間減ってるんだけど。サイタマさんの話が好きでよく戻ってる。今日の話だと関節のパニックって人の金的を誤って殴った話は、腹を抱えて笑わせて貰った。

後は経験値に頼らず素振りだったり筋トレだったりを始めた。蝙蝠曰くそう言うのも少なからず経験値に繋がるから無駄になることはないらしい。

ピンポーン。

今日はヒーロー活動を早めに終えて家で筋トレしてると、呼び鈴が鳴る。

「はーい。ん？サイタマさんにジェノス君？」

「少しいいか？お前ってヒーローなの？」

あれ？サイタマさんに話してなかっ……たねぇ話すタイミング逃してたわ。でもなんで知られた？どこかで怪人切ってるの見られた？

「そうだけど？」

「なんでヒーロー協会の事を教えてくれなかったんだ？」

「いやぁ話すタイミング無くてね。今日の要件はそれだけ？なら家でご飯でも食べてく？今、　夕飯時だし。」

俺は久しぶりにサイタマさんをご飯に誘う。就活時代は良く2人で外食とかして愚痴りあってたんだけど。僕は社蓄にサイタマさんは趣味を始めてから時間が取れなくって無くなって行ったんだ。

「おっ良いのか？ジェノスも良いよな？」

「はい大した物は出せませんが食べていって下さい。」

「先生それより明日の件で相談をしなければ…」

明日の件？なんかあるのか？
「あぁそうだ。お前って結構強いんだろ？だからジェノスと手合わせして貰えないかと思って来たんだ。俺もジェノスとは手合わせするつもりだけど。そう言うのって多い方が良いイメージあるし。どうかなって」

あぁそう言う。まあ断る理由もないし受けるか…あれ？ジェノス君ってサイボーグだよね。俺って成長するの？
（我は成長する事はありませんが主は動いた体が記憶していきます。）
マジかデメリット無し。んじゃ受けるか
「是非よろしく頼むよ。それじゃあ今夜のお酒は控え目にしますか」
「おっ酒まで出してくれるのか。」
「先生飲酒は程々にお願いします。先生なら大丈夫でしょうが万が一明日に差し支えても行けませんし」
「全力でやるわけじゃないんだろ？」
「俺は先生の全力を引き出すつもりでいきます。」
「まぁまぁそんな事より入った入った。」
俺とサイタマさんは談笑しながらジェノス君は何かメモを取りながら楽しく夜を明かした

「今日は俺の我儘を聞いて貰って有難うございます。」
「いーよいーよ。この後サイタマさんが控えてるみたいだし。壊さないように気を付けてやるから。」
「壊して頂いても構いません。壊される様でしたら、先生とは勝負にすらならないでしょう」
おっ言うねぇ。

（主よあの機械中々の手練ですぞ）
おっけぇ。まぁなんとかなるよ
「先手は譲ったげる。何処からでもおいで。」
初手で決められるとかはカッコ悪いし。初手はなんとか防がないと
「分かりました…では！」スッ…
消えた？…裏か！
ジェノス君の拳がさっきまで俺が立っていた地面にクレーターを作る。
ぶっねぇ…ナイス、シックスセンス。体吹き飛ぶわあんなん。
あっまた消えた、うわぁ砂煙で見えねぇ。いや…目に頼るな！空気の流れを感じろ俺！深呼吸、深呼吸
スーーーー……フーーーー
裏っ！いや？上か!?
その場からステップで離れる。
さて反撃と行こうか。
夕日の能力を蝙蝠に戻して蝙蝠の鍔に指を置いて柄に掌をそっと乗せて居合の構えを取る。
先ずは一閃当てよう。話しはそれから始まる
目を閉じて空気の流れを掴む。俺だって素人のまま来てるわけじゃない。蝙蝠とも対人を想定した打ち合いだってして来てる。無茶振りだって答えてきた。全部負けてるし励まされてるだけだけど。
フゥーーッ
雑念を払う隙を見せない。一瞬の相手の迷いを利用しろ。
自分より素早い相手は技で力を埋めろ。
空気の流れが変わった。裏っと思わせて足を返して正面ッッッ！
そこォ！
ブワッ　シュッ
掠めた！
ジェノス君の動揺が伝わってくる。そのまま薙ぎ払いの状態から霞の構えに以降する。

突きで寸止めすりゃ勝ちだよな？上手く行かないだろうけど試す価値ありだしこの構えなら背中以外なら防げるし。

さぁ俺を成長させてくれよォ？ジェノス君。

手合わせ2

霞の構えのままジリジリとジェノスくんに近づく。
さぁ仕掛けてこい。ッて
スピード上げやがっt
ガイーン！
鋼と鋼の高音が響く。
怖ェェ殺しに来てんじゃん手ェぷるぷるするんじゃぁ
カチャカチャカチャカチャ　　ブァン
あっあれ？あれってサイタマさんの話に聞いた…
「焼却!!!」
ですよねぇ…やべぇ範囲外に出なきゃ！
シュバ！
ズン！
危ねぇ。避けることが出来たけど絶対死ぬだろあんなん。
もう死んでるけど。
ゾワゾワゾワゾワ
霞構え継続防げ！
ガイン！
体が真上に吹き飛ぶ。
ジェノス君が決死のラッシュで畳み掛けてくる
少し不味いな全部捌けるけど精神的に疲れる。押しのけるか
「ふぅん！」
力任せに腕を押しのけてそのまま上段に以降する。
血流技「岩砕き」
ズドン！
地面に大きなクレーターを作る。
これは俺が最初に蝙蝠に教えて貰った技である。上段からただ血を纏わせて真っ直ぐに振り下ろす血が真空波みたいに飛んでくから遠距離にもつかえる。…避けられたけど。
これ使った後反動でほんの少し意識が散漫になる。ジェノス君は

その隙を着いて背中から蹴りつけて来た。
グフゥッ
「痛ってぇなぁ！」
体制を建て直して刀を鞘に収める
本当は全然痛くないけど。ゲームやってる時に痛いとか言っちゃうでしょ？そんな感じ。
単純な横薙ぎでジェノス君が居たであろう場所に血纏状態で薙ぐ。
「もう貴方の動きは完全に読めた」
「あ？」
「聞こえなかったか？完全に読めたと言ったんだ。俺は先生の力の秘密を知らなければならないそのために貴方に手こずっている場合じゃないんだ！悪いが次で決めさせてもらう。」
（#^ ω^）ピキピキ
言ってくれるじゃないのぉ？
もう許さない！次の攻撃わざと食らってラッシュに持ち込ませて、虎の子で決める！
ジェノス君がチャカチャカと機械音をさせている…

来た！
横に吹き飛ぶ殴り方！でもこれは多分ブラフ本命はど正直な正面突きだなぁ早めにガード行動をとって相手のブラフに引っかかった振りをする
ビンゴォ見事に的中
そして吹き飛ぶ！
ラッシュラッシュラッシュ！そろそろだな
俺は怪人になった時に俺のみに発現した能力離脱を使用した。
離脱とはなんか蝙蝠曰く魂を、体にストックした血液でコーティングして、人の形を取った無敵状態らしい、普通の人なら魂に干渉することが不可能だから無敵に限りなく近いだのなんだのと無敵をめっちゃ強調された。でも攻撃くらうと血が魂から離れちゃうからどんどん小さくなるらしい。

このスライム状態だとなんか違和感パネェんだよね。まぁスピードとかパワーとか桁違いだけど。
ジェノス君は一生懸命抜け殻殴ってるし
うわぁ壁にめり込んでも殴ってるよ。いや俺グッロ。俺じゃなきゃ死んでるね！俺ももう死んでるけど！
あっ止まった。あっジェノス君がすごい顔してる。あぁ俺は再生能力あること知らないのか。魂さえ消滅しなければ死なないんだよなぁ俺。
さぁ仕返しだ。
「ジェノスくーんこっちこっち」
ジェノス君がゆっくりと落ち込みながら振り返る
なんか悪いことしてる気分になるね。
振り返ってももう遅いさぁ俺の力を知るがいい
血流技『火炎血流』
居合とそう変わらないけど血液を刀に纏わせて着火させたもの。高出力の水鉄砲見たいに血液が凄まじぃ切れ味を誇る。それが数百メートルに渡って横一閃に広がる
ズバンッ。ゴゴゴゴゴゴゴ
あっジェノス君の腰と胴がバイバイしたそれにかなり焦げてる…
あっ山も切れてる…やらかしたァァァァ
「ごっごめんねジェノス君痛くない？ほんとにごめん、まじでごめん、切るつもりはなかったんだ。」
（主よ離脱状態の時は主と我の力がほぼひとつになってる状態ゆえ加減が聞きませぬ）
いやほんとにまじで悪気はないのよ、まさかここまで威力出るなんて思わなかったんだ。
「いえ。大丈夫です。俺も煽るような発言申し訳ありませんでした…有難うございました。」
なんか悪いことしたなぁ。
あの後ジェノス君は博士に修理を申し込みに行って夜には帰って来た。

サイタマ宅にて俺はビールを持参してジェノス君サイタマさん俺の３人で今日の振り返りをしていた
「にしてもスゲーなアシナあの顔なしのシュバッってやつめっちゃカッコ良かったぞ。俺も剣術やってみようかなぁ」
「いやサイタマさんはそのままでも強いでしょ？それよりジェノス君本当にごめんね。この埋め合わせは後日ちゃんとするから。」
「いえ大丈夫ですあの一閃を防ぎ切る事が俺の課題の１つとなりますし、それに遅かれ早かれあれを出されてたらどちらにしろ再起不能でしょう。超範囲に凄まじい切れ味の横なぎ、更に追い討ちの、暴風付きの炎。怯んでる間に間合い詰められて終わりです。」
おっおうめっちゃ冷静に分析された。困っちゃうなぁ
「先生！自分の世界はまだまだ狭かった様です先生との手合わせは先ずアシナさんに勝てる様になってからお願いします！そのために研鑽を積んで行きたいと思います！先生！今後もご指導ご鞭撻の程よろしくお願いします！」
ジェノス君はサイタマさんに直角９０度腰曲げてお願いしてる。
「おう頑張れよ！」
サイタマさんは教える気は無さそうだな
てかあの顔厄介事が１つ減ったと思ってるな？
俺は苦笑いしながらビールを１口、口に含んだ。

手合わせ（ジェノス視点）

「今日は俺の我儘を聞いて貰って有難うございます。」

「いーよいーよ。この後サイタマさんが控えてるみたいだし。壊さないように気を付けてやるから」

サイタマ先生のご友人だと言う。S級6位　首切りアシナ
ヒーロー名簿に登録してから、驚くべき速さで順位上げていっている人物。得物は赤黒い刀身を持つ『蝙蝠』それと、どういう構造か知らないが、切り口から発火現象を起こす『夕日』。この2本を主に扱う。立ち居振る舞いからは強者の感じはしないが。いや…先生もその点に関しては一緒か。

「壊して頂いても構いません。壊される様でしたら、先生とは勝負にすらならないでしょう」

アシナさんには悪いがきっとこの人より先生のが何倍も強いだろう

「先手は譲ったげる。何処からでもおいで。」

俺を舐めているのか？いや受け取れる物は貰っておこう

「分かりました…では！」

初手で決める!!
刀剣使いに真正面から挑むのは得策とは言えない。卑怯な気もするがこれは実戦を想定した手合わせだ遠慮なく後ろを攻めさせて貰います！

ズドン！

避けられたか…いや想定内だな。なら次に取る動作は！

上から攻める！

これも避けられたか。ならっ

絡めてだ。あの人は多分俺の空気の流れを読んでいるのだろうならば後ろに行く気持ちでスピード出して正面に殴り掛かる！

当てれる！……ッ!?

ゾワゾワゾワゾワ

シュバ　シュッ

なんだ今の濃い気配はあの気配があったから避けることが出来たが、少し掠めた。それにしても掠めただけで装甲に浅くはない傷が入った。明らかに刀のリーチでは無いだろう。そしてあの濃厚な死の気配、あれはなんだ？

汗は出ないが、体が震える。武者震いも止まらない。今あったのは明確な死のビジョン。それに一瞬アシナさんの後ろに黒く大きなナニカが見えた。あれではまるで…いやそれならヒーロー活動なんてやっていないだろう。

アシナさんは刀を左側の頭より高い位置に、真正面からなら隙のない構えだがやはり後ろががら空きだ。先程の横薙分かりました…では！。考えて正面を攻めることは頭から外した方が良いな

俺は迷いを振り払うように自らの速度を上げた。

先生と手合わせする前に全力を出さざるをえなくなるとは…だが全力でぶつからなければきっとこの人に勝つことは出来ない！

先ずは1発！

ガイーン!!!

そのまま横を通り過ぎて…

「焼却!!!!!」

ブオッ!!

これもきっと避けられているだろう。俺は焼却砲を打ちながらエネルギー反応を探す。

居た！

焼却砲を解除して、全力でアシナさんの元へ行き、懐に潜り込む。アシナさんの驚く顔が至近距離でも分かる。

捉えた！

下から思い切り拳を振り上げる！

アシナさんを空中に殴りあげる。そのまま息を吸う間も与えずにラッシュを畳み掛ける。

ズガガガガガガガ

全部捌いてくるのか!?

「ぬぅん」

アシナさんが俺の腕を押しのけて来る

しまったっ!?隙が！

「血流技『岩砕き』！」

上段に構えた？振り下ろしか!?

俺は急いで真横に腕を出してレーザーの反動で回避する。

一瞬でも回避が遅れて居たら確実に死んで居ただろう。

無骨な振り下ろし…だが空中から地上への無慈悲な叩きつけ。そして刃から飛び出る、紅色の真空波。全く一体俺はどれだけ驚けばいいんだ？

アシナさんが少しふらついている。

チャンスだ俺はふらついてるアシナさんに思い切り飛び蹴りを食らわした。

「グフゥッ」

アシナさんから初めて悶える声が聞こえた。

漸く一撃。だがまだ終わらせる気はない。

「痛ってえなぁ！」

アシナさんは吹き飛ばされても体制を建て直して一瞬で間合いを詰めてきた。

鞘に手をかけてるのなら横薙ぎか…

俺は飛び上がってバク転の姿勢で横薙ぎを避ける。

相手の動きが見えて来た。いやあの人の攻撃が短絡的になってきただけか…

ならここで1つ挑発でも入れてみるか。

「俺はサイタマ先生と戦う。あの人の強さが知りたい。そのために貴方を超えなければ成らない。貴方の太刀筋はもう見切った。もう掠ることもない。決める！」

何か変わるか？……明らかにイラついてるな。これで攻撃が単純になってくれたら助かるが。

アシナさんの剣は反撃が主なスタイル見たいだ。こちらが攻撃仕掛けたらその虚を着いて切ってくる。厄介極まりない上に戦いにくい。

だが今のアシナさんならきっとブラフがよく効くだろ俺はこれまで後ろから狙ったり真横から狙ってみたり。相手の空いてる所を狙って来た。だが今回はあえて真正面から行ってみる。

心を落ち着けて

ブーーーーーン

全力で…駆ける

シュバッ！

アシナの元へ行くのは一瞬だった。

そのまま左脇腹に殴り掛かる、するとやはり刀で防いできた。

これで胴が空いた！

ボグゥッッ

入った!!

俺の拳は綺麗に腹を捉えたそのまま拳を叩き込んでいく。

ガード出来ないように腕にも均等に計算して拳を叩き込む。山にめり込んでも続ける。

シューーー

……はっやり過ぎた！アシナさんは…息をして…いない

そんな俺はなんて事を…只の手合せのつもりだった…ついカッとなってやりすぎてしまったいやそんなもの言い訳にすら成らないしては行けない…俺は…俺は

アシナさんは握っていた刀を落としており見るも無残なことになっている。これでは助かると言う方がおかしいだろう

「アシナさん…」

「おーいジェノスくーんこっちこっち！」

あぁ俺は幻聴まで聞こえるレベルでショックを…それはそうか。この人は俺の我儘に付き合ってくれた人で、とてもいい人だった。昨日ご飯をご一緒させていただいた時も気さくな人で人当たりの良い人だったそんな人を…

俺は自分がやった罪の重さを噛み締めながら幻聴がした後ろを振り向く。

そこには生物と呼んでいいか分からぬソレがアシナさんの刀を持って俺が見てきた構えでそこにいた

ソレを理解しようとした時にはもう既に俺の下半身と上半身が離別していた。

なにが…起こった

荒れ狂う灼熱の風に晒されながら考える。どうやら俺は切られたらしいあの距離で、そして後ろの山も同様に切られて居ることを落下しながら理解した。

煙

体を再生させながら、ベンチに座って缶コーヒーのタブを開く。
冷えたコーヒーとタバコが疲れ、荒ぶった心を沈める。
俺にとって食事は娯楽と変わらない。死んでる俺が栄養失調になったり病気にかかることはないからな。正直身体的疲労もないから寝る必要すらない。でも何か食べたり、飲んだり、眠ったりしないと心まで人間じゃなくなってしまう。そうなったら嫌だ。俺は人間なんだ。例え死んでいても、息をしていなくても、体が冷たく只の人形と変わらないとしてもだ。タバコだって俺が俺自身を生前と変わらないと思いたいがためだけに吸っている。まぁ吸うと落ち着くから吸っているって言う面もあるけど。
「いかんな、俺らしくもない」
あーあー型の稽古でもするか…
俺は雑念を払うかの如くタバコの火を消し。仮眠を取ってる蝙蝠を叩き起した。

蝙蝠は生きている。俺と違って、疲れている所は見たことないけど。でも寝なきゃ疲れるし、血を吸えなきゃ死ぬらしい。身体の不調は切れ味にそのまま影響を与えるらしい。俺よりこいつのがよっぽど人間らしいな。まぁ俺の半身だし元々俺の人らしさを蝙蝠が吸っていったのだろう。
俺はネガティブな事を振り払うかのように蝙蝠を強く引き抜く。
(主よせめて一声かけて欲しい。突然起こされると頭が痛くなってしまう)
痛いのか?てか頭なんてないじゃねぇか
(気持ちの問題である。痛くなることは無かったが気を付けて下され)
悪ぃ悪ぃ気を付けるよ

んーまぁこんなもんでいいだろ。俺は2時間弱で型を終わらせて公園を後にした。
集中が続かないのも考えものだよなぁ。蝙蝠との手合わせが終わってからの、型やら素振りやらは自主練の類だしなぁ。型だって蝙蝠が動画みてそれを蝙蝠が記憶して俺に教えてるからなぁ。まじこの子優秀すぎん？
そういやタバコ切らしてるわ。買わなきゃ
俺は家に帰る足を止めて、コンビニまで歩き出した。
まじでここらへん怪人出なきゃ静かなんだよな…「我が名は最強の怪人ゴリラガラスすすすすすす」せっかく静かだって言ったのに静かじゃなくなった。
俺は既に切り伏せた怪人に蝙蝠を突き刺して協会に討伐報告した。
コンビニコンビニ。タバコタバコ。
怪人に刺さった蝙蝠を抜き取り目的地へ急ぐ。
ティロリロリロ
「しゃっせー」
「２７番４箱下さい」
「お値段合計で１８００円でーす」
「あっしゃしたー」
俺はそこまでヘビースモーカーって訳でもないから４箱あれば１週間は持つ。たまに考え事しすぎて多めに吸う時あるけど基本１日６本程だ。
俺が外で一服してから帰ろうとすると男たちが汗垂らしながら店に駆け込む。
強盗じゃありませんよーに。「強盗だー!!!売り上げ全部寄越せ！早くしろ！」
ｏｈＪｅｓｕｓ
勘弁してくれよこっちはニコチン切らしてイライラしてんのによォ
俺はコンビニに入って強盗を刀で威嚇する。

「おい。大人しく出頭しろ逃げれると思うな。」
「えっS級の首切りじゃねぇかっ！なっなんでこんなとこに!?」
「黙れ。そこを動くな…切るぞ」
この後警察がやって来てしっかりと強盗を捕まえていった。
俺は聞き込みとか面倒くさいから秒でその場から離れた。
あぁやっと吸える。
震える手で火を付けて息を大きく吸う。
スゥーーーーーーーー。プフゥーーーーーーーーー
あぁ幸せ。
散々お預けされたタバコは凄くおいしいものだった。

銀の牙

時は昼下がり。朝の訓練も筋トレも終わり、俺はコーヒー片手にベランダでタバコを吸っている。
今日も今日とて平和だなぁ。目立った事件もないし、協会からの連絡もなし。後はパトロールに出かけるだけなんだよなぁ。

平和じゃなくなった。仕事が舞い込んだ。
「もしもーしこちら首切り。」
「こちら協会本部。首切り君、君は確かZ市出身だな？」
「そうですけど？」
「ならZ市の支部まで行ってくれないか？」
「怪人っすか？」
「似たようなものだ」
含みのある言い方が気になる。だけど護衛じゃなきゃなんでもいいや。
「了解っすぐ行きます」
「あぁ助かるよ」
ピッ
「さて行くか」
俺はベランダから外に飛び出て屋根伝いに支部を目指した

っし到着っと。協会周辺はやけに静かだった。てか協会の中ももぬけの殻状態で誰もいなかった。
「お主も来たのか。」
「ん？あぁバングさんじゃないですか。お久しぶりです」
この腰の曲ったまさにおじいさんと言った風貌の人はS級
3位のシルバーファング。本名はバングと言う。初対面の時に本名で良いと言われたので本名で呼ばせて頂いている。

「君がジェノス君じゃな？ワシはシルバーファングというものじゃ。よろしこ」
「協会に呼ばれて来たんだが。」
　おっジェノス君も来たのか。これはなにが来ても勝ち確だろうなぁ。帰り道になんか買っていこう。
「S級3人集まれば何とかなりそうですね。」
「それは無理な話じゃ。なんせ今回は災害レベル竜の最悪な事態を押し付けおった。」

　要約すると巨大隕石がここに落ちるらしいからそれを近場のS級で食い止めてくれと。出来なかったら近隣都市が吹き飛ぶぞと。
　生物なら何とかなったかもだけど。巨大隕石は無理やわぁ。
　バングさんが避難した方が良いって言ってるけどまぁ俺は肉体的には死んでるし。本当の意味で死ぬことができるならそれでもいいし逃げるメリットがないなぁ。
　バングさんはまぁ残るだろうなぁ。道場あるし。
　ウウウウウウウウウウウウウ　　ヒーロー協会からお知らせします
　始まったみたいだ。
「お前は残るのか？」
「お前じゃないバングさんと呼ばんか。ワシは代々継いできた道場があるからのぉ。残るしか…」
「アシナさんはどうしますか？。」
「ん？俺？俺はまぁ生きてる事に執着はないし抗ってみようかなぁって。」
「そう…ですか。分かりました。」
「それよりジェノス君」
　シュバババ
「流水岩砕拳知ってる？」
「もう行きましたよ？」

俺はバングさんにそう伝えて支部を出た。

破壊

俺とバングさんはジェノスくんを追って外へ出る。
おぉジェノス君が遠くの方でなんかかっこいいのをバチバチしてる。
俺はジェノス君を追いながら空を見上げる。
あー…ありゃ無理だ…いくらなんでもデカすぎる。俺じゃ手出し出来んわ。蝙蝠だけでも呼び出しとこ。
「蝙蝠！仕事だぞ！」
（御意）
手に赤黒い煙が集まって蝙蝠が鞘に収待った状態で手に収まる
最近、蝙蝠に召喚の仕方を教えて貰った。ただ名前呼ぶだけで蝙蝠が勝手に俺の残留エネルギーを追って来てくれるらしい。
まじでコイツ有能すぎて何か申し訳なくなって来るわ。
ブジュオオオオ。
遠くからジェット機の音が近づいて来て追い抜いてった
ん…？S級8位のメタルナイトさんじゃん。フォルムめっちゃすこなんだよなぁメタルナイトさんって。
なんかジェノス君と喋ってる。近づこう。
近づこうと思ったらメタルナイトさんから大量のミサイルが発射された。
うおっ煙たっ！
でもあのミサイルで壊れても粉々になって二次災害酷いような…
あっ壊れて無かった。
隕石は威力を落とすこと無く煙を突き破った。
（あのサイボーグ。隕石を落としたいようであるが。迷いが強いように見えます。）
そうかぁ…うっし励ますか。
俺はジェノス君の肩に手を置いて言葉をかける。
「ジェノス君がなにを迷ってるか俺には分からないけど、とりまやってみよう。何が起こるかなんて誰にも分からない。最善の選択肢な

んて分かりっこないんだ。それにあれはどうにかなる代物じゃないしなにか手があるというのなら、やってみるしかないでしょ？だから迷わず行っちゃえばいいの。」
「アシナ君の言う通りじゃ。お主はまだ失敗を考えるには若すぎる。適当でええんじゃ適当で、土壇場こそ…な結果は変わらん。それがベストじゃ。」
「そうそう。もしかしたらあれをどうにかできるかもしれないしまぁ…なるようになるさ！」
ジェノス君は少し考えて自分の服を破き出した。
ジェノス君がやるようだし。俺も足掻くか。俺は自分の首に切り込みを入れる。
「アシナ君早まってはならん！」
「大丈夫です俺には俺の考えがあるんで！」
「バングさん！アシナさん！伏せて居てください！」
俺はスライムモードになる。ジェノス君はチャージしている。その間に…
「血流技！」
俺は跳んで、隕石を射程内に収める。
「『火炎血流』」
ズバン!!!!!
俺の全力の一太刀は巨大隕石を真っ二つに…出来なかった。精々そこそこな切り込みを入れただけだった。
「ああ～落ちるんじゃぁー」
「ほいっ！キャッチじゃ」
きゃっこのおじいちゃんイケメン！
「惚れますよバングさん」
「それは困っちまうのぉ」
「お二人方馬鹿やってないで伏せてください！撃ちます！」
「ほっ」
俺とバングさんは少し離れる。
ズゴオオオオ!!!!!

激しい轟音と共にジェノス君が少し地面にめり込む。
「グァァァァァ!!!!グゥッ!!!ダメだ破壊できる代物じゃない!!!!!」
「いや…じゃが心無しか隕石の勢いが落ちてる様に見える！」
「本当か!?!?」
「いやそれは多分気のせいですよ。全然落ちてる要素ないです。」
俺は自分の体に戻りながら冷静に分析する。
「クソがっっっ!!!!」
ジェノス君は力尽きて膝から崩れ落ちる。
「残り9秒。アシナさん…バングさん…貴方達だけでも逃げるんだ。」
確かに移動する分の血は残してるけど。
「逃げるなら君もいっしょだよ」
「そんなこと言ってる場合じゃ…」
「おいアシナ、ジェノスは無事か？」
「おぉ来たんだサイタマさん」
「まぁヒーローだからな」
ヒーローは遅れてやって来るってか。かっこいいね。
「だっ誰じゃね君は。」
「じいさんとアシナ。ジェノスを頼むぜ！」
サイタマさんはそう言い残すと隕石に向かって跳んで行った。
「俺の街に落ちてんじゃねぇぇ!!!!!」
バグォォォォ!!!!
おぉぉぉ砕いたよ。すっげぇ
（あのエネルギーの増加量…やはりとんでもない奴ですな。）
「なんと!!!信じられん砕きおった!!!」
これにはバングさんもびっくり。
「アシナ君こっちに寄りなさい。ジェノス君は動くでないぞ。安心せい守っちゃる。」
俺はバングさんの懐でしゃがんで大人しくすることにする。
バシュシュシュシュシュ
おぉこっちもすげぇや。
「ッ!?…崩れる」

「離れんとな。アシナ君スマンが…。」
「大丈夫ですよ自分の身は守れますんで。」
「むぅスマンな」
破壊の波が街全体に広がっていく。
俺は崩壊しているビルから飛び降りて小岩を切り裂いたり足場にしながら地面にたどり着く。
おっサイタマさん発見。
「サイタマさん！お疲れ様です。まさかあれを砕くとは思いませんでしたよ。救われました有難うございます。」
「おう。一件落着だな」
ズドォォン
まぁ確かに被害は少ないだろうけど。これで世間様からなにか言われないと良いけど…。
俺の中で一抹の不安を残しながら。隕石騒動は幕を閉じた。

楽しさと雨

俺は今日、サイタマさん達を家に招いてご飯をご馳走した。
今は俺がお皿を洗っていてサイタマさん達は食後の小休憩を挟んで貰っている。
この後はいいお酒を振舞って、サイタマさんの怪人の話をしてもらうつもりだ。

「おいジェノス面白いもん見せてやるよ。」

「是非お願いします！」

サイタマさん…またくだらないことやろうとしてるな？

サイタマさんはそう言うと、親指を人差し指と中指の間に挟んで、スポーンって感じで抜いたようにみせている。

あれじゃさすがに無理があるでしょ。ジェノス君もきっと呆れて…

「そっそのような技が…！」
!?!?!?

いやお世辞だよね？

（あのサイボーグの反応に声質。素の反応であります。）

ジェノス君…変なところで残念だなぁ。

「先生！こういうことですか!?」

ジェノス君は自分の指を本当に抜いている。

「いやお前、なにしてんの？」

本当になにしんてんの？あの子。

「ほらくだらないことしてないでお酒とおつまみですよー。」

「おっサンキューな」

サイタマさんは少し嬉しそう。まぁなんせただ酒だしね。

「ジェノス君はサイボーグと言えど未成年だからオレンジジュースね」

「アシナさん！くだらないことでは無いです！きっとこういう行動1つ1つに先生の強さの秘訣が…」

そんなこんなで、サイタマさんやジェノス君が狩ってきた怪人の話を聞いていたら、あっという間に夜が更けて行った。

「おっ？もうこんな時間か、今日は有難うな。」

「お礼を言いたいのは俺の方だよ。また呼ぶね」

「先生！歩けますか？」

「大丈夫だと思うよサイタマさんはお酒に強いから。」

「そうそう少しテンション上がるだけだ。歩けないほど飲んでねぇ。」

俺はジェノス君とサイタマ君を玄関まで送って、後片付けを始める。

一服一服。

「あぁー雨降って来てるなぁ今日は辞めとこ。」

そう言えば雨で思ったけどスライムモードって血の塊だよな？

（その通りでございます。）

雨とかに当たったらどうなるの？

（そうですね血の力が薄まり。さらに火の力も通りにくくなるので能力が著しく低下致します。）

雨の日の接敵は控えろっていうことか…

（まぁ余りオススメは致しません。）

雨の日の接敵なんてそうそうないでしょ

俺は内心笑いながら。雨が降っているのにベランダに出る
「やっぱ降ってても喫煙欲は収まらんでぇー」
ふざけながら火をつける。
スゥーーー、フゥーーーー
煙に乗せるは悪しき幻聴。自らを怪人だと渦巻く心は煙に乗せてどこかに飛ばす。
このまま平和が続きますように。そんな事を思って。ベランダに座り煙を吐く

攻めと守り

今日俺はヒーロー協会の本部に蝙蝠を帯刀して来ている。俺がZ市の協会じゃなくて、A市の本部にわざわざ来ている訳は…。
「人の事待たせるなんてどう言う神経してんのよ、あんた！」
この小さな緑髪の人は、S級2位の戦慄のタツマキさん。物凄く強いから超能力者であり現協会の最高戦力であるとされている。実際は1位にブラストという人がいるみたいだが、その姿は上層部の1部しか知らないらしい。
「すいませんタツマキさん。道中で厄介事に出くわしまして。」
「言い訳するわけ!?認めないわそんなもの！遅れた分ちゃっちゃと終わらせるわよ！私も暇じゃないの！」
相変わらず高圧的な人だ。あっそうそう協会本部に来てた訳だけど、この人に俺の全力の1太刀がどれほど通用するのか試させて貰っているんだ。今の目標はこの人の全力のシールドを破る事を目標にしてる。
「ほら！突っ立ってないで何時もの場所に行くわよ！」
タツマキさんは怒鳴りながら協会を出ていく。
俺とタツマキさんは何時も協会から離れた荒野地帯で訓練をしている。被害を最小限に抑えるためだ。
「それじゃあ始めますよー。」
「何時でも来なさい」
タツマキさんは緑のオーラを、俺は首に切り込みを入れてスライム状態に。
「あんたのそれ本当に気持ち悪いわね。何回見ても慣れないわ。」
「もう6回目位なんですしそろそろ慣れてくださいよ。」
「ふんっ」
実際、ヒーローになって直ぐに自分の全力を試したくて、無理言ってタツマキさんにお願いしたから。もう多分6回位にはなってる。
「御託はいいわ！来なさい！」
スゥーーーーーー

気を沈める。落ち着かせる。
フッ!!!、
「血流技『波打ち!』」
波打ちは唯の飛距離の伸びた居合である。火炎血流と違って火と風は着かない。
「ふっぐぅぅぅあぁぁぁ!!!」
タツマキさんが顔を歪めながら受け止める。だが刃が本人に届いた様子は無い…また止められたか。
俺は元の体に戻り蝙蝠を鞘に収める。
「ッハァハァハァ。あんたまた力上がったんじゃない?本当に人間かしら?怪人って言われても納得するレベルよ」
タツマキさんが肩で息をしながら言ってくる。
「面白い事を言いますね俺は人間ですよ…人間、人間」
「?」
心は人間でい続けますよ。いつまでも。
「そうだタツマキさん。この後予定あります?」
「予定?無かったはずよ。」
「良ければ遅れてしまったお詫びに、ケーキとかご馳走しますが…」
「あら?いいわね付き合って上げる。」
「じゃあ行きますか。」
この人のシールドは一体いつになったら破れる様になるのか皆目検討も着かない。動きながら戦えって?行動を超能力で止められて首拗られてGG送りですよ。
俺は自分にまだ壁がある事を再認識してタツマキさんとケーキ屋に歩を進めた。

油断と慢心と甘え

『今日の天気予報です。本日はＪ市上空で雨雲が立ち込めており…ｋｉ』

ポチ

『ガハハハハハハハハ、そんなことありますぅ!?』

俺はテレビのチャンネルをポチポチしながら退屈な休日を過ごして居た…。

まじで暇やぁ。昼から酒でも飲んでプー太郎しようかな？

ピルルルピルルル

はい仕事キタ━━━━(ﾟ∀ﾟ)━━━━!!!。退屈終了!!!

「もっしもーし」

「もしもしヒーロー首切りか？」

「焦ってんねぇどうした？」

「今Ｊ市に怪人が多数襲撃してる…応援を要請したい…」

Ｊ市か…少し遠いな…。全速力で走るか…

「了解。Ｊ市ね、向かうわ。」

「助かる。それじゃあ位置情報を添加しておくよ。」

俺は玄関の鍵を締めながら、ｊ市に足を早めて行った。

さーてＪ市に到着っと。いや天気悪!

空は今にも雨が降りそうな黒黒とした雲が掛かっている。

まぁスライム状態になるような強敵なんていないだろうし、それならば雨とか関係ないだろうし。降る前に終わらせればいい事だし。

俺は携帯で、更新された怪人の位置情報を頼りにＪ市を駆け抜ける。しばらくすると緑色の半巨人とプリズナーさんの姿が見える。

見つけた!?あのマッチョな緑か…今プリズナーさんが吹き飛ばされていったけど無事である事を祈ろう…。
(主よエネルギー反応を2名検知。一方は怪人でしょうがもう一方はヒーロー…でしょうか凄まじい生命エネルギーです。)
マジィ?あっ本当だ…!?!?おっぱじめやがった。てか早ァ。見えるんだけどありゃあ戦ったら反撃出来なさそうだなぁ。
うぅわ雨降ってきやがった。やっべぇな小雨であってくれ
いつの間にか怪人達が目の前から消えていた。
やっべ雨に気を取られてた。あの早い子ならいざとなったら逃げれるだろうけど…
視界の端に全裸の男が映る。
(先程の男のようで…!?主!!構えてください!!!)

?
ズガギン!!!
おぉおおお!!!
つぶねぇ蝙蝠まじで感謝
「さっきからジロジロと貴方…不快なのよねぇ。貴方も遊んでくれるのかしら。」
でけぇなぁ…でも、それだけだろう?
俺は挨拶もせずに怪人の首に居合を入れる。
ザギュ!!
結果怪人には塞がれたが手首を落とせた。
「あらァ挨拶もなしぃ?許さないわよ。あんた」
「ほざいてろ筋肉ダルマ。」
バゴォォォ!!
先程俺がたっていた所に大きなクレーターができる。
「ぐちゃぐちゃにしてあげる!!!」
魚人は一瞬で間合いを詰めてきた。
相手の拳を

カキン！
弾いて
ズバン！
切る！
魚人の胸に一の文字が刻まれる。威力は足りている後は攻撃を喰らわなければいいだけ。
所詮筋肉ダルマ。俺は相手の攻撃を確実に捌いて攻撃を続ける。そうすると、俺の中に油断が生まれる。
トゥルンッ
一瞬の気の緩みである。回避中、気の抜けた音と共に濡れたアスファルトの上で足を滑らせる。
しまっ…
パァン!!!!
首と胴体が離れる。普通の人間のままならこれで死んで居ただろう
「離別！蝙蝠ィ!!」
俺は体から流れる血を集めて、スライム状態になり蝙蝠を手元に寄せて距離を取る…脳裏に過ぎる蝙蝠の言葉。
《雨の日の離別状態の接敵は余りおすすめ出来ませぬ。》
「あらァそっちが本体？まだ私を楽しませてくれるのぉ？」
「楽しすぎてそのまま昇天させてやんよ。第2ラウンド開始だ…」
雨が重く降り注ぎ、体に当たる感覚を無視しながら、俺はその感覚を否定するようにはったりをかました。

アメノヒ

（主！撤退を視野に入れてくだされ！）

蝙蝠の苦痛な声が胸に響く。スライム状態になったは良いけど、ダメだこりゃ。雨が鉛見てぇに重いし。体は熱が４０℃ある時に、歩くみたいに、進んでいる気がしない。

雨が当たる度に、身体が言う事を聞かなくなる…その隙をアイツが見逃す訳なく。あぁここが…俺の墓場になるわけか…ハハッ笑えねぇや。

「あらぁもうおしまいかしら。運がなかったわねぇあんな所で滑っちゃうなんて。でもその状態になって強くなったと思って、身構えたらな～にその動きは鈍すぎないかしらぁ？」

「うるせぇよ、黙れよ刺身にするぞ。」

ゴボォ

何度目か分からないラッシュが体を弾けさせる。見えてるのに、体が動かない。スライム状態は疲労を知らない、だが精神的疲労は倍近く感じる。脳で動かしてるのでは無く弱い念動力で動かしてるって言われたから当たり前か。

「五月蝿いわよ。ミンチにするわよ。」

いや…まだ舞える筈だ…ま…だ

あぁダメだ意識が…とお…の…く

バタッビシャァ

アシナの体が状態を維持できなくなり血溜まりとなる。

「呆気なかったわねぇ。所詮口だけの犬っころって感じかしら…まぁいいわ、歩を進めましょ。」

深海王は人の気配を感知してシェルターに急いで行った。

ｓｉｄｅジェノス

一体連絡のあった怪人はどこだ…？この高エネルギー反応近いな。

目の前に全裸の男が映る。あれは…民間人か？

「お前は誰だ？ここで何をしている？避難警報を聞いていなかったのか？」

「お前は…ふんっヒーローか？深海王を狩るつもりならやめておけ」
「深海王？」
怪人の名前か？
「ヒーローごときが束になっても勝てやしない」
タッ
「正義ごっこなどしている連中では、本物の強敵には勝てない。何も守る事は出来ない。」
後ろに回られた!?早いっ!?
俺は後ろを向いたが既にそこに奴はいなかった。
今の変質者いったい…それより近くのエネルギー反応を…
俺はエネルギー反応がある方へ急いだ…

そこには信じられない光景があった雨で薄まった広がる血溜り。横たわるアシナさん。侍風の男。
「貴様誰だ、その人から離れろ。」
ブゥーン…
俺は威嚇するように腕の焼却方を鳴らす。
「我はアシナ。又の名を蝙蝠という。」
なぜこいつがアシナさんの刀の名を名乗る？
「状況説明は一連の騒動が片付いたらしてやる…貴様の獲物は魚人であろう。」
!?そいつの居場所が分かるのか？
「シェルターに向かった…もし挑むなら気を付けろ。実力が出せてないにしろ主が負けている。我は主の介抱があるから迎えん。気をつけ給えよ貴公。」
「？あぁ貴様アシナさんを頼んだぞ。」
「任せたまえよ」
俺は民間シェルターへと急いだ。
ｓｉｄｅ蝙蝠

主よ我の警告の仕方が良くなかった。ハッキリと水に弱いと伝えておけばこの様な失態は侵さなかっただろうに。
「すまぬ」
眷属失格よな。主1人守れぬとは…
我は体から己を出して主に突き刺し貯蔵血液を分ける。
しかし主にとっていい薬になるだろう。明確な敗北を知るのも成長に繋がるという物だ…
我は主を見守りながらシェルターの方を見る
「嗚呼、頑張り給えよ機構少年よ…」
我は先程見送った主の友人の身を案じ。主の身体の治療と輸血を進めた。

怪人を狩る怪人

「うっぐっあぁ」

眩しい。

目を覚まして、1番最初に写ったのは一面の青空だった。

俺は…そうか…負けたのか。いや死んだと言っても過言じゃないな。

対面が悪かった、雨が降っていた、足元に注意していれば…そんなしょうもない言い訳が頭を埋め尽くす。情けなさすぎるだろ…俺。自信無くすわこんなん。周りにチヤホヤされて、調子に乗っていた。S級と言う甘美な響きが俺を酔わせて居た。今までの怪人だって大した事無かった。災害レベルなんてコケ脅しだ。竜以外は驚異にすらならない。そんな相手を舐め腐る心があった、だから負けたのだ。完膚なきまでに、相手の拳一振一振が俺の自尊心を粉々に砕いて言った。

「ハァーー」

ため息しか出ない。油断しなければ勝てたなんて言う言葉は戦場では通用しない。相手は怪人であり、人類の敵なのだ。舐めてかかるなんて話にならない。今後の課題のひとつに雨の克服も追加しよう。強さに執着はない…だが俺が弱いせいで救える命が散って行くのが耐えられない。寝覚めが悪すぎる。力ある者の責務なのだ。弱者を助け敵を滅する、綺麗事だと言う奴はきっといる。そんなもの言わせておけ。関係ない。せっかく傷つかない体なのだ使わなｋｙ…

(主よ何を考えているかと思えば…)

こう…もり。助けてくれたのお前だろ。俺を回収して再生して辛うじて残ってたであろう《俺》を器に戻してくれたの。お前まじで有能だよ。本当

(主よ思い詰めておるが主は怪人だ)

違う

(いいや怪人だ)

うるさい

（怪人だからこそ、その力を好きに使えば良いのだ。別に他の理性の無い怪人のように欲望に忠実にならなくてもいい。唯、自分がやりたいように振舞えばいいのだよ。主は先程弱者を助け敵を滅すると言った。怪人は必ずしも人類の敵とも限らんのだろう？主は）

怪人なのに人間の敵じゃないやつ…居るなゾンビマンが。

（その通り怪人である事に誇りを持ち。怪人として人を助ければ良い怪人ヒーローアシナ。良いではないか。）

「怪人…ヒーロー…」

（その通りである…それにヒーローは必ず勝つ。つまりどれだけ地に伏しても、最終的には立っていれば良い。主は運がいい怪人だから何度でもやり直しが効く。何度でも敵に挑める。それに主が助けれない命があったとしても人はいずれ死ぬ。主が気にする必要はない。主は怪人らしく自由に、縛られず、力を好きなように奮えば良い。最善なんて誰にもわからぬのだろう？）

クッフフフ。思わず笑みが零れる。分かったよ俺は怪人だよ。人類の味方の怪人だ。そして《怪人を狩る怪人》新生アシナここに誕生だ!!

（その意気じゃ!!主よ!!）

俺と蝙蝠の笑い声が響く

俺は心の雲が晴れた気がした。

最初に見た青空は俺の無力を嘲笑う様に感じたが。今みる空はやけに清々しかった。

首さ置いてけ、血さ置いてけ

怪人として生きて行く。俺はそう決めた。だからと言って、人間の様な生活を辞める気は無い。美味い物を食べ、美味い酒に酔う。お風呂にだって入るしきちんと寝る。体は疲れなくても、心は疲れていくから休ませて上げなきゃ…

そう言えばあの魚人はサイタマさんがワンパンで沈めたらしい。流石としか言い様が無いよ。まったく

今は何をしているかというと懲りずにタバコを吸って英気を養って居る。この後きちんと見回りに行くし。サボってる訳じゃない。

タバコを吸い終わって腰掛けを部屋にしまう。玄関の鍵を閉めて、町に向かって駆ける。今日はどんな奴と戦うんだろう。

「蝙蝠」

蝙蝠を召喚して帯刀する…さて怪人狩りの開始だ。

「ゲバゲバ我が名はスネ毛だいお…」

名乗らせる暇も与えず首を落とす。

脆い。レベル狼くらいかな?蝙蝠を突き刺して、血を吸ってる間に協会に連絡する。

深海王のせいで俺が本当は弱いんじゃないかって言う噂が流れている。失礼しちゃうわ。蝙蝠使わずに夕日だけでも、勝てるっての。

まぁ心が弱かったってのは認めるけど…

さてと。次だ次。

俺は次の怪人へと歩を進めた

「なんだねチミは私に何か用かね」「たった助けて」

小柄で3等身の眼鏡掛けた、少し禿げた怪人が民間人の襟首を掴んでいる。

こいつ…なんか知らないけどすっげぇイライラする。あっ…中学の教師にそっくりだ。顔とか少し禿げてるとことか。あとー小さいとことかも。

「うっし殺そ」
「生意気だね…チミはこの怪人スーパーティーチャーに勝てるとでも？」
ムカつく怪人は人から手を離しこちらに近づいて来た。
「ふっふっふ私の足音を聞いたものは恐怖で…」
スパッ…
いや弱くない？まぁでも恐怖心はあったね。トラウマ対象だし。
さて次にい…
「おおおおおおお!!!!ティーチャー!!!!!貴様がティーチャーを殺ったのかぁ!?許さんこのハイパーPEティーチャーが相手になってや…」
スバッ
俺は即座に首を切り落とす
あぁそういうタイプの怪人？たまにいるんだよねぇ人間の役職が怪人になってるタイプこのまま行くと次は何？てかまさか学校の教科事にあるとか？
俺はワラワラでてくる先生怪人を切りながら考える。
油断せずに行こう、数は1、2、3、4体か…
敵の1人が距離を詰めてくる。
ッ!?早い!?
ガギン!!!
重い…けどいなせない訳じゃない。
俺は確実に敵に斬撃を当てていく。相手の打撃や狙撃を避けて、いなして、弾いて、色んな方法で隙を作っていく。
敵が固いなぁ数も多いし。離別するか？いや離別便りも良くないな。深海王の二の舞になりかねない。
俺の中であれは、トラウマ案件である。
血流技つかうとするか…
俺はティーチャー軍団から1度距離を取る
「逃げるのは良くないぞおきみィ。さぁ！私と一緒に問題をとこう！喰らえチョークマシンガン。」
あーうざっ

「血流技『血潮』」
蝙蝠を地面に突き刺して自分の周り３６０℃に血の壁を貼る。
「血流技『血纏』」
刀に薄い血を纏わせる。血纏の切れ味補正で首切れんかなぁ。さてんじゃあ怪人らしいことするか。
「グフフフフ。首さ置いてけ。血さ置いてけ。我は怪人。怪人首切り。」
怪人っぽく言ってふざけてみる
「貴様…なにをいっ…」
血纏やっぱすげぇわ。めっちゃ切れる。血流技の強さを思い知ったよ
うしさらに少し味付けしていくか
「気づいた時にはもう遅い。首が落ちてるのに気づけない。」
「ひぃっ」
怪人達が短い悲鳴とともに後ずさる
「さぁ始めよう、置いていこうかその首を！」

「あーもしもしー」
「首切りか？どうした」
「なんか学校の教科の名前が着いた怪人に襲われたんだけど。」
「まさか!?…ティーチャーズか？災害レベル竜じゃないか!?直ぐに応援を要請しよう!!!」
「えっ？竜なの？もう倒しちゃった。」
「今から向かうからそこを動かないでくれ!!!」
「おっおう。分かった」
まぁこいつらが竜の理由って多分６体全員で合わせて竜なんだろうなぁ。単体なら鬼か虎かでしょ。

俺は1匹ずつ丁寧に蝙蝠を突き刺して回った。

男のロマン

「なぁ蝙蝠。合体って男のロマンじゃない？」
俺は蝙蝠との手合わせを終えて。切り落とされた腕を再生しながら、ふと呟く。
（何を阿呆な事を。）
侍状態の蝙蝠が呆れた口調で言ってくる。
俺と蝙蝠って元々ひとつじゃん？だからまたひとつに戻れないかなぁって。
（ふむ確かに試す価値はありますな。成功すれば離別に頼らずに身体強化が可能になるやもしれません。）
だろ？うし。早速試すぞ。
俺たちは色々な事を試す。バトル漫画みたいにおかしな行動をしてみたり。蝙蝠を腹に突き刺したり。抱き抱えて待ってみたり。
そうだ！蝙蝠！俺がお前を召喚する時みたいに、霧化して俺に入って来るってのは？
（主に入るとは）
魂だよ！魂。蝙蝠は見えるんだろ？俺の魂。
（まぁ知覚は出来ますが。危険ではないでしょうか。）
冒険も大事よ冒険も。
（余り気乗りはしませんが試して見ましょう。）
よしやるぞ。
ファサァ
蝙蝠が霧になって俺の中に入ってくる。
「ブッヴギィ。」
声にならない声が出る。やっべぇめっちゃ気持ちわりぃ。でもなんかチカラが満ちてくるあっこれなんだろう。蝙蝠の記憶か？。これが…同化。すげぇや。
蝙蝠ー聞こえる？
…返事がない。
消滅したとかじゃ無いよねぇ。やべぇ、やべぇ、やべぇ、やべぇ。

「こっ蝙蝠ィ」
俺は蝙蝠を召喚する
ファサァ
身体から霧が出てくる。
「あっ…」
物凄い脱力感に襲われる。え？今の俺の力の感覚８割くらい蝙蝠に持ってかれたんだけど。え？俺の力の総量２割なの？え？俺弱すぎん？
自分の無力差を思い知って、死にたくなった。
（うっくぁ、あっ主よ…これは余り気分の良いものでは無いですな）
確かに終わったあとめっちゃ疲れるけど。何ができるかとか見ないと。
（主は鬼か何かですか？）
いいえ私は怪人です。
（怪人なら仕方ないですな。大人しく言うことに従います。）
ガハハハハそれで良いのだ。

その後。数時間に渡って出来ることを確認した。
分かった事
血流技全般の、威力が大幅に上がっていた。岩砕きとかえぐかった。深海王吹き飛ばせそう（小並感）
身体能力の向上によりえげつない程パワーアップしてた。
蝙蝠を武器としての使用が出来なくなった。そりゃそうだ同化してんだから。蝙蝠の能力である、焔を刀化させた夕日とかは握れた。
血流技は斬撃から打撃に変えれる。岩砕きとかは、殴打で打てるし。火炎血流とかは引っ掻き状態で打てる。
後これ、めっちゃ疲れるってのが分かった。これだけしかわかんなかったのは数時間の内、４５分位しか同化を出来なかったから。後は休憩を挟みながらやった。気持ち悪くなっても続けると乗り物酔い

みたいな感じになって。頭がぐわんぐわんする。でも重要な戦力にはなる事は間違いない、訓練だけは怠らずにして行かなければならない。

俺はすっかり暗くなった空を見上げて帰路に着いた。

明日は働かないとな。

拳法

今日はサイタマさんやジェノスくんと一緒に、バングさんの道場にお邪魔させて貰っている。理由は…

シュババババ！…ヒュアァァ

「まぁこんな感じじゃ。どうじゃ？やってみんか？」

「3人だったら感が良いから直ぐに身につける事ができるかもしれん。」

「えぇー。面白いもん見せてくれるって言うから、アシナまで巻き込んで来たのに勧誘かよ爺さん。興味ねーよジェノスお前やっとけ。」

「いえ俺も遠慮します、俺が欲しいのは護身術じゃなくて圧倒的破壊力です」

「貴様ら流水岩砕拳を愚弄するか！バング先生の1番弟子チャランコ参る！」

ドン！

ジェノス君がチャランコ君を道場の壁に押し当てる。

「ぐえぇまっ参ったァ！」

蛙みたいな声を上げてチャランコ君がギブアップする

いや早いなぁもう少し噛み付いて欲しかったよ。まぁ相手がジェノス君だし無理か…ん？1番弟子？おかしいな

ジェノス君が理由を聞いたところ、当時1番弟子だったガロウと言う子が道場で大暴れして、強かった弟子を軒並み再起不能にさせてしまい。他の門下生も恐れを為して辞めて閉まったらしい。ガロウって子はバングさんがきっちりボコしたみたい。

「アシナくんの戦闘スタイルは刀じゃが…どうじゃ？試しにやってみんか？」

「俺は少しやってみようかな？」

何を隠そう、俺が今欲しいのは刀での強さでは無く、拳の強さ。蝙蝠のスペックは非常に高く、基本何でも切れるし、貫ける。刃が通らないって事は、ほぼ無いのだ。まぁ一刀両断できるかって言うと別だ

けども。
　話を戻そう。蝙蝠のスペックが高く依存しがちだが同化状態になると蝙蝠が居なくなる。夕日は出てくるが夕日は炎が出る刀だ、切れはするが蝙蝠見たいにスッパスッパは行かない。だから蝙蝠に頼らず同化の威力を最大現に活かすことのできる方法、拳法に行き着くのだ。身近に丁度いい人がいるのだから、利用しない手は無い。
「おぉ誠かねアシナくん！おじいちゃん張り切っちゃうぞ。」
「早速始めますか？」
　ガラガラガラ!!!バン！
　誰だよ今から始めるってのに騒がしいやつは。
「ヒッヒーロー協会の者です!!!この度S級ヒーローに非常招集が掛けられました!!協会本部まで御足労願います!!!ややっそこに居るのはジェノス様と首切り様ですね?!S級は全員集合せよとの事なので、御二方にも来て頂きます!!!」
　まじかぁめんどいなぁ。
「災害レベル竜がでたか？」
「その可能性高そうだよねぇ。」
「やれやれ…チャランコ！留守を頼む！」
「S級招集という事は先生のお力が必要になるやもしれません。一緒に来てくれますか？」
「いいぜ。暇だから」
　蝙蝠。もしかしたらがあるかもだから冷蔵庫の輸血パックで輸血してきといて
（御意）
　俺は蝙蝠に指示を飛ばしてサイタマさん達と一緒に協会本部を目指した。

グレイ

ウィィィン

協会のゲートをくぐる。おっあれは…

「おぉシルバーファングに首切りじゃねぇか。来ると思ってたぜ。後は…サイボーグジェノスと…1人知らんのがいるな。」

「久しぶりです。アトミック侍さんこちらは…」

「B級のサイタマ君じゃいずれS級上位になる逸材やし連れてきても問題ないだろう。」

「おっさんもヒーローなんだな。よろしく」

パァン!

アトミック侍さんがサイタマさんの握手を拒む。

「握手はせんぞ。俺は強者しか認めねぇ、お前がここまで上がってきたら改めて挨拶してやる。それに俺はおっさんって言う歳じゃねぇ!まだ37だ!」

偏屈だなぁアトミック侍さんも

「ちょっと誰よB級の雑魚なんて連れてきたの!」

この声は…

「私たちに対して失礼だとか思わないの!?」

やっぱりタツマキさんだ

「呼ばれても普通…?アシナじゃない。あんたも来たの?」

「まぁ呼ばれたら俺は基本来ますよ。」

あっそうそうタツマキさんがいるなら訓練の件頼まないと。

「タツマキさん近々空きありますか?また訓練お願いしたいんですけど…」

「そうね…大丈夫だと思うわよ。」

「なら良かったでは明日にでも…」

「ちょっちょっちょっとまてよ　なんだこのちんまいの迷子?」

あぁーサイタマさんは知らないのか。

「何よ!迷子ってあんた本当に礼儀ってもんがなってないわよ!大体なんで来たのよ!どういう神経してんの!?S級とお近づきになりた

いとか、浅い考えで来たんでしょ!?不愉快、消えて。」
　ボロくそ言うなぁ。
「そいつはS級2位の戦慄のタツマキですね。超自然的な攻撃で敵を倒す…俗に言うエスパーです。先生!もう大体集まっているようです、席に着きましょう。」
「無視する気!?ちょっと!アシナも何とか言いなさいよ!」
「タツマキさん席につこう?」
　俺はタツマキさんを宥める様に言う。
「納得行かない!」
　それぞれがそれぞれの席に着く。不在なのは見た感じ、メタルナイトさんとブラストさんだけ…か
　にしても一同に集まるとメンツ濃すぎんかえ?これ。豚神さんとかえげつないほど食ってるし。あっサイタマさんがお茶頼んだ…マイペースだなぁ本当。
　あぁ話が始まるみたい。
「私は今回の説明役を任された、ヒーロー協会のシッチだ。早速本題に入らせて頂こう。」

　なんかすっげぇ壮大に話されたけど預言者のおばあさんが半年までの未来を見てたらヤバイもん見ちゃって地球がやべぇって言い残して死んじゃった、でも今までそんなやべぇなんて抽象的な予言はなかったからお前ら命落とすかもだけど。何来ても言い様準備だけしとけよってか…占いは宛にしないようにしてるから、どうでもいいな。
　ゴゴゴゴ
　本部が少しだけ揺れる。
　ん?襲撃?本部が?肝が座った奴がいる物だ。
「わぁぁぁぁぁぁぁ!!!!まさか今すぐ予言の時が来るなんて誰が予想で

きる!?」
「シッチさん落ち着いて下さい。何があったんです?」
俺は一先ずシッチさんを落ち着かせようとする。
「落ちついてる場合じゃない!A市が…A市が一瞬で破壊された!!!!」
「おい!この建物はなぜ無事なんじゃ」
バングさんが凄みを聞かせてる。
「この建物はメタルナイトに依頼して並のシェルターより強固にできている!」
なるほどな…流石メタルナイトさんだ。今日来てたらサイン欲しかった…なんて呑気なことを考えてる間に皆、天井の穴から外に出るらしい。
てかサイタマさんが消えたな…あぁ皆が出てった穴は彼が作ったわけか…安定の規格外っすなぁ。
「よっこいせっと…」
えぇ…もう接敵してるよあの人たちがいるよ…
「アシナ!遅いわよ!何ぼけっとしてんの!?」
タツマキさんにドヤされた
どうやらあの空のデカブツをどうするかで揉めていたらしい。
んで結局タツマキさんが1人で飛んでっちゃって攻撃を始めた。
俺たちは置いてけぼりと…
「ジェノスくんどうする?」
「どうしようもありませんね。先生が既に船に乗り込んでいることでしょうし待つ他ないでしょう。」
「それがいいかなぁ。地上はあの4人で事足りそうだし」
俺はポケットからタバコを取り出す。
「おじさん。小学生の前でタバコはどうかと思いますよ?」
「ん?あぁごめんね童帝君。」
そうかぁ副流煙かぁ。配慮が足らんかったかぁ
「気を付けて下さいね」
(主!高エネルギー反応!小娘の方角です!)
蝙蝠がそう叫んだ直後タツマキさんが吹き飛んだ。

「地上から応援要請があって来てみたが…なんなんだメルザルガルド。実に脆いではないか…このような相手に手こずるとは貴公もまだ修練が足らぬか…」
「悪ぃなルイーツェ。助かったぜ、グハハ貴様らも終わりだ！俺とあいつで貴様らを血祭りに上げてやる！」
「タツマキさん！大丈夫ですか!?」
俺はタツマキの元へと瞬時に移動する。
「大丈夫よ。それよりあいつ…ぶち殺す。」
相当ご立腹のようだ…でもあの甲冑戦士、立ち振る舞いからして強いんだよなぁ。
「ほぅ向かって来るか？原住民よ。その心意気賞賛に値するが…実力も悟れんようじゃ…」
早いっ!?
ルイーツェは一瞬でタツマキさんの懐に忍び込み
バゴォ
どこから出したかわからぬ、大剣でタツマキさんを吹き飛ばす。
「弱者と言わざるを得ぬなぁ。」
こいつに俺たちは勝てるのか？

卑怯物

「終わりだ…回避…不可…即死」
血潮でバリア貼れば防げるか…だが他の皆が…
ピタァ
砲弾が僕達の頭上で停止する
「全く…どいつもこいつも私がいないとダメね！雑魚に手間取ってるし。C級から出直したらどうかしら!?」
流石だなぁ。あの人は
「砲弾…お返しするわ！」
ヴオッ!!
ゴゴゴゴゴ！
「覚えておけメルザルガルド…貴様は我が戦に手を出した。船に戻ったのならば先ずは貴様を御してやる」
「へっ…くだらないな。雑魚1匹に手間取ってるやつに言われたくないぜ。」
「貴様ァ！」
おっ仲間割れか？チャンスやん。
「油断したな!?『岩砕き・解』！」
俺は奴の頭上から血纏の血も使った岩砕きをお見舞いする。
「な!?」
ガィィン!!!
岩砕きは二刀の剣で防がれたが…
ズォン
貫通した血の刃は奴に当たり片膝を付かせる。空中で気持ちを落ち着かせ。そのまま距離を取り、突きを放つ。
「せぇやァ！」
「ぬぅっ!?」
ブズゥ！
奴の胸に深々と刀が刺さる。だが咄嗟に剣で刀の軌道を逸らしたらしく、ピンピンしてる。刀を抜き距離を取る。

完璧な不意打ちだったんだけどなぁ…やはり両断するしかないのか…

「ふふふっくっくっく。はっはっはっはっ!!!よい！よいぞ！滾って来たわァ！アシナァァァ！」

うっわぁ怖っ…目がギラギラして、口が裂けるレベルで叫んでるよ。

「血流技『血纏』」

再度蝙蝠に血纏を使う。

フッ

やつの姿が消える…やはりとてつもなく早い。

「奥義!!迅雷大剣舞!!」

ズガガガガガ!!

ザグ…ザシュ、ブシッ

恐ろしく早い剣舞、その勢いはまさに迅雷が如く。受け止めきれずに傷が1つまた1つと増えて行く。

致し方無しかぁ。

血流技『血傀儡』

ブワァ

俺は一瞬だけ霧化して奴の背後に回る。

この技は蝙蝠の血液量の4分の3を使用して俺の人形を作り出す奥義である。その後に、蝙蝠の霧化を使って俺を離れた所まで移す。霧化は使用後の隙が大きく通常時は使えないが血傀儡と相性抜群なため併用して使用する。

「大忍び刺し。」

俺は真っ直ぐに突きを放ちに行く。

「ほぉ幻か…絡めて来たな…だぁがぁ」

気づいたようだが遅い。俺の切っ先は既にお前の心臓を捉えてる！貰ったァ！

「甘い」

!?!?消えたっ!?

ザザシュ

背中に違和感を感じた…少し足がよろめく…
「くくくっ手応え…あったぞ?」
奴は上に飛んで突きを回避して、回転しながら背中を切りつけて来たみたいだ。
「アシナよ、勝負が着いたようじゃな。その傷では助からまい。なれば我が楽に死ねるよう終わらせてやる。」
「何勝手に終わらせてんだよ。」
ザグッ　ブジュ
俺は首に刃を当てて、自らの首を切る
ポタ…ポタ
「自らで首を切るか…ふむ、まぁ敵の手に掛かりたくないと言うなら致し方無しだ。悲しき事だがな…貴殿のような強者とはもう逢えぬだろう…」
《何勝手に終わらせようとしてんだよ》
「ぬっ?」
ブジッ!
首の傷口から手を生やし、そのまま体を出す。そして抜け殻が持ってる蝙蝠を握り、殻の外へと出る。抜け殻をそこら辺に投げ捨てて蝙蝠の回復能力を刀化させた。慈愛刀『癒』を刺しておく。
「さて…2回戦の開始と行こうや」
俺はスライム状態で奴と向き直す

類まれなる強者

「タツマキさんこいつは俺に任せてくれません？」
「はぁ？獲物の横取り？信じらんない!?」
「船への攻撃ができるのはタツマキさんだけです。それにＡ市を壊した。巨大な砲撃が来た時に奴と戦闘中だったら皆まとめておじゃんです…だから…」
「あーもー分かったわよ！あんたにやるわよ！その代わり絶対に負けるんじゃないわよ！」
「承知！」
　冒頭早々タツマキさんと言い争ってしまった
「我がそこの小娘を野放しにすると思うか！」
　ガキィィィン！
「お前の相手は俺だぞ？かかって来いよ。」
　敵の見た目は空色の装飾が施された綺麗な鎧で正直。どちゃすこストライク。そして極めつけは背丈。俺が１８０ってそれより数段でかい。そして身長と同じぐらいの大剣。いなせる気がしねぇ。
「ほう？では軽く捻るとしよう。参れ地球の剣士よ…」
「参らせて貰うわ。」
　血流技はバンバン使えないから普通の技で攻めるしかないな…様子見るか。
　俺は刀に手を添えて居合の姿勢をとる。そのまま敵の懐まで潜り一閃。
　ガイン！
　まぁ弾かれるわなぁ。そのまま横凪。上段からの振り下ろし。派生で袈裟斬りとしてみたが全部弾かれる。
　絡めてというかやっぱり敵の体幹を崩さなきゃダメだなぁ
「それで終わりか…なら次はこちらの番だァ！ぬぅん!!!」
　ガギャン!!!
　咄嗟に霞構えを取り攻撃をいなす。手がビリビリするけどいなせない事はないな。この調子で敵のバランスを崩していこう。

いなして隙をついて攻撃という半ば作業を続ける。
本当に埒が明かない…相手の大ぶり上段を誘発するか…？
「ぬぅん！ふぅん！ふん！」
ガヂィン、ガィィン、ガギィン
無理だな…攻撃が激しすぎる。一撃が重すぎて流れを逸らすので手一杯だ…
「ルイーツェ何を1人に手こずっている！早くこちらを手伝え！」
灰色の巨人が声を荒らげる。
「騒がしいぞメルザルガルド！我は今心踊っておるのだ。我が一撃をいなすどころか、数太刀加えて見せる技量の高さ！これ程の手練と戦ったことは未だかつて無い！」
ガイン!!!
一際大きな一撃を逸らして見せる。
「貴公…名を聞いてやろう。」
「アシナ…唯のアシナだ…」
この間に腕を休める…
「アシナか…覚えたぞ。貴殿がなのったなら我も改めて名乗ろう、我が名はルイーツェ！暗黒盗賊団ダークマターの４戦士の１人！類まれなる強者である貴殿に、最大級の礼を尽くそう！」
ルイーツェの鎧が、やつの声に反応したかの如く軟化して、その顔が顕になる。顔は角が生え、耳が長いこと以外は人と変わらなかった。服装もまるでファンタジー世界の主人公が着てそうな青色の服になった。剣は光の粒子に包まれて二振りとなる。
「構えよ…ゆくぞ！アシナァ！」
なっ!?はや…
ガィィィン！
通り過ぎってた!?
「ふむ…これにも反応できるか…貴殿は一体どれほど我を驚かせれば気がつくのだ」
奴はクツクツと笑いながら楽しんでいる。
俺は楽しくねーよ。

「はぁー血流技『血纏い』」
俺は血流技を使用して蝙蝠だけでも強化する
刀を構えて向かい合う。
その時、空の船から巨大な砲弾が飛んで来てしまった。

自信

『離脱』を発動させたはいいけど、これはその場しのぎにならんぞ…火力もスピードも奴にも届かない…まだ余力残してるっぽいし。本格的に不味い…

「また面妖な外見をしておるな。まぁ外見など関係ない。形態が変われば力量も変わると見て良いな?さて。我をもう少し楽しませてもらおうか!アシナァ」

そこそこ離れてた距離を一瞬で詰められる。

俺は奴が目の前に来た瞬間に居合を放つ。

スバッ…

手応えがない…まさか!?幻影!?

「奥義!!狼牙!!!」

ズギャギャギャギャギャギャ

背中をノーガードで乱雑に切りつけられる。かなりの量の血液が周りに飛び散り、地面を紅く染める。くっそだいぶ縮んだ

「奥義：神隠しィ!!!」

俺は体制を建て直して奴の技に攻撃を合わせる。

「血流技『桜吹雪』!!」

桜吹雪は小石程度の固めた血液を、連撃と一緒に相手にぶつける物量で押し切る技だ。今回は地面に散らばった血を使用した。少しでも相手に処理を押し付けて隙を生み出す…

あわよくば大技をぶち込みた…

「小賢しいわ!!!」

ズババババ

うっそぉでしょ!?全部捌きつつ、こっちに攻撃もしてくるんだけど!?早すぎでしょ!反則でしょ!?相手の斬撃への処理が追いつかない。

「血流技『散り散り』!」

チュドーン!!!

桜嵐で舞った血の破片の一部を『焔』の能力で爆破させる。

「なぬぅ!?」

奴が少しだけ体制を崩す。この手で完璧に崩して終わらせる。
俺は蝙蝠の鞘を腰から抜いて左手に持ち、蝙蝠を収めて、顔の目の前に持ってくる。集中する為に目を瞑る
「血流技…」
親指で蝙蝠を鞘から押し出して。相手に高速で上段を浴びせる。
「『大嵐』イ!!!!!!!」
「なんのこれしきィ！　」
ガキィィィ!!!
最初の上段は防がれる…だが大嵐の最大の特徴は…
ババババババババ
「なっ!?グゥッ！」
無数に繰り広げられる血の斬撃である。その一つ一つにそこそこの威力を持つため、致命傷は避けられまい。今回は残して置いた
奴が捌ききれず剣を支えに膝を突く。
そこだァ!!!!!
「ウオラァァァ」
「はっ!?ふん!!!!!」
奴の胸に一突き入れるが、奴はまだ倒れる気配を見せない。オイオイオイ。そろそろしつこいぞ
「ガハッ　、ゲホッ、ゲホッふぅーふぅー。知っておるか…?アシナよ…獣が…一番恐ろしいのは…手負いの時…だ…と…なぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!!」
ゾゾゾゾゾ
奴は血走った目でこちらを睨めつけるように言い放つ。それはまさに獣であり。理性が既に無いようにも取れる。
「奥義…鬼神宿し。」
奴は2対の剣を溶かし自らの腕に纏わせる。身体は一回り大きく角は肥大化し、目は血走り、牙が口から突き出ている。その風貌は正しく鬼であり。恐怖を確実に与えてくる。
「ゆくぞ…アシナァァァァァ!!」
グォォォ!!

気づいた時には遅かった…俺の身体は宙に浮いており空の宇宙船に打ち付けられ飛散した。
ビクン！
「ゲボッゴホッゴホ。」
魂が身体に戻る。粗方の再生は済んでいて慈愛刀による輸血もバッチリである。
「ＧＹＡＧＡＡＡＡＡＡＡ!!」
先程までの古人らしい喋り方はどうしたのか。正しく獣である…。
「おいっ！ルイーツェ！そちらが終わったのならばこちらを手伝え！」
「首切りの坊主!?」
アトミック侍さんが俺の安否確認するように叫ぶ。
「安心…して下さい…まだやれます！」
《まだ息ガアったか。面白イ我が首を落とシて見せよ。我ヲ楽しまセロォォォ》
「おいおい急に片言キャラかよ。キャラ付け必死だな。」
「ユくぞ…」
ＧＵＯＯＯＯＯＯＯＯ!!!!!
「蝙蝠ィ!!!!!同化!!!!」
（御意!!）
腕をクロスさせながら。同化の命令を下す。コンマの戦いだった…生身であの一撃を受けたら身体が消し飛ぶ。避ける事も不可能。最善の一手が賭けだった。
バズン!!!
やつの拳を防ぎその場に踏ん張ることに成功する。間に合ったみたいだな。
「なンと!?」
「全力と全力の勝負始めようぜ。」
同化のタイムリミットまでに勝負を決めなければならない…だが不思議と負ける気など微塵も湧かなかった。

終幕

さて…と同化が持つのは約４５分。その間に脅威の生命力を持つルイーツェを仕留めきらなければ行けない。タイムリミットきて挽肉エンドが目に浮かぶ。

「血流技『血纏』」

とりま腕に血纏を使う。

「ｇｙａｒｕｒｕｒｕ」

ありゃあ完全に獣だな。身長も3メートル近くまで伸びてるし、第2形態のイケメン具合はどこえやら

ジリジリと距離を詰める。奴は唯様子を伺うだけのようだ…ならばこちらから仕掛けるまでのこと！

「シッ！」

奴との距離を詰めて。顔面まで飛び上がり回し蹴りを食らわせる

ズバゴン!!!

大気が揺れる。同化での実戦は初めてだけどえげつないわ…これ。奴の右頬が大きく抉れる。

「グッ…ギッＡＡＡＡＡＡ!!!!!」

反撃とばかりに大振りの一撃を噛ましてくる。おいおい、さっきの俺はこんなトロイ攻撃くらってたのか？

「よっと…」

バゴッ…ドゴーーーーン!!!

やつの攻撃を右に逸らすと、拳が当たった地面がおおきく抉れている。

ひゅーあんなん挽肉になっちまうよ。

俺は全身の筋肉に意識を集中させる。

ビギバギメギゴギュ

筋肉が肥大化して力が湧いてくる。

今の体は生きている…蝙蝠とリンクするってことはアイツの身体も俺と同化するって事だ、だから俺は今痛みも感じる、疲れも感じる、汗も吹き出す、血も流れる。

生命を全身で感じつつ。相手の身体に拳を打ち込む。
【ラッシュとは1発1発殺意を持って撃つものだ。】
プリズナーさんがいつぞやに深海王に言われたと言っていた。
1発1発殺意を込めて。
ズドドドド
ルイーツェの身体に何発もの窪みができる。最後に…
ベゴォォ!!!!
横蹴りを浴びせてルイーツェが船に叩きつけられる。
仕返し完了。さっきはよくも、ペシャンコにしてくれたな？
ズン!!
「ＵＧＧＵＡＡＡＡＡＡＡＡＡ!!!!!」
奴が腕を大きく広げてこちらを捻り潰そうと船から翔んでくる。
奴の懐に入り腹に拳を入れる。
「終わらせてやる。」
メリィッッッ！バン!!!!
奴の背中から円形の空気が放出される。
「グッハァ見事……な……り」
ドシャァ
とうとうルイーツェは倒れる。俺は安心して一息着く
ふぅー同化まじでぱねぇな。いや違うなルイーツェは半ば我を失いかけていた…そうまでさせたのは主への忠誠からかそれとも。戦いに興が乗りすぎたか…。
「あしなよ…そなたは誠の強者…であった…誇って…よ…いぞ」
「お前も良くあそこまでやるよ。鬼神なんちゃら使うまで俺と戦いたかったのか。」
「我は…ボロス…さ…まに…忠誠…を誓っ…ている。…誠の…忠誠を…な…自らが…逃げて…ボロス…さまの…お手…を煩わせるなど…もっ…ての他…」
「ルイーツェ…お前は本物の武人であり立派な騎士だよ。」
「介錯を…頼む我が血を…力と…してくれ。貴殿との戦いは実に最後を飾るに…相応しいものだった。貴殿はまだ余力があった…みたい

だがな…」
「蝙蝠…」
手に蝙蝠を呼び寄せて同化を解除する。
「それ…では…頼む。」
「御免」
シュッ
ルイーツェの首を切り落とす。そして胸に蝙蝠を突き刺し血の継承を行う。
俺は手を合わせる。責めてもの弔いである。これが終わったら墓でも立てるか…。
それにしても。ボロスとかいってたっけ?きっとサイタマさんがぼこしてんだろうなぁ。
俺は未だ落ちる気配の無い船を見上げた。

ヒーロー

懐からライターを取り出してタバコに火をつける。ゆっくりと煙を吸い込んで、吐き出す。
あぁ^ーたまらねぇぜ。戦いの後の一服。心が落ち着く…
「アシナさん！流石です！」
ジェノス君が駆け寄ってくる。まだ吸ってる最中だけど…しゃーない。俺はタバコの火を消してジェノス君の方を向く。
いやぁ流石って言われる程でもないと思う。同化まで吐いちゃったし。実際もう一段階あったら確実に死んでたね。
「ジェノス君。サイタマさん知ってる？」
船内だろうけど一応聞いておく。
「すいません…俺も詳しくは分かりません。ですが船の中だと思いますよ。」
「終わったかの？アシナ君。」
あっバングさん…なんで上裸？
「なんで上裸なんです？」
「いやはや…ちと攻撃を貰ってしもうてな…アシナ君の方こそ。船に叩きつけられて居たが大丈夫なのか？」
「まぁ…はい。生身だったら死んでましたけど。何とか生きてます！」
死んでるけど。
「なら良いのだが…」
ズズズズズン
あっ爆ぜた…落ちて込ん？あれ…やばくない？この位置。
「ふっ二人とも走りますよ！」
「そうした方がええみたいじゃな！」
「アシナさん。体の方大丈夫でしょうか？なんなら俺が背負い…」
「大丈夫、大丈夫！ほら！ダッシュ、ダッシュ！」
俺は蝙蝠を手元に寄せながら全力で走る。
向こうでプリズナーさん達も走ってる…抜けそうだな。

「プリズナーさん達！もっと急がないと潰されますよ！」
「分かってんだよ！んなこたぁなぁ！おせぇぞオカマ！」
「エンジェルダッーシュ！」
「くそっ！シルバーファングなぜそんなに早い！」
「師匠張り合ってる場合じゃないでしょ!?」
「皆さんとにかく走って下さい！」
ドドドドドドドドドドドド
なっなんとか助かった。死ぬとこだったぜ。
（主よルイーツェの亡骸を出してくれぬか？）
あっ何？収納してたの？
（スキルの取得と分析が不十分だったので取り敢えずしまって起きました。）
おっけ。帰ったら部屋で分析しよ？そんで終わったら折角だし埋葬してあげるか。
（御意）
「あっタツマキさん！お疲れ様です」
「あぁあんたね、お疲れ…てか！あんなのに手こずってんじゃ無いわよ！全く…今度から訓練に実戦形式も追加してあげるわ。あんな体たらくじゃS級の恥よ！恥！てか奥の手があるなら直ぐに使いなさいよ！もったいぶってカッコイイとか思ってるわけ!?信じらんないわよ全く…だいたいねぇ！」
あータツマキさんのお説教が始まるぅ。あっちじゃアマイマスクさんと金属バット君が喧嘩してるし。あー。アマイマスクさんが宇宙人を殺してる。容赦ねぇな。あの人（・∀・）こ、こわー…あっ…メタルナイトさんだぁ！サイン貰いに行こ！
「ちょっと！ちゃんと聞いてたの!?」
「聞いてましたよ。タツマキさん。」
嘘である！9割9分聞いてなかった！
バゴン！
船の方から音が聞こえた。生き残りか？
俺は蝙蝠に手を掛けて臨戦態勢を取る。

「お？出れた。」
「サイタマさん！無事だったんですね！」
「ん？あぁアシナか。今回はすごかったぜ、帰ったら話してやるよ。」
「じゃあ。食事会でもしますか」
「お？いいね。やるか」
　サイタマさんだとわかり緊張を緩める。
「なんであんたが宇宙船の中から出てくるのよ。」
「先生！無事でしたか。」
　ジェノス君もなんだかんだ心配だったんだなぁ
「おう。ジェノス終わったから帰ろうぜ。アシナが飯作ってくれるってよ。」
「そうですか。それより先生！血が。」
　安定の強さだなぁサイタマさん。サイタマさんが帰る為に歩を進めたから、俺も帰るために歩こうとする。
「ちょっと待ちなさいよ！どうやったか知らないけど、単独で乗り込んでたの!?なに勝手な事してるの!?B級の分際で出しゃばるんじゃないわよ！あんたなんか居なくても私1人で十分だったんだから！ハゲ！ハゲ！タコ！ゆでたまご！アボカド！マヌケ顔！」
　うぅわぁ　ボロくそ言うねぇタツマキさん。
「おいくそ餓鬼、黙って失せろ。ぶちのめすぞ。」
「いいぞージェノス！いけいけー」
　売り言葉に買い言葉だな…止めるか。
「御三方…もうその変で…」
　ボガォ
　ジェノス君が愉快な現代アートになっちゃった…
「はぁ…」
　ため息しかでねぇ。
「許せない…！餓鬼だなんて！私は！あんたより年上よ！」
「タツマキさん。それ以上はダメです。」
「はぁ？何よアシナ。あんたまであたしに口出す気なの？」
「貴方…その力を私利私欲に使うなら怪人と変わりませんよ？」

「はぁ何よそれ？喧嘩売ってる？」
「我々Ｓ級は人類の為にその力を奮うからヒーローとして扱われているだけです。その力を欲望のままに使えば怪人となんら変わりありませんよ？」
「何を言い出すかと思えば…」
「アシナ君の言う通りじゃ。タツマキ！お主はそれでもＳ級２位か？」
「うっ…ふん!!!!まぁいいわ！」
「アシナ君…礼を言うぞ。お主が良識人で良かったわい。わしだけであれを止めるのはちと骨が折れる。」
「ははは…さて…サイタマさん達もです！相手を煽るような行動は控えて下さい！火に油注いでどうするんですか！」
「あー悪かったよ…反省してる。」
「本当はタツマキさんに言って貰いたいですが…また口喧嘩になりそうですし…」
なんで力がある人たちってこうも思考が短絡的で脳筋気質なんだろ…
この日Ａ市が地図からなくなった。

怒り

さぁてさてさて。宇宙人襲来の翌日、俺はタツマキさんと待ち合わせで訓練を行いに旧A市本部まで足を運んだ。
「タツマキさん、お待たせしました。」
この人は何時も時間より前に来てくれている。凄く律儀だと思う。俺も早めに来たつもりだったけどこの人はもっと早かったみたいだ。
「あら、今日は遅刻しないのね。それどころかあんたが早く来るなんて。明日はきっと災害レベル竜ぐらいの雨が降るわね。」
「ははは…」
現に遅刻寸前である事は変わりないから言い返せないんだよなぁ。
「まぁいいわ。行きましょ」
「あっはい。」
俺たちは何時もの町外れまで移動する。
「今日は実戦形式の約束よ。手加減して捻り潰して上げるから、全力でかかってきなさい。」
「はぁーやっぱり実戦形式なんですね…」
勝機が無いわけじゃないけど、余りやりたくないんだよなぁ。
「当たり前よ。昨日の事…忘れたとは言わせないわよ。あたしの事をチビだの、餓鬼だの、化け物だの、怪人だのよくも好き勝手言ってくれたわね。絶対許さない！死なない程度に殺してあげるわ！」
「分かりましたよ。やりますよ…蝙蝠『同化』『血纏』」
俺は蝙蝠を身体に取り込み、血纏を発動させる、すると、腕に黒々とした紋が浮かびあがる。
「そこの石が地面に落ちたら開始ね。」
タツマキさんは手頃な石を超能力で浮かせて宙に放り投げる。
…
…
…
カツン…バゴォ！
俺は開始早々タツマキさん目掛けて拳を奮う。

「うっ…やってくれるじゃない！お返しするわ！」
タツマキさんの周りの岩が浮き上がり真っ直ぐとこちらへ向かって来る。
ドズん
おぉ？体が重くなった。身体に突然負荷がかかる、身体が重たい状態で岩を砕き、流しながら少しずつ歩いていく。
「ブギギギギ。ね・じ・き・れ・な・さい！」
おっおぉ首が曲がってく。同化状態でこれは少し不味いな。俺は気合いで首を正位置に戻す。
「はっはぁ？なんで耐えるの……！？」
ズゴォ
タツマキさんの一瞬の隙をついて空に打ち上げる。また護られるか…よくあの一瞬で判断できるよ。俺は飛び上がりもう一度タツマキさんを殴ろうとするが。殴れずにそのまま地上に押し付けられる。
「ふっふふふそのまま。すり潰してあげる！不死身のあんたなら死ぬことはないでしょ！」
質量をもった大きな岩が1つまたひとつと積み重なる。
「シャラくせぇな血流技『血潮』！」
バグシャァァァ
周りの岩を血潮で吹き飛ばす。そろそろ決めにかからないと時間が押してきてるなぁ。
「はぁ！？あたし常にあんたに重さかけてるんだけどなんでそんなに動けるのよ！？」
俺はタツマキさんに一気に近づきタツマキさんの頭を鷲掴む。
「はっ？ちょっ！？放しなさいよ！…放せ！！」
グヂョォア
肩から先の腕が後方に吹き飛び、圧力に耐えきれず塵になる…
痛ったぁ。やば…死にそうなくらい痛い。
「『再生』」
ゴボメギバギョ
傷口から腕を生やして肩を回す。

「ふぅー…ふぅー…ふぅー…潰す！」
ドグォ！
再び俺の身体にとてつもない圧力がかかる。それどころか激しい風が俺の身体を切り裂こうと襲ってくる。
「あたしに刃向かったことを後悔しながら死になさい!!!」
あぁー完全に血が登っちゃってるな…あれ
同化解除したら細切れだろうしなぁ。いや夕日でもできるか？賭けるか。
「『夕日』」
俺の腕が炎に包まれて手に夕日が収まる。
「血流技…」
辺りを吹き飛ばす紅蓮の炎。同化状態の強化された夕日しか打てない超必殺技。
『幻影鳳凰斬!!!』
ズブォォォアアア
炎の斬撃が鳳凰を形取り辺り1面吹き飛ばす。
「!?!?なっなによ！それ!?…キャッ」
タツマキさんを鳳凰が飲み込み大きな柱を立てる
タツマキさんはその柱を力で払い。睨みつけてくる。
「あんたねぇ！絶対ゆ……」
もう耳すら聞こえていなかったタイムリミットまで数十秒という所。取り敢えず一撃入れなきゃって言う焦りからかなのか俺はタツマキさんの元へと飛びかかり拳を入れようとしたとこで力が入らなくなった。
「は？どうしたのよ！ちょっと！なに寝転がってんのよ!?」
「ずっずびばぜん…ど…どうが『解除』！」
蝙蝠との同化を無理やり解除する
「うっぷ…吐きそ…」
「はぁちょっと、どういうことよ。それより目の前で辞め…」
もう無理限界！
「オルロロロロ」

胃の中の物を盛大にぶちまけ。キラキラーと言う効果音が欲しいとこだがここはアニメでも漫画でもない。そんなものが着くはずもなく

「いやぁぁぁぁぁ!!!」

タツマキさんの悲鳴が晴れた青空に響き渡った。

友愛と己の義

あいつがゲロ吐いてから私はあいつを超能力で浮かせて運んでる。
「うっうげぇオブゥ」
あいつの青い顔がさらに青くなっている。
さっきの戦い…あいつが倒れなければ、もしかしたら私は負けていたのかもしれない。あいつの幻なんちゃらかんちゃらだって、かなりの威力を出していた。吹き飛ばすのだって少し辛かったぐらいだ…それに最後のあの明確な死のビジョン…こんな感覚は久しぶり…いや初めてかもしれない。負けそうになる、少し新鮮な感覚だった。
試合に勝って勝負に負けるとはこの事ね。
「はぁーまぁ勝ちは勝ちだし。こいつが回復したらなんか菓子類でも奢って貰おうかしら。」
何がいいかしら。ケーキ？それともクッキー？和菓子なんかもいいわね。あぁ楽しみね。
私の頭の中はもうお菓子の事でいっぱいだった。早く協会の方へ言ってこいつを下ろしたいが協会まではまだまだありそうだ…
「あー本当に面倒ね！」
こいつが気持ち悪くならないようになるべく速度を落として飛行している。だから協会までが物凄く長く感じられる。何時もだったら、最大出力でドーンと飛んできちゃうのに…そう言えばこの前あいつ私の事怪人と変わらないだのなんだの言ってたけど、結局なんだったのかしら。後で問い詰めないと。
「ごっごうもりぃ、慈悲の刀出してー」
？あいつ…自分の刀に話しかけてるの？痛いやつじゃない！
は？あいつの手元にさっきまでなかった小さな刀が出現したんだけど。どういうマジックよ!?
あいつはその刀を自らに突き刺しだす
はぁー!?!?!?
「ちょっちょちょ何やってるのよ！やめなさいよ！そんな事したって酔い止めには…」

「あっあぁ大丈夫ですよ…この刀には回復効果があるんで切ったり刺したりすると体が回復してくんですよ。便利でしょう？」
　いや…便利でしょう？じゃないでしょ。確かにさっきよりだいぶマシになってきた気がするけど…さっきなんて青通り越して蒼って感じだったし。今は何時もの生気のない青白って感じだし。
「タツマキさん…ご迷惑おかけしました。下ろして貰って構いませんよ。」
「いいわよ、別に。このまま協会まで運んであげるわ。」
　私は考える事を辞めてスピードを上げた。

　やっと協会まで着いたわ。長かった…
「ほら！アシナ！何処か連れてきなさい！」
「ん？そんな約束してましたっけ？」
「はぁ？運んで上げたのにお礼の１つも無いわけ???」
「あぁ。分かりました配慮不足でしたね。では何処に行きますか？」
「んーお菓子のバイキング行きましょ！食べ放題のバイキング！」
　疲れた脳を癒すには糖分が１番よ！バイキングなら和菓子とかもあるかもだし。
「分かりましたでは行きましょう」
「さぁ！思う存分食べるわよ！」

「２名でお願いします」
「はっはい！かっかかかしこまりましたぁ！」
　店員がずいぶん慌てた様子で席へ案内する。まぁＳ級２人…しかも上位の名前を知らない人のが少ないでしょうね。顔も割れてるだろうし。慌てようも納得が行くと言う物だ
　。店のルールを一通り聞いて私はケーキと紅茶を持って席に戻る。
「あんたはコーヒーだけでいいの？」
「ええまぁ甘い物は２・３個食べればいいかなぁと」

「ふーんまぁいいわ。いただきまーす……んー美味しぃ」
　持ってきたイチゴのケーキもモンブランも程よく甘くて癒される。口直しの紅茶もほんのりと苦味があって菓子類とよく会う。
「そう言えばあんた。この前私のこと怪人呼ばわり下じゃない？あれはどういうことよ？」
　ケーキを食べながら先程疑問に思ったことを聞く。
「タツマキさん……ヒーローと怪人の境界ってなんだと思います？」
「ヒーローと怪人の境？人に害をもたらす力をもった人ならざるもの達じゃないの？」
　おかしな事を聞いてくるものだ。
「確かにそれもそうですね。でもそれに当てはまるのなら俺もタツマキさんも、シルバーファングさんもS級の方々全員人に仇なす事のできる力を持った怪人になってしまいます。」
　確かにそうだ。
「じゃあ悪の心を持った者たちとか？」
「悪ってなんでしょうね？」
「悪とは何か？そんなもの人を殺そうとか。イケナイ事をしようとか言う奴らの事じゃないの。」
　悪とは何か…少し難しい質問だ。私はそれに曖昧な答えしか出すことが出来ない。
「悪なんて早々ありませんよ。そう言った人達は外道や下衆とか言う言葉が相応しいです。悪なんてないんです。我々人間が怪人と呼ぶ生き物は悪や怪人などではなく強大な力を人間に奮うだけのただの動物です。」
　ふむ…強大な力を人に使う…か
「戦いとはどこかの誰かが言ってましたが。正義と正義のぶつかり合いです。それぞれにそれぞれの意思があり正義がありますその意志をそして正義を邪魔する物がいるから戦いが起こるのです。我々が怪人と呼んでいるそれらも自らの意思をもって暴れ、力を奮います。彼らを止めるのが同じく力を持った我々ヒーローと呼ばれる存在です。」

己の正義のぶつかり合い…
「我々ヒーローは力だけで言えばそこら辺の怪人と変わりません。その力を何かを守るために使うか否かで怪人かどうかが決まると思ってます。昨日タツマキさんはサイタマさんやジェノス君にその力を奮いました。守るためではなく…破壊するために。」
「うっ」
耳が痛い…確かにあの時はあいつらを殺そうとまでは行かずとも痛めつけようとはした…
「だから俺は怪人達と変わらないと言ったんです。守るものを無くした破壊するためだけに暴れる怪人。」
「なら…あんたは何を守ってるの？何のために…誰のためにその力をあの異形達に奮うのよ。」
「俺の話をする前に一つだけ言っておきます。」
「なによ？質問に答えなさいよ。」
「俺は種族的に言えば怪人に値します。」
……はぁ？アシナが…怪人？
「今もありますよ？破壊衝動。ここで暴れて辺りを血溜まりに染め上げたいという怪人らしい暴力的な思考が…」
…ッ!?
私はアシナだけを押さえつける。騒ぎを起こさないように全方向からその場に静止させるように。
「どういう…ことよ…」
「でも俺は他の異形と違って自らを律することができます。衝動を抑えて。こうやってタツマキさんと仲良くお茶もしてます。種族的にも怪人だし、今の心の在り方的にも怪人。ですが、その力を奮う目的が他の怪人を潰すため。まぁ同族殺しの性癖を持った唯のサイコパスですよ。」
「はぁ？何よそれ？」
バカバカしくなって拘束を解く
「うおっとぉ。さて先程の質問の回答ですが…俺は自分を守っています。この力を自らの為だけに使う。その結果たまたま人を助ける事

に繋がるだけであって。ですが俺だって元人間。感謝されれば人並みに喜びますし誹謗中傷されれば傷ついてしまいます。」
　アシナはおよよよっと言った風に服の袖を手で掴んで目元に持ってくる。
「くだらない。」
　おっと言葉に出てしまった。
「奴らと違って人としての感情と喜怒哀楽だけは捨てないようにしてます。まぁ、タツマキさんの質問の、なぜ昨日怪人呼ばわりしたか、に大しての回答はこんな感じになりますね。満足ですか？」
「まぁまぁね」
　腑に落ちない部分もあるけど。まぁどうでもいいわ。こいつが私達の敵にならなければどうでもいいし。
「あんたが…」
「はい？」
「もしもあんたが人としての心や気持ちを忘れて衝動のままに暴れる怪人になったなら。」
「なったのなら？」
「私が細切れにし続けてあんたが正気に戻るまで助けてあげるわ。でも！その代わり、私がもし怪人にやられそうになったら。あんたが私の事を助けてくれるかしら？」
　私らしくもないけどこいつには少し…ほんの少し友愛と言う感情を持ったって良いのかもしれない…『いざと言う時誰かが助けに来てくれるとは思わない方が良い』私がヒーロー目指すきっかけになった人の言葉。でもこいつなら…不死身でそこそこ強いこいつならば私がピンチの時は助けてくれるのかもしれない。
「そうですねでしたらこれを渡しておきますね。」
　変な紅い石を渡された、凄く綺麗だ。透き通るような紅色で向こう側が見えそうだ。
「俺の瞬間移動能力の断片を分離させたものです。それに声をかけてくれればいつでもどこでも向かいます。だからそれを肌身離さず持っていて下さい。」

「へぇー分かったわお守りにでもしといてあげるわ。」
「さてバイキングの続きを楽しみましょう。俺も少しなんか食べます。」
「私も食べるわ。」
その後は2人でワイワイと楽しんだ。この石が使う時が思いの外早く来ることになろうとはまだこの時は知るはずも無かった。

ピコピコ

タツマキさんとの茶会から1週間と少し程経つ。今日は怪人相手に1週間程訓練した流水岩砕拳を使ってみた所普通に通用したのだ。道場に通いつめた甲斐が会ったというものだ。

久しく忘れていたけど今の体の…いや蝙蝠の成長促進能力を些か甘く見ていた。まさかこれ程とはなんかほかの人たちに申し訳無くなってくる。明らかなずるだし…まぁ同化時の戦闘力が著しく上がったから満足である。

後はタツマキさんから頻繁に連絡が入るようになった。今日はどんな怪人を倒しただとか今度の訓練は何時にするだとか色々と…まぁ暇だから返信したりしてるけど。

最近怪人の出現件数が妙に多い。しかも鬼とかも頻繁にでてる…なんか予期せぬ事態の前兆かも…

「あーあーやだやだ帰ってタバコ吸おっと！」

俺はニコチン摂取のために足を早めた。

ガチャッ

「ただいまー」

（お帰りなさいませ主よ。）

このやり取りはずっと続けている。俺が1人でやっててもから何時からか蝙蝠におかえりをお願いしたのだ。

ニッコチンー　ニッコチンー

ガララ…

スゥー……フゥー

今日も一日ご苦労…俺！

ピポピポピンポーン!!!

あっ？誰だよニコチン中だぞ。居留守使おうかな？

「おーいアシナァ？いないのかぁ？」

あぁサイタマさんか…しゃーないでるか…

「はいはーいますよぉ」

ガチャ…
「どうしました？」
「タバコ吸ってたのか？悪いな。」
ホントだよ
「今からフブキんとこに戦いしに行くけど来るか？」
「なんじゃアシナ君も誘うのか？」
「バングさん！貴方も参加するんですか？」
「まぁなちょうど良いじゃろうお主の流水岩砕拳を楽しみにしておくぞ！」
ドッドッドッドッドッドッ
この音は聞き覚えがあるぞ。キングさんだな？…やっぱり
顔に刻まれた3本の線と雄々しい顔立ち。蝙蝠ですら測定出来ない。エネルギーのコントロール力その力は未だ未知数。是非今度お手合わせして欲しいものだ。
「キングさんも居たんですね。」
「あぁサイタマ氏の頼みだからな。行かない訳が無い。」
流石漢の中の漢だ友のためならなんとやらと言う奴だカッコ良さが違う。
そんでジェノス君は当然の如く居ると…
「ほんでアシナ来るのか？」
「是非とも行かせて貰います！」
２つ返事だろう。キングさんの実力も見れるしこのメンツならまず何が来ても負けないだろう。

「おいフブキ来たぞ」
「貴様ら先生の貴重な暇な時間を無駄に使わせて唯で済むと思うなよ」
「言葉おかしいよジェノス君。」
ほんとにサイタマさんに盲目だよなぁこの子。
「それがサイタマ組ってわけね…」

どうやらサイタマさんが契約書にサインしなきゃ行かんらしい。多分適当にやってそうだよなぁあの人。
「負けたチームは勝ったチームの言うことをなんでも聞くこと…ふふ♪しっかりサインしてるわね」
「えっ？そんな事書いてあったの？」
やっぱり読んでなかったよ
「サイタマ氏ィこれからは説明書とか利用規約とかしっかり読んだ方がいいよ」
「先生！ここは俺がまとめて排除します…」
排除とか怖ァ。
「ジェノス君。排除しちゃだめだって」
「まぁまぁアシナ君。ジェノス君やここはワシに任せてくれんかの？けが人は出ないに越したことはない。どれ…ワシが軽く稽古を付けてやるぜ」
やる気だなぁバングさん。
「負けたチームはわしの道場で全員1から鍛え直すこと！突然後輩が増えてチャランコも驚くぞ！」
気になる勝負の方法がなんと
「じぃさん！攻撃しろって！違う違う！右のキャラがじぃさんのキャラ！セレクトボタン連打するな！それ挑発だから！」
「バングさん！取り敢えずAボタン！Aボタンです」
ゲーム対決だった。終わった…勝てるわけがないよ…ゲームなんて学生の頃以来だぞ。社会人になったら余裕なんてなかったから触れてないから腕はガタ落ちだろうし。
あっバングさんが負けた。あーめっちゃズーンってしてる。苦笑いしか出来ねぇ。
「誰も直接勝負するなんて言ってないわよ。同意書にも勝負内容は記載していたし。最後まで正々堂々と受けて貰うわよ。まぁ先鋒の彼だけで決着着きそうだけど。」
フブキ組のメガネボーイのメガネが光る。
俺は天を仰ぎ手を顔に載せる。あーダメだこりゃ。

試合は進みジェノス君サイタマ君と終わって俺の番だ
ジェノス君は初手でコントローラー握りつぶしちゃうし。サイタマさんは普通に負けるし。
さて死にに行こうか…

結果手も足も出ませんでした。強攻撃連打したらガードして掴みからの空中コンボでＧＧでした。泣いていいですか？
「アッハッハッハッハッさて残るはキング１人のみよ！ストイックな戦いの人生しか知らない貴方がゲームで彼に勝てるかしらァ!?サイタマ以下４名フブキ組に加入してもらうわ！」

俺たちは今蜘蛛の怪人を御している。まぁ俺が出るまでもなかったけど。
タバコ出そうと思ったけど童帝君がいるなぁ
なんかオカメなんちゃらで測ろうとしてきたけど遠慮しといたどうせ蝙蝠の方の数値が出ちゃうだろうし。
そう言えばゲーム大会だけど結果から言ってキングさんの一人勝ちだった３０人切り恐れ入ったね。常時おーって言ってたもん。
それでフブキさんがずっとｏｒｚ状態なので何とかしてあげたいけど。まぁサイタマさん達が何とかするでしょう。
「周りを気にするな！」
サイタマさんの激励が響く。
「うわぁ子蜘蛛だ！」
「ここら一体焼却を…」
「行かん！辺り一帯巻き込むぞ！」
血潮で飛ばすか？

そう思った時。蜘蛛が宙に浮き始める。ん？宙に浮く？え？エスパー？どことなく雰囲気も似てる気がしてきたぞ？
俺はフブキさんに最近妙に丸くなった緑のクルクルさんを重ね合わせる。
あっ似てるー目元とか。口調とか。態度おっきいとことか！
「あなたや姉が私より強くたって関係ない！私は私のやり方でいく！」
後で関係性について聞いてみよ。
「今日のところは大人しく負けを認めるわ…でも、まだ諦めたわけじゃないから…それじゃ。」
「いや「それじゃ」じゃねーよ負けたんだから約束通り飯奢れよ。」
俺たちはレストランでご飯をご馳走になってそれぞれ家に帰った。
蝙蝠の手入れをしながら思い出す。
タツマキさんとの関係性…聞くの忘れたやん。

侵食

「こちら首切り触手の怪人討伐完了。次の場所に向かう！」
今日だけで3件目…休まる隙がねぇなぁ。ヒーロー狩りとかいう不審者も出てき始めてS級のタンクトップマスターがやられちまう始末だし。
「世も末かね…」
スマホに表示された位置情報の場所にかける。
「んぴょ？」サクッ
背中を向けてた怪人の首を跳ね飛ばす。次、巨大蛾の怪人を細切れにする。次、千手の怪人の腕を切り飛ばし首を取る次、サクッと行こうやサクッと
道中で見かける人を襲ってる生き物を片っ端から切り捨てる。避難所への避難を催促して次へと向かう。ダメだ、対応が…追いつかねぇ。
「くっそ埒があかねぇ。」
次から次へと送られてくる位置情報に嫌気が指す。
顔に付着した返り血を拭う。
「我が名は火薬マンンンンンン」
「じゃまだよ怪人どかなきゃ切るぞ。」
首を落としてから言っても意味無いか…一体何がどうなってやがる。クソっ止まってる時間でさえ勿体ねぇ次だよ次！
目の前に緑の人型の虫がいるから切り捨てようとするが。
ガイイイン
「痛いじゃないのぉ？キミィ？」
ッッッ?!?!?!
俺は急いでその場から飛び退く。
「ん？君がぎょろぎょろの言ってたアシナ君？初めましてだね。僕の名前は昆虫王。君と同じ…怪人だよ？」
体格や身長は人だった。だが奴の頭から足まで虫を合体させたようなキメラのような風貌である。

頭があれは？カブトムシ？腹はカマキリなのか？んで足がイナゴと…しかもなんちゃら王とか言う名前にいい思い出がないな。
「君、かなりできるようだね…もし良ければだけど、僕達の怪人協会に入る気はない？君なら直ぐに幹部階級まで行けると思うよ。」
「あ？怪人協会だと？」
ヒーロー協会の真似事か？バカバカしい。
「誰が入るかバーカ」
俺は舌を出して拒否の姿勢を取る。蝙蝠を構えて戦闘態勢を取る。
「そうかぁ残念……だぁなぁ!!」
ガィン！
強力な一撃が俺を襲う。何とか剣で弾くけど。直ぐに次の手が来る。
ガガッ！ガガガガガ
「アッハハハハハどうしたのォ？守ってばかりじゃ倒せないんじゃないの？」
「あぁその通りだ…それよりもお前…腕大丈夫？」
昆虫王が自分の腕を確認するが見た先にあったのは肘より先のない腕だった。
「ッッッ!?!?」
「遅いし弱い。」
シュパッ
刀が空を切る。消えた…？逃げたか
「君の事を見誤っていたよ。君は成長し続けるみたいだ。」
どこからか声がする。
「君と僕とじゃ相性があまり良くないらしい…僕は僕の任務を果たさせて貰うとするよ。それじゃまた会おうか。怪人アシナ君。」
気色悪いけど見た目は仮面ライダーみたいで好きなんだけど。
次行くか。
ｓｉｄｅタツマキ
たくっ。ドイツもこいつも私がいないとダメね。フブキに至ってはまだＢ級同窓会を続けて居たみたいだし…はぁーあ…またアシナ

に愚痴ろうかしら。そういやあいつどこら辺にいるのかしら。少し顔でも見に行ってやろうかしら。
「ふふっ」
私今笑った？行けないわよ今は仕事中よ雑魚を全員処理してから。彼に連絡して遊びに誘えばいいわ…よし。そうと決まれば張り切って行くわよ！

あそこの公園に1匹いるわね。先手で片ずけるわ！
ドゴォォォ!!!
「危ないじゃないか？ドイツもこいつも。挨拶が出来ないのかい？…ん？君は。あぁ君から来てくれたのか嬉しい限りだよ！」
「何よ…あんた、頭大丈夫？まぁいいわよ、今から死ぬ相手の事にいちいち気にかけてらんないわ。」
首ねじ切って。終わり！
相手の首元からパキパキキと子気味いい音が響く
「おっおおお。これが超能力？確かに首に圧はかかるけどぎょろぎょろが言う程じゃないなぁ。少なくとも僕なら耐えれるね。」
嘘…こいつ耐えきったの？いやならば
「握りつぶしてあげる！」
相手の動きに制限をかけて手のひらをグググッと閉じ用とするが。
「もうおしまい？なら…行くよ？」
ブゥン…
消えたッ!?シールド!!!
バヂン！バゴォズゴォ
何なの？この威力!?ガードするだけで手一杯ってどういう事よ!?
「今回は視察を込めて来てみたけどこの調子なら軽く捻れそうだ…ね」
ズドゴォ!!
いや…マイナスに取らないでプラスで考えなさい。防げているのなら反撃できるはずよ…

いいわ…すり潰したげる
奴の両サイド地面を四角く抉ってサンドイッチ状態にして挟み込む。
びしびし…バギャン
「こんな脆いもので僕が倒せるとでも？舐めないでよ。あぁそうだ名乗ってなかったね。ゴホンゴホン。名乗らせてもらうよ。怪人協会所属、階級は幹部。昆虫王と言うものです。災害レベルは推定竜と言われました。今から死ぬタツマキさんには関係のない無用の代物ですが。冥土の土産だと思って受け取ってください。」
……潰す。
ズドン
相手に荷重を最大限までかけて押し潰す。
「おっおっおっこれは…辛い…かな？」
プープープーン
耳のまわりで小虫が羽ばたく音がする。
うるさい集中が切れ…あっ…
バギッ
ガードが少し遅れた…攻撃を受けてしまった。もうあと数瞬でも遅かったらもうミンチになってたかも…って思うとまだ良かったのかもしれない…けど。
「ごめんねぇ？でも僕も使えるもの使わないと勝てないから…さ？超能力って精神力と集中が直に影響するらしいね。」
やつは仮面らしき物を被っているから顔が分からないけどきっと気色の悪い笑みを浮かべていることだろう。
「知ってる？虫の羽音ってとってもイライラするらしいんだ。」
そう言った途端おぞましい量の羽虫が奴の背中から飛び出す。
ゾゾゾゾ
生物的嫌悪を与える。気持ちが悪い。
「後はこれだね。」
ビュブブブブ
なに…よ…この音…意識が…散漫になる。

「僕の羽はね？人の感覚を狂わす特殊な音を出すんだ。僕にとっては聞き心地のいい音だけど。」
周りの虫を纏めようにも精神が安定せず集中も出来ないこの状態で超能力を使えと言う事に無理があった。
「んくくく。面白い事をこれから起こそうか？」
あぁ絶望ってきっと今みたいな感情の事を言うんだろうな。

救済

頭が痛い…耳障りな羽音が鳴り響く。超能力が使えない。その状況で相手を殺そうなどと言うのは不可能に等しいものだった。
「君と長期戦になれば僕は確実に負けていただろう。いずれ心の迷いから首を捻り飛ばされてね…だけど僕の羽音が君に効いて良かった。これで君をじっくりと嬲れるね。」
奴がゆっくりと近づいてくる。立ち向かう？無謀だ、逃げる？どうやって。それにそんなことはプライドが許さない…
「あぁあああああ!!!」
叫びながら超能力を使おうとする。ダメだ全然集中出来ない…
「そうだね良いものを上げるよ。」
ガシッ。
腕を掴まれて持ち上げられる。
「はっ離しなさい!!このっこのっ!!」
今の自分にできる精一杯の抵抗である、蹴りを放つが効いている気がしない。
ニュグニュグニュグ…プスッ
奴の尻の部分からサソリのような尾が生えて来て私を軽く指す。
ビグッ
体が大きく反応して力すら入らなくなった。
「あっあっあ…」
呼吸はできるが…声が…出ない？何だ？これ。
「これはねぇ強力な神経毒だよ。思いっきり刺せば致死量に至るけど軽く触れるようにしたから死には至らないよ。良かったね。君は面白いからねこのまま巣に連れてって同胞にゆっくりと爪先から食べて貰うことにするよ。」
え？嫌だ……いやだいやだいやだいやだいやだ!!!!
「知ってるかい戦慄のタツマキィ。人の子は虫で遊ぶ時に触覚からちぎって遊ぶんだ。一通り反応を見て飽きたら次はね、足を1本ずつちぎり始めるんだ……綺麗に捩げたら最後は足でぐしゃっとね。今

言った事を君にしてあげよう…楽しみだよ！」
奴の笑い声が辺りに木霊する…そんなの…そんなのって…いやだそんな死に方絶対嫌だ。先程から超能力を使おうとしてるが、あの羽音がどうしても邪魔をする。
舌を噛み切ろうにも口にすら力が入らないのではどうしようもない。
『いざと言う時誰かが助けに来てくれるなんて思わない方が良い。』
あぁそうだ。今はいざと言う時だ誰も助けになんかこな…そうだ彼がいる。あの時約束したのだ…今が使いどきよ…お願い来てよ…。
私は糸にも縋る思いで彼のくれた石に意識だけ向ける。
助けて…助けて…助けてよ…アシナァ…
「何をしようとしてるのかな？目に光が宿り始めたからね…じゃあその希望を潰そうかな？一体何に縋っているのかな？おっ？これか？」
奴は私を持ち上げて首に掛けてた紅い石を取り上げる。
「この気配は…へぇ？6位の首切りが…奴も粋なものを渡す。」
「あー！あー！うーーー！！！！」
返せ!!それは。それはぁ！
パキョッ
「残念無駄でしたァ」
紅い石は奴の手で粉々に砕け散る。
あぁ。もう…ダメなの？彼は嘘を着いたの？来てくれるって言ったのに…どうして…どうしてどうしてどうして
「おや？泣いているのかい？クックックッやっと人間実が出たらしいねぇ。その感情を持ち続けると良いよ戦慄のタツマキ。それが絶望だよ。黒く暗く何も無い。」
1度決壊したダムは留まる事を知らない…初めてかもしれない。物心着いた時から泣いたことなんて無かったでも、もう…無理だ。最後の希望も砕かれて。自慢の力も通用せず…唯嬲られるだけの弱者。考えれば考えるだけネガティブな思考で埋め尽くされる。
だいたい…こいつを誰かが倒せたとしてこいつはまだ下っ端らしいこいつより上の者が少なくとも存在する…ダメだ勝てるわけがな

い…
「さて…残りは巣で楽しむ事にしよう…さぁ行こうか怪人協会に…」
もう…どうにでも…
ズパッ
突然私を掴んでた怪人腕が切れる。私は誰かに抱えられて奴の手の残骸から解放される。その腕はとても冷たくまるで生きてないようだったがとても…心地の良いものだった
「おいおいおい。少し遅れただけなのにもう諦めてるんですか？タツマキさん。らしくないですよ。」
え？う…そ？あ…しな？来てくれた…来てくれたのだ。彼がちゃんと！
「まだまだこれからですよ。蝙蝠タツマキさんの看病よろしく。俺はまぁ夕日でちゃちゃっとあの羽虫倒しちゃうんで。」
「御意」
侍風の男が私を抱えて別の離れた位置に移動する。
「あーあーあー運がないよ…全く。」
「さて昆虫王と言ったか？貴様を殺す。」

焔

ｓｉｄｅアシナ

瞬間移動しようと思ったら石が砕かれてすっげぇ焦った。全力で走って来たけど間に合って良かった。

「さてさてさて。随分とタツマキさんが世話になったみたいだね。」

「あぁお世話してあげたよ？だからここは見逃してくれないか？首切り」

「俺がお前を逃がすとでも？……答えはＮＯだよ」

夕日だけでパワー足りるかどうかわからんけど…とりま…やるか！

夕日に炎エンチャして…

奴が腕を治してる間に…

「血流技『血纏』」

火力上げて。

「参る。」

「来なくて良いよ。」

ガイン!!!

刀と拳が交差する…先程と強さは変わりないね。手こずるような相手じゃないや。

「やっぱ近接戦闘は苦手だなぁ。」

カサササ

安定の速さだ。だが…関係はない

ブゥンブゥンブゥン。

「血流技『大血潮』」

バジュァァ。びちゃびちゃびちゃ

広範囲に血が飛び散り。奴が地面を走る度にそこから音が鳴る。

「場所が分かったからなんだと言うのだ！関係無い！」

「場所が分かるって致命的だぞ？」

俺は取り敢えず焔の能力入りの発火性の血液はばら蒔いた。

次はっと。刀の切っ先を地面に擦らせて走る。

「隙だらけだぞ！首切りィ!!!!!」
ガイン!!!ブゥン
ヒットアンドアウェイかよ。まぁそうする事を分かっててこんなことしてるんだけど。その後は暫く走り続けて。攻撃がきたら弾いてきたら弾いてを続けた。
「うっし粗方、種は撒き終えたかな？」
俺は大きな血溜まりの中央に移動して胡座をかく
「諦めたのか首切り？懸命な判断だ…だが男の硬い体は不味いんだ。ここで細切れになって死ねぇ!!!やれぇ！我が配下達よ！敵を共に討とうぞ!!!くぁかぁれ!!」
ズブブブブブ!!!
壁のような、夥しい数の虫の集団と昆虫王が俺を殺そうと向かって来る。
「うるせぇなぁ。燃えろよ……青銅の蛇…ネフシュタン!!!」
『ギジュァァァァァァ』
ボジュッ。ガビュ。グチィ。
俺も火の中心に居たが焔の炎は俺には効かない。
蛇の炎の煙が晴れて中からボロボロの昆虫王が姿を見せる。
「やっぱり僕達は相性が悪いよ…虫に火なんて酷いじゃないか…」
あれだけ焼き尽くされても尚、奴はそこに立っていた。
「ふふふ。ここいらでおさらばさせてもらうよ…」
しかし外殻は溶けて中の緑色の肉体が顕になり仮面の奥の虫の複眼がこちらを覗いている。ダメージは大きいようだ。
「逃がさん！」
フッ…
『僕はまだ死ねないんだよ。僕を庇ってくれた配下たちの為にもね…それに今回は偵察及び宣伝さ。僕達が怪人協会が君たちヒーローと対峙するのもそう遠くないよ。心しておくがいいさ…』
ちっ…また逃がしたか。
夕日は炎に包まれて手から消える。蝙蝠の中に帰ったのだろう。
そうだ…タツマキさんは無事か？

「蝙蝠!タツマキさんは。」
「主よ。ご安心下さいませ、我が能力は最強でございます。既に治療も…解毒も完了済みでございます。今は安心して気を失っておられるだけにございます。」
「なら良かったよ。んじゃあ、病院に連れて…はダメだね。タツマキさんが怪人負けたとか知れ渡ると民集がパニックに陥ってしまう可能性が高い。家に連れてくか…タツマキさんの家分からんし。協会もタツマキさんが負けたなんて考えたくないだろうし。」
「我はこのまま人型を保ち主を守護します。」
「頼むよ。さすがにタツマキさんを抱えながら戦えない。」
「御意」
俺はタツマキさん抱えながら。取り敢えず家を目指した。

復讐

ｓｉｄｅタツマキ

自分は負けない…つい先刻までは信じて止まない事だった。

それがこんなに…あっさりと。

「うっうぅ」

柔らかいものが下にある…ここは奴の巣の中だろうか。恐る恐る目を開ける。ふむ…知らない天井だ。灰色のなんの変哲も無い、どこにでもあるような…ここはどこだろうか…辺りを見渡すと、文明的な物があちらこちらに見られる。少なくとも、奴の巣では無いと考えた方が精神的には楽だろう。

「いっつ…」

まだ少し頭が痛むしボーッとする。耳の奥であの羽音が木霊し続けている。取り敢えず立ってここから出よう…

「起きたか？小娘。」

?!?!?!

そこには侍を装った男が胡座をかきながら鎮座していた。いつから？どうやって？そんな思考が頭をぐるぐると回る。

「おーい蝙蝠いただいまぁ。」

「ほら小娘。家の主が帰ってきたぞ。」

主？私は恐る恐る後ろを振り向く。

「あぁ起きてたんだねタツマキさん。どこか悪い所とかありませんか。」

あぁ…アシナだ…アシナがいる…心の中でまだ危険なんじゃないかって思っていた事が霧散する。

「おじや作りますからじっとしていて下さいね。今の状態で戦いに出るなどダメですよ。」

怪人を討伐なんて今の私にできるだろうか…1度明確に見えてしまった自分の最後。それを払拭するのはとても難しい事だった。

「今回タツマキさんが負けたのは相性の問題が強いです。超能力が使えなければ負けるような相手では無かったと思います。気を落とす

必要はないですよ。」
　気を落としたくもなる物だ。
「はい、おじや出来ましたよ。」
　目の前に卵のおじやが置かれる。私はそれをゆっくりと口に運ぶ。
「蝙蝠、ありがとうね、ご苦労さま。」
「有り難きお言葉。」
　隣で侍が刀に変形する。少し驚いたがそれだけだった。いつもなら頭がおかしくなるぐらいびっくりしただろうけど。今はそう言った状態では無いのだ。
　気まずい空気が流れる。
　おじやからほんのりと塩の味がして、とても美味しい。傷心した心を少しづつ解してくれる。麦茶を少し飲みゆっくりと食べる。
　ぴるるるるる
「ごめんねタツマキさん。少し席を外すね。蝙蝠、ごめん、休んで貰ったとこ悪いけど…」
「承知しております。」
　また侍風の男が現れる。
　アシナがベランダに出て、喋り始める。
「あっ…」
　気づいたらおじやを食べ終わってた。美味しかった。
「すいませんタツマキさん。協会からで…街に出て怪人の対処に当たって欲しいとのことで。ヒーローらしく無いこと言いますね。俺は怪人です、自らの欲で生きます。不特定多数の分からない命より、今目の前にある大切な友人の命を優先させたいので…協会には今は自分もダメージが大きく出れる状態じゃないと言ってしまいました。まぁ実際血液型タンクの容量が残り少なく。もう一度昆虫王レベルと会って居たら確実にやられてたでしょうけど。」
　アシナの言葉は確かにヒーローとしてはマイナス点所の話ではないが。個人としてはとても嬉しい言葉だった。反面とても申し訳ない気持ちになった。
「そうだ！タツマキさん！前は石を渡したのがあまり良くなかったで

すね。」
　石が割られてしまった事を言っているのだろう。
「今回はこちらにしておきますね。」
　アシナはそう言って、私の手の甲に1本の赤い線を引く。
「これは…何？」
「これはゲートです。俺が転移するための壊されないゲート。あとタツマキさんが体に攻撃を受けた時に薄いバリアを貼るようにも出来ていますので。これが発動した時は俺は確実に向かいますので安心してください。ですから申し訳ないですが。もう少しだけ…頑張れませんか？酷なお願いにはなりますけど。貴方は間違えなく協会の最高戦力です…圧倒的な強さを持っています。俺のように４５分しか戦えないとかではなく。常に全力を出せます。」
　脳へのダメージが大きければ、倒れてしまうが
「それに…何かあれば、絶対に行きます。少し遅れる事もあるかも知れません。」
　まぁアシナ自体に遅刻癖があるのは何回も経験している事だからよく理解してるつもりだ。
「ですが絶対、貴方を殺させるなんて事はさせません。それにタツマキさんなら手も足も出ないなんて事はないと思います。相手も弱っている可能性が高いです。２人で協力すれば絶対倒せます！まだ怖い事ありますか？」
　ない…あるわけがない。
　そうだ…何かあれば彼が助けてくれるのだ。それならば私は全力で戦って、勝てるならば勝てば良い。昆虫王のように嬲られそうなら。癪だが彼に協力を仰げば良い。なんせ彼は絶対に助けに来てくれるのだから…
「ありがとう。アシナ…私はまだ頑張れそうだわ。そうよ！ちょっとだけ負けたくらいでグジグジしてらんないわ!!!あの羽虫。今度あったら翼もいでボコボコにしてやる!!!」
　殺る気が湧いてきた。そうだ…そうなのだ！あの羽と虫さえ無ければ負ける要素など皆無だったのだ。所詮多数で群れることしか出

来ない虫風情が私を倒そうなどと烏滸がましいにも程がある。
「その意気ですよタツマキさん！」
「迷惑かけたわね。おじやご馳走様。帰らして貰うわ。」
「はい！お粗末様でした。送ってきますよ？」
「良いわ飛んで帰るもの。」
私はベランダから外へでて自分の家を目指す。あの羽虫が絶対殺してやる。

悪意の獣

タツマキさんが帰ってから。
街の怪人の掃討のためにもう一度外へと出る。歩いてる内に、体に違和感を覚えて足を止める。
おかしい…耳鳴りが酷い、呼吸が苦しい。視界の端が紅く染まりつつある…
道の端っこに少し腰を下ろす。
昆虫王相手に不覚を負ったか？いや。怪我ぐらいなら簡単に回復出来るはず…なんだこれは…？
蝙蝠……聞こえる？
（如何なさいましたか……ッ!?主よ！…直ぐに毒抜きを！）
ん？……毒抜き？やっぱ昆虫王の毒貰ってた？
（一刻を争います！我を胸に！）
おっおう。わかっｔ…
ゴジャア
（主!?気をしっかりと！）
蝙蝠の声が遠くなる…おかしいなぁ？本来眠くならない筈なのにすっげぇ眠いや…
俺はそのまま久方ぶりの睡魔に身を委ねた。

ｓｉｄｅ蝙蝠
何故だ。先程まで異常は無かった筈……小娘が立ち直って気が緩んだか？
我は主の懐から、人間形態となり対象と対峙する。
主の体を赤黒い血がゆっくりと飲み込むように包み１つの異形の体躯を形取る。奴の様は、目が無く、口は常に弧を描き、隙間から牙が除いており、耳は狐のように頭頂部で尖り、しなやかな血の尻尾が生えている。奴のとは今までも対峙したことがあり、その見た目から獣と呼んでいる。今まで主が寝静まってから。我が主の血を吸って毒抜きしていたが…今日は怪人を斬ることが多かったから暴走して

しまったのだろう…
血の継承は記憶の継承である。その中には当然、切られたもの達の憎しみや破壊衝動等が混じっている。それは全怪人共通である。獣はその切った者たちの憎しみだったり、破壊衝動だったりの記憶の受け入れ値が限界に達した時に発現する。主の本当の姿…つまり主が怪人となってしまった姿である。離脱状態と似ているが性質は異なる。
尾の本数は……4本…多いが…我の相手ではない。癒しの能力の応用。退魔の剣の模造。癒しの能力は体を再生させるだけではない…心も元に戻すのだ…我ながら便利な能力だ…
「きゅー?きゅんきき?」
実に可愛らしい声だ…しかしその力の強さは化け物だ…実際今まで暴走は何度かあった。寝不足だった日は主の暴走の対象に追われていた時だ。今までは2本辺りで処理していたが……
剣を握る手に冷や汗が伝う。油断したら死ぬ……
ニチャア
獣の口が張り裂けるレベルで上に釣り上がる。
来る……
バグイイイン!!!
単純な殴り掛かり。幸い吹き飛ぶ事は無かったが…まともに受けていたら体が持たない……4本でこれである。これより上など…想像もしたくない……奴が立っていた場所は深く抉れている。
ケタケタケタケタ
どこからか笑い声が児玉する。
「血流技『血纏』」
「血流技『夜叉宿し』」
「焔『青炎舞』」
身体バフ系のスキルを多用して張り合えるレベルに持ってく。
クスクスクス。ケタケタケタケタ。
笑い声が変わりながら四方八方から聞こえる。
ペタペタペタペタペタペタ。

真後ろを通る…遊んでやがる……

「血流技『窮地』」

自らの腹に剣を刺して剣の強化促す……地面に血溜まりが出きて準備が整う。一撃で決める。確実に、悪意を消し飛ばす。

ペタタタタタタ……バグォ!!

来たな?

我は少し後ろに飛び退き、奴を血溜まりの中央に誘導する。

「血流技『蛇締め』」

血溜まりから無数の細い蛇が飛び出して。獣に食らいつく。直ぐに蛇が引きちぎられるが、一瞬だけ奴の動きが止まる。

その隙さえあれば良い……

「退魔『悪鬼滅尽』!!!」

紅色の血と青色の炎が混じりあった光が獣を包み込む。コンクリートは剥げて周りのビルが呑まれガラスが割れる。

「ギュギギギギ!!ブギッギッギギギィ!!!」

獣が苦しみ黒い靄放ちながら、のたうち回り一部が霧散する。小さくなった黒色の靄が主の体に収まっていく。

何とかなったな……4本であのレベルでおぜん立てしなければ倒せぬか……

自らに慈愛の刀を突き刺して胡座をかいて主の目覚めを待つ。

反抗

ｓｉｄｅ昆虫王

憎きヒーロー首切り。１度ならず２度までも僕の事をボコボコにした人物。炎と虫が相性悪いのは知ってる。だがまさかタツマキから奴が呼び出される等と思わなかった。タツマキはプライドが高いから縋る物などないと思ったが……悪ふざけせずにさっさと連れていけば良かった…。まぁギョロギョロが宣戦布告した見たいだし、再戦の機会はいくらでもある…気長に待とう。

周りの怪人共はそれぞれいい感じに暴れる事が出来たらしい…

「お前ら…慢心するのは良いが、勢いに任せた行動は必ずある。いつも怪人はそうやって足を救われて来た…ヒーロー協会に何人か化け物がいるのは確かだそう言う奴をとり逃すと後々面倒になる。だから１箇所に集まった所を我々の総力で叩く。そしてオロチ様が王となり。怪人主体の新世界が形成されるのだ！」

あのでかいだけの置物が王？笑わせるなよ…僕は今機嫌が悪いんだ。悪ふざけも大概にして欲しいものだ…

「俺たちはヒーロー協会を潰すって言う目的が一致したから集まっただけだ。誰もオロチを王にするなんて言ってねぇよ。手を組むのは今回限りだ。」

「はて…」

全くその通りだ。あいつはたしか…黒い精子か…いいこと言うな。

「何故…敗者がいる？」

!?!?

ズドン!!!

ふむ…不意打ちですら僕に当てられんのか弱すぎて笑えてくる。

「おい！置物！危ないだろ！当てるならしっかり狙えよ！ノロマグズ！」

「口だけは達者な奴だ…」

あぁ覚醒ゴキブリが…ちっ僕の同族に手をかけるとは…余程殺されたいらしい。オロチが又、触手で攻撃してくる。

それしか出来んのか…馬鹿か？
「まっまぁまぁ昆虫王さん落ち着いて。」
「黙れギョロギョロ。僕に指図するな…」
オロチの向かって来た触手を1本掴みちぎる。脆い…てか僕が強くなってるのか…そのまま奴の顔に1発食らわせる。遅いし弱いな。結局雑魚だ。こんな奴に従う等出来るわけもない。
「集まれボクの配下たち!!!」
虫たちが群れて1匹の大きなカブトムシを型どる。僕はその上に乗ってカブトムシを操作する
「図体がでかいのは貴様の特権だと思うなよ……雑魚が。貴様は所詮、人から怪人になった劣等種。生まれながらの王の僕に叶う筈も無っ…」
突然僕の体に重たい荷重がのしかかり、地面に叩きつけられる。虫たちは僕が居なくなった事により指示が分からず霧散する。
「そこまでだ…少し落ち着け昆虫王。」
「グッ…離せ…ギョロギョロ！あいつから仕掛けて来た！」
ググググ
先程から嫌という程超能力を食らっているから耐性も着く…少しづつ体を起こす。
「確かにオロチ様から仕掛けた。だがお前が逃げ帰って来たのも事実だ…しかしお前は覚醒ゴキブリと違って強い…それも圧倒的にだ。まだリベンジの機会はあるだろう？その力を振るう相手が違うのではないか？」
納得行かないが。こんな木偶に労力を使うのが勿体ない。
「あぁ分かったギョロギョロ、謝るさ僕が悪かったよ。」
「あぁ許そう、だが…その分しっかりと働いて貰うぞ。」
俺は羽を広げて自室に戻る。帰り際にオロチを睨み付けて帰る。
気に入らん…あんな奴が王を名乗る事が。深海王は雑魚だ。所詮陸には出てこれない。陸に出たから死んだ。地底王はここに住んでたがきっとオロチが殺したのだろう…やつはあまり争いを好むタイプではなかった。家族第1だからな。

天空王は知らん。交流がなかった。だがどれをとっても僕には叶わない。僕が最強なんだ…あの炎を使う首切りさえいなければ……

ククククク次だ…次会った時が貴様の最後だ。それまで精々首を洗って待っていることだ。

売り言葉に買い言葉

ふぅ。実にいい湯であった…蝙蝠がご飯してくれるって言うけど、何が出てくるか実に楽しみだ。
「蝙蝠ー上がったよー」
「ゆっくり出来ましたか？主よ」
「うん。だいぶ疲れも取れたよ。ありがとう」
「いえいえ。我は何もしておりませぬ」
そんな謙虚にならなくてもいいのに。まぁそれよりご飯を食べるとしよう。
食卓には鮭のバター醤油焼きにおじゃがの味噌汁、白米に漬物と言った和食風の並びになっている。
「我も本気出せば。この程度……」
ズズン…パラパラ
アパートが少し揺れて天井から破片や埃が落ちてくる。
あー…サイタマさん家かな？この揺れ具合は…何をしてるんだろう。少し気になる。
「少し席を外しまする…主はゆっくりと食事を楽しんでください。」
「うっうん。あっありがとう……」
蝙蝠の笑顔がやけに怖かった。
蝙蝠が出て言ってからテレビを見ながらもきゅもきゅと食べ続けた。ご飯なんて食べなくても良いけど…やっぱり癒され方が違う…活力が沸いてでるというかなんと言うか…蝙蝠のご飯はすごく美味しかった。今は食後の1杯を楽しんでるところだ…
そういや今日携帯確認してないな。協会から連絡とか来てたりしたのだろうか……
何故か切れてる携帯の電源を入れて着信を確認して見る。
「うわぁ」
物凄い数の不在着信が届いている。その全てが協会からでは無くタツマキさんからだ。
かけ直した方が良いよね……これ

恐る恐るかけ直してみる
『蝙蝠とか言ったわね!?よくもさっきはぶちぎってくれたわね!?絶対許さない!あんたちょっと今から本部まで……』
だいぶご立腹のようだ…きっと俺が風呂に行ってる間に蝙蝠が勝手に処理してしまったのだろう。タツマキさんには悪い事をした。蝙蝠も悪気があった訳ではないだろうけど
「たっタツマキさん?」
『あっあああああ、アシナァ!?なんであんたが出てんのよ!?』
「いやこれ…俺の携帯ですし…」
『あぁそうだったわね。突然怒鳴って悪かったわね…ってそんなことより!あんたちょっと急いで旧A市の本部に来なさい!今すぐよ!分かった!?』
「えぇ…理由とか話せますか?」
『着いてから話した方が早いわ!』
「……分かりました向かいます。」
俺は通話を切って、飲みかけの缶ビールを飲み干す。
家の戸締りをして外へ出る。
「貴様。少し自らの力を過信している様に感じる。貴様が例え全力の状態だったとしても、貴様が我に勝てるなどと思わぬ方が良い…分かったのなら大人しくしていろ。ポンコツ風情が」
「貴様…アシナさんにくっ付いている変質者のようだな…あの人にも貴様の様な変人が着いていたら悪影響だ…俺がこの場で滅してやろう。」
「実力の差も測れんのか貴様は。悲しい奴だ…我の1太刀で貴様の心の臓をくり抜いてやろう……今宵月が出ている。月夜が貴様の最後の景色だ…じっくりと拝んでおけ…」
すっげぇ大変な事になってた。
はぁー。ため息だよこんなん
「おっアシナ!すまん助けてくれ!さっきからあの調子で。」
「サイタマさん…ごめんねうちのが今度またお酒奢るね。」
「そんなことより。ねぇ蝙蝠?何してるの?」

「あっ主!?こっこれには訳があって。」
「アシナさん…こいつは俺がやっておきますので…ご安心を…」
「駄目だよジェノス君…蝙蝠は俺の大事な家族だ。傷付けることは許さないよ。蝙蝠もだジェノス君は俺の友人だ殺そうとしちゃ駄目だ。」
「それは…お願いですか?命令ですか?」
「命令はなるべくしたくないよ。だからお願いになるかな?蝙蝠なら分かってくれるよね?」
「ッ……御意に」
蝙蝠を刀状態にして手に持つ。
「ごめんね。ジェノス君もあまり喧嘩は駄目だよ。話し合いも大事…だからね。」
俺はそれだけ言って旧A市の本部を目指した。

破壊と殺戮の衝動

アシナｓｉｄｅ
意識が朦朧とする。真白い空間に1人きり…不思議な体験だ。
俺は歩こうとするが体に力が入らない。いや…体が存在しないのだ。腕は疎か足も頭も胴体でさえ今この空間では存在がしないのだ…あるのは胸あたりだろうか…だいたい体があったらその辺にあるであろう白い浮遊物のみ。きっと俺の魂だろう…不思議とそう思えた。
目の前から黒い雫が沢山落ちてくる。
『コロセ…コワセ』
普段聞く幻聴にも似た、異質で耳に張り付く声でうわ言のように雫から聞こえてくる
『コロセコワセコロセコワセコロセコワセコロセコワセコロセコワセコロセコワセコロセコワセコロセコワセコロセコワセコロセコワセコロセコワセコロセコワセコロセコワセコロセコロセコワセコロセコワセ』
なんだ……これ…なんだよ…これ！
目の前に雫が垂れ落ちて狐の様な名状し難いナニカを形取る。
やめろ…くるな！
ナニカは狂ったように殺せと壊せを繰り返しこちらににじり寄って来る。それは俺の目の前で立ち止まり、紅くドロリとした手で俺の魂を握りしめてくる。
嫌だ…嫌だ…触るな!!触るな!!さわるなぁ!!!!!
『あぁ…あぁ…我が器よ…破壊と殺戮に身を委ね給えよ……どうせ直ぐにひとつになるだから……あぁ我が器よ……自らの本能に…衝動に…堕ちてみたまえよ。』
「うあああああああああ!!!!!」
魂を!!心臓を!!がしってガシィって
俺は自分の胸を触り確認する。当然ながら
「あっ主殿!?!?!?!?」

「ハァハァハァハァ……こう……モリィ？」
アァ怖かった……下手なホラー映画より迫力あったぞ…人型の蝙蝠が心配そうにこちらを覗いてくる。
「悪夢でも見られましたか？」
「あっ…あぁとびきり怖いやつを…少しね」
悪夢で体が震えるなんて、子供みたいに思えてくる。だけども俺は……俺はあれを唯の悪夢だなんて思えない…なんか…もっと…
「主……思い出すのはよしましょう。夢は所詮夢でございます。それに意味など有りませぬ。」
「そう……か…そうだよな！」
所詮夢だよな！うんうん
「シャワーでも浴びてさっぱりしてくるよ！」
「では我は夕食の準備をしておきます。」
シャワーを浴びて浴槽に水が溜まるのを浴槽内でボーっと待っているうちに悪夢の事などキレイさっぱり忘れていた。
ｓｉｄｅ蝙蝠
主が飛び起きた時…目が狐の様に細くなって居たが……『獣』には目がないはず…それに人の瞳孔は変化しないはずだ…杞憂に終わるといいのだが。主のエプロンを借りて…
ギャーギャーギャーギャー
隣が煩いな…まぁ関係のない事だろう…
珍しく我が料理を振る舞うのだ…和食がしっくり来るだろう。魚の切り身ぐらいあればいいのだが…
冷蔵庫の中を確認して献立を１つ１つ組んでいく。
切り身があって良かった…これは…きゅうりの漬物か？またいいものがある。これも出すとしよう。
ピルルルル
主の携帯か……
きっと協会の者だろう……主は今疲れているのだ。どのような内容だろうと１晩位はゆっくりして頂かなねばならん。断りを入れよう。というか主のお手を煩わせることも無いのだ…他のやつに任せ

ておけばいい物をわざわざ主に頼むとは…許せぬな
ピッ
「もし…誰だ？」
『…？あんた…誰よ。アシナじゃないの!?アシナをどこにやったって言うの!?回答次第じゃタダじゃ置かないわよ!?』
小娘か……また別の方面で厄介だな…
「我だ…蝙蝠だ。貴様の手当をして、貴様の横に座っていた奴だ。」
『はぁ？そんなやつ……いたわね…てかっなんであんたがアシナの携帯取ってんのよ！アシナを出しなさいよ！アシナを！大体、人の携帯取るなんて普通に考えてする!?』
面倒くさい奴だ。
『要件を言え…手短にな。我も主も忙しいのだ。貴様如きに構ってる暇など無い。』
『はぁ？何よその態度！あったまきた！絶対許さない！次あった時はこまぎｒ』
プッ
通話を打ち切り、携帯の電源も落としクッションに投げ捨てる。これでやつも掛けてはこれまい。我はエプロンを改めて付けて。冷蔵庫の中身を確認して料理の準備を進める。

信ずる心

タツマキさんから連絡を受けて俺は協会に急ぐ。
何処も彼処も何かが壊れてる…まぁ怪人が一通り暴れてったんだから…そうなるか。
（主…先程は申し訳ございませんでした。）
ん？あぁいいよいいよ。少しきつくなっちゃったけど口喧嘩程度に収まってたのなら特に何か言う必要も無いし。
（……ですが）
無理に仲良くしろとまでは行かないけど…物騒な事だけは起こさないように。俺は皆が無事ならそれで構わないからさ。
（……御意）
俺は夜闇を駆けながら協会を目指す。

ｓｉｄｅタツマキ
……遅い！
アシナが到着したって言う連絡はまだ入らないし…この非常事態に一体何しているのよ!?…私から迎えに行った方が良かったかしら…
「タツマキ様。首切り様が到着致しました…」
「やっと来たわね……」
さて…１つ説教でもしてやるかしら。
ｓｉｄｅ童帝
カタカタカタカタカタ
拠点のあぶり出しが順調に進んでいて後は誰をチームに組み込むかと言う事になってくる。シルバーファングはヒーロー狩りとか言う自称でも怪人を名乗る相手にに手心を加えて逃しているから外すのが手だが。他は鬼サイボーグと首切りさんだが…この２名…出身がＺ市のゴーストタウンだと言うだけでも怪しいのに。首切りさんに至っては特別な能力を昔から持っていたのでは無く、ある日突然あの力に目覚めたと言う。何処からどうみたって怪しいし黒だとしか

考えられない…しかし彼らにまだ招集の話はしてないから、このままセキンガルさんあたりに話をとうしておきたい…しかしシルバーファングさんも首切りさんもS級では珍しい常識人だ…きっと彼らなら僕の指示通りに動いて…いや今回は危ない橋を渡りたくはない。確実性が欲しいのだ。
「童帝様…首切り様が到着しました。」
ガリィッ
何故こういう事が起こるのだ…誰が呼んだ？まぁ十中八九最近仲良さそうなタツマキちゃんだろうけど。
「はぁー…いいよ、ありがとう。首切りさんと少しだけ話をさせて。」
「わっ分かりました伝えて来ます。」
僕の苦悩はまだ続きそうだ…

ｓｉｄｅアシナ
来て早々タツマキさんと蝙蝠の取っ組み合いが始まった。
遡る事数分前になる
「アシナ！遅いわよ！一体どれほど待ったと…」
「そんなに遅かったですか？連絡聞いてすぐ来たつもりでしたが……」
「言い訳無用よ！だいたいこの非常時に何呑気に風呂になんか入ってるのよ！チャチャッと済ませなさいよ！そんなの！」
えぇ理不尽過ぎないですか？それ？頭に何個もはてなを浮かべつつ。とりあえず説教を聞き流しておく。
「貴様先程からベラベラベラベラと…主は疲れておられるのに文句も言わずここまで来たのだ…それをなんだ？礼も言わずにグダグダグダグダと…細切れにされたいのか？」
「はぁ？その忌々しい声は…あんたが蝙蝠ね！出てきなさいよ元はと言えばあんたがアシナの携帯勝手に取らなければもっと早く着けてたはずよねぇ！」
「あっ…ちょ！蝙蝠ィ!?」
蝙蝠が姿を現してタツマキさんを睨み付ける

「あんたが蝙蝠ね？さっき言った通り細切れにしたげる…覚悟しなさい？」
　あぁもうダメだこれ…俺じゃ止めらんねぇよ。命令なんて絶対したくないし。
「いいだろう小娘…主の貴重なゆっくりとできる時間を剥奪した貴様は万死に値する。」
　俺は天を仰ぎつつ、タツマキさんが新しく出来たという訓練所方面へと足を進めた。
　と言う事があって今の大怪獣バトルへと戻ってくるのだ。
「制限時間無制限でどちらかが倒れるまで続けるわよ！」
「勝敗など火を見るより明らかだがな。」
「そうね…火を見るより明らかね…」
「「貴様（あんた）が倒れてると言う事が!!!!」」
　タツマキさんの超能力と蝙蝠の刀がぶつかり合う。
「くっ首切り様！こちらにいらっしゃいましたか…」
　協会の役員さんが息を切らしながら俺に話しかけてくる。
「どっ童帝様がお呼びです！案内します！」
　あの二人はしばらくあの調子だろうし俺は大人しく童帝君のもとに向かった

「あぁ来ましたか…首切りさん。」
「遅れてごめんね？…それで何か用があるから呼んだのだろう。」
「そうですね…別に世間話がしたいからと言う理由で呼んだ訳ではありません。」
　ガチャチャチャチャチャ。
　四方八方からアームが伸びてきて俺に銃口が向けられる。
　銃なんて脅しにすらならないが無抵抗の意味を込めて手を後ろに回す。
「どう言う意図かな？童帝君？」
「そうですね。どう意図かと聞かれれば…少し尋問じみて来ますが。

イエスｏｒノーでのみの返答をお願いします。返答次第じゃ他のＳ級の皆様もお呼び致しますので…それに貴方にはこの嘘ハッピャクンと言う発見器も付けさせて頂きます。」

頭に月桂樹の様なものを付けられる。

「さて…全部話して貰いますからね。」

疑惑

「では試しに嘘を着いてください。貴方の生まれ等は調べ尽くしています。貴方の年齢は１０００歳を超えて居ますか？」
　きっと童帝君なら俺の出自に着いて調べ尽くしているだろう。出なきゃこんな事してこない…
「イエス」
　ビー
　上の月桂樹が赤く光、音が鳴る。
「正常に作動しますね…では本題に入ります。貴方は怪人ですか？」
　本質に迫る質問だな…ノーの言ったところ音が鳴ってしやさまうだろう…答えは
「……イエス。」
　音はならない…鳴る訳が無いのだ
「……分かりました、では……次の質問です。貴方は怪人協会お呼び不特定多数の怪人の協力者ですか？」
　まさか…怪人協会なら誘われたがきちんと断ってる。
「ノー」
　これもならない…鳴ったらビビる。
「はい…ではこれで最後です。貴方はヒーロー及び力の持たない人類の味方であろうとしてますか？」
　胸を張って答えよう。これに答えなかったら俺はなんのためにヒーローをやってきたのかと言う事になる。
「イエス」

「はい、ありがとう…ございます…ぷはあぁぁぁぁ。」
　銃口が畳まれてどこかに仕舞われる。童帝君が椅子にぐでーってして力を抜いている。
「最初に怪人ですって言った時はビビりましたよ。本当に…その時点で銃を撃とうか迷いましたもん。」
「俺が嘘ハッピャクンを壊したり機械事態が壊れたりしてた可能性と

かあるのに信じてくれるの？」
「あぁその機械は外部から少しでも内部への力が加わったら破裂するように作ってありますし。僕の発明に間違えなんてありませんから。」
「絶対の自信だね。でも信じてくれてありがとう。あと、少なくとも俺は人の味方であり続けるよ。」
「含みのある言い回しですね。」
「俺の意識がある内は良いけど…もし俺が敵に俺の魂ごと刈り取られたら。俺の怪人が解き放たれるんだ。でもその時はきっと蝙蝠っていう今訓練所でタツマキさんと闘りあってる人が俺を殺してくれる。」
　童帝君はモニターを起動させて訓練所を見始める。
『小娘ェ!!!貴様その程度なのかァ!!!!』
　ガガガガズバン!!
『はぁ？何勘違いしてくれちゃってるわけ!?まだこれからよ!!!』
　ドゴンバゴォ　ガガガガガガ
「えぇ!?なんですかこれ？何が起こってるんですか？てか明日突入するんですよ!?何してるんですか!?」
　僕にも分からない。
「蝙蝠の能力に再生と回復があるのでタツマキさんの心配は要りませんよ。」
「そういう問題じゃ!?はぁ…もういいです。」
　童帝君はそっとモニターを消す
「首切りさん。1ついいですか？」
「ん？何かな？」
「怪人と人間の共存は可能ですか？」
　まぁ俺と言う存在がいるからこその質問だろう…
「無理……だね。俺は恐ろしく臆病で、化け物になんかなりたくなくて人間であると言い続けたから今こうやって人のフリをしてヒーローでいられる。だけど他の怪人は違う…衝動のままに、何かをする努力をしてこなかった人達が突然力を手に入れる。それはとても甘

美なものだ抗うことなど出来やしない。それを抑えてなおかつ人の役に立たせようだなんて不可能に近いよ。それに。蝙蝠が発現した時に言われたけど。『世の不条理に抗う力を』。職を失い、全てに絶望して明日どう生きるかさえ分からなくなって。結果怪人化して。他の人間から怪人になった人もなんで自分だけって思ってる筈で…その力を心のままに振るうことしか思いつかないのかも。でもその考えは素晴らしいものだよ。弱い怪人は流されやすい。一時の全能感に酔ってるだけでその本質を問い正せばもしかしたら味方にはできるかもよ?俺も人に擬態したくてヒーローになったわけだし。」

「そう…ですか。こんな話に付き合ってくれてありがとうございます！明日また予定をお話しますので。今日はゆっくり休んでください。」

「童帝くんも頑張りすぎないようにね。君もS級とは言えまだ子供なんだから…」

「お気遣いありがとうございます！でも今はその言葉だけ貰っておく事にします。」

本当にこの子はいい子だよ。でも年の割には張り詰めすぎかな?

「んじゃあ俺は蝙蝠を回収してくるね。」

「はい！ありがとうございました。」

俺は蝙蝠を回収しに訓練所に足を進める。

傍観者

ｓｉｄｅ昆虫王

ヒーロー狩りガロウ…そう名乗る奴をギョロギョロが連れてきた。そしてその監視を蟲神とキリサキングに一任させたらしい。しかもあいつらそれを謝って殺したと宣う。与えられた仕事すら満足に出来んのか？他の劣等共は。嫌気が指すな…だいたい蟲神に至っては神を名乗るなど…万死に値すると言うのに、仕事もこなせんか？…見損なったぞ？正味どうでもいいことではあるがな…

ブブブブ…ピト

ん？蚊かいどうしたの？ふむ…ふむふむふむ。人間が？……ねぇ分かった。面白そうだから向かって見るよ。

どうやら人間が人質の回収に攻めてきたらしい。暇だし出張ってやるか…

僕は羽を広げて虫を案内に付けて移動する。

あーりゃりゃキリサキングが死んでら…ざまぁ見ろってんだ。前々から気に入らなかったからラッキー程度に思っておこう。それよかこいつを殺したのはきっと侵入者だよね？血痕が続くのは…こっち側か？

ヒタヒタヒタ

おぉポチの尻が見える。

チュイーン

おっとぉ後ろだから大丈夫だけど…前はやばいかも。

ズドゴォォォォン!!!ズドン!!!ズドン!!!バガァァァァ!!!!

あっちょ!?燃える燃える!?燃えるって!!!

その光線の暴威は前後ろ関係なく平等かつ無慈悲に降り注ぐ。僕は急いで飛翔して火の手から逃れる。

あっ？止まった？ポチが急停止して

『おすわり!!!!』

轟音と共に突然うつ伏せに凹んだ。すげぇ膂力、あれは？ヒーロー

狩り？頭悪いでしょあの威力。でも家のポチからしたらノーダメージ。軽く体を降っておしまい。ポチもポチで強さは郡を抜いている。
ヒーロー狩りはしばらく抵抗したけど地中深くに飛ばされて行った。
あれじゃ確実に死ぬでしょ。相手が竜じゃなければ何とかなったのかもしれないね。
ファー…全力で飛行したら疲れた…寝る。
そう思った瞬間オロチの気配が動き出す。殺り合うなぁ？これぇ？
僕はニタニタしながらオロチの広場を目指した。
なるべく早く着いたつもりだけど…ヒーロー狩りは満身創痍。オロチの方はまーた触手しか使ってないよ…雑魚じゃん！あんなん…
「例の侵入者ですかね？昆虫王さん。」
僕の右隣の怪人が質問してくる。
「あの風貌侵入者はヒーロー狩りでしたってのが筋でしょ。」
「はえーなんのためなんですか？」
「僕が知るわけもないだろ？凡骨めが」
ガィィン!!!
切り裂きに来たヒーロー狩りの拳をいなして掴みオロチの方へ投げ飛ばす。
「おい!!置物!!こっちに流すなカス!!仕留めるなら仕留める!!捕縛するならするできちんとしろよ!!」
無駄な労力を使わせるな。
ヒーロー狩りは触手を跳ね返し、足場に利用して。広間を駆け続ける。速度がどんどん上がっていくな。
しかしオロチは無表情でこちらを一瞥してヒーロー狩りをたたき落とした。
なんだあれは？ドヤ顔のつもりか？ほぼというか完全な無表情なんだが…
負けじとガロウが起き上がり再度顔を殴りかかろうとするが…全身蛇の様なミミズの様な名状し難い何かに変貌を遂げ

ヒーロー狩りに喰らい着かんとする。
「おいお前ら奥に避難しとけ…やな予感する。」
「え？わっ分かりやした。ほら行くぞおめぇら。」
「遅い！急げ！全速力で走れ!!!」
やな予感は的中して地下一帯を熱戦で焼き払い始めた。アイツらを早めに非難させといて良かった。そして、そろそろ超高温にも慣れ始めて来た自分が嫌になってくる。
ヒーロー狩りもこれで終わ……ってはいなさそうですね。
高温に耐えるのは企画外だね。うん…
オロチの拳がヒーロー狩りを襲う。さすがにあの質量はいなすことも出来まい。まだ耐えるかアイツ…ヒーロー狩りが構え、オロチが真似て構える。そしてヒーロー狩りは徹底的に痛めつけられ壁尻状態になる。
あーあ。見世物終了か…つまらん。
僕は欠伸をしながら自室に戻った。

秘密会議

訓練所の扉が開く、すると目の前に広がったのは抉られ溶けている壁に、散らばる岩石郡、余裕のある蝙蝠と息が絶え絶えのタツマキさん

「その程度の実力で我に刃向かうなど、些か傲慢が過ぎたのではないか？」

「はぁはぁ…うる…さい…死ねぇ!!」

タツマキさんが蝙蝠を捻り上げようとするが全く聴いている様子は無さそうである

「くくく…実に滑稽であるなぁ？その程度の出力しか出せぬとはなぁ？そして我は主と違い優しくは無い。敵には情けなどは掛けない…我に力を向けた事を後悔しながら死ねェ!!小娘!!」

ギリギリまで見てようかと思ったけどここがギリギリラインだね。

「蝙蝠、おしまいだよ。」

その一言で蝙蝠の刃がタツマキさんの顔スレスレで止まり、ゆっくりと蝙蝠がこちらを向く。

「……御意。」

カランカラン

蝙蝠は刀状態に戻る。静まった訓練所に蝙蝠が落下した音が木霊する。

「まだ…やれたわよ。」

「慈愛の刃『癒』」

俺は癒を出してタツマキさんににじり寄る。

「え?ちょっ…ちょっと何する気よ…なんでそんなに笑顔でこっちに来るのよ。まずその刀を下ろしなさいよ!!いやっ!!やだ!!」

俺は容赦なくタツマキさんに癒を突き刺した。

「ッ!?……あれ？痛くないわね。」

そりゃそうだ。癒はの刀身は霧みたいなものだ細胞内に直に溶け込み再生及び疲労回復を促進する。

「その状態でしばらく放置しておきましょう。直に疲れも取れます。」

「そうならそうと先に説明しなさいよ!!だいたいあんたは!!」
俺はタツマキさんの愚痴を聴き流しながら数分待った。
タツマキさんの様態がだいぶ良くなり本部の用意された部屋に押し込んで寝るように催促した後に俺は外にでる。
夜風に浴びながら流水岩砕拳の型をひと通り流す。
やっぱり実戦しなきゃだね。
「蝙蝠。出れる？」
「ここに。」
「さっきは勢いで殺しちゃいそうだったから止めたけど…気をつけてね。」
「頭に血が昇ってしまってた故……いや言い訳にすらなり得ませぬな…申し訳などあるはずもございませぬ。腹でもお切りになられましょうか？」
「いやそんなことしなくても良いよ。」
「寛大なお心感謝致しまする。」
大袈裟だなぁ。
「明日タツマキさんに謝り行くよ。命まで奪おうとする必要なんて無かったからね。」
「……御意。してその趣旨を伝える為に我を呼んだのですか？」
あぁそうそう忘れてた忘れてた。
「いや少し流水岩砕拳の練習に付き合ってもらおうと…」
「ふむ…分かり申した、やりましょう。」
その後俺達は夜が開けるまで互いの拳を撃ち合っていた…

やっべやっべ会議に遅れちゃう。
俺は癒をさしながら本部を走る。
蝙蝠は夜なべして付き合って貰ったから今は部屋で寝かせてる。
今日は竜連中と出くわさない限りは夕日だけで事足りそうでしょ。
会議室に着いたので癒を抜いておく。もうあらかたみんな揃って

いた。
「ほら！首切りさん！遅いですよ！全く…あとはキングさんだけですが…」
「ごめんね童帝君…張り切り過ぎちゃって。」
「知ってますよ本部前でずっと蝙蝠さんでしたっけ？その人と殴りあってるの見てましたから。」
「正午には出たいので始めます、侵入ルートも粗方割り出せたから別れて行動しましょう…そのために皆さんに発信機を預けておきます。使い方は…」
　小さい中央の光った機械が配られる。童帝君の説明が終わってからクロビカリさんから、せっかく集まったのに分散するのかと言う事が出てきた。童帝君は全滅する事を恐れたらしい。
「人口衛生で確認した怪人と思われる熱反応の総数はざっと５００体以上…単純計算して１人６０体は撃破して欲しい。懸念があるとすれば…敵幹部連中になるけど」
　前の机からホログラムでぢっけぇムカデが映し出される。
「先日出現したムカデ長老も、怪人協会の手の者だと判明していることから。奴ら側には他にも、何体かレベル鬼もしくは竜以上がいると想定して置いた方がいい…」
「ふむ…俺は襲撃時には本部のガードについていたから寄生虫１匹しか相手にしてないが…外で戦っていた人の意見はどうだ？奴らは強いのか？」
　クロビカリさんは本部に着いていたのか…
「そうですね。俺が戦った奴らは大体対処できるものでしたが…１匹えげつないのが居ましてね。」
「言うのは忍びないけど…ここでしぶってなんかあったら嫌だから言うわ。私が瀕死に追い込まれる存在と接的したわ…」
　会議室がピリつく。
「それは貴様が弱かったからではないのか？」
「タツマキさんが弱いなんてことは無いだろうけど…なんだっけ？ギョロギョロ？が相性も考えてぶつけて来ると思う。それにタツマ

キさんが鉢合わせた昆虫王って奴も俺が戦った感じどうってこと無かった。でも集中を乱す羽音に硬い外殻、どれも厄介だったし偶々おれが火を使えて有利に立てただけで、まぁ竜って言われても納得の行く奴ではあったよ。」
「相性…ですか…分かりました。皆さん今の首切りさんやタツマキちゃんの言う事が本当だとすると…勝てそうにない相手だと判断したら即座に誰かに救援を要請する等の事を行って下さい。」
「なぁ童帝？駆動騎士が殺られたと言う話はほんとか？」
　え？あの人やられちゃったの!?ええ…機械系はそそるからサイン欲しかったし…かなりの実力者ぽかったから…残念だな…
「分かりません…彼は怪人を拷問してアジトの位置をいち早く掴んだみたいで単騎で乗り込んでそれから消息が途絶えたらしいんだ…」
　てことは生きてるかも…か
「駆動騎士…素顔を見た事はなかったが…そうか、やられたのか。」
「俺らも油断すれば命を落としかねん…各々気を引き締めてかかろう。」
「奴らはきっと出会い頭に容赦なく攻撃を仕掛けてくるだろう。だがこちらも例え、奴らが対話を申し入れてきたところで取り合う必要などは無い」
「まってくれ！怪人協会の中にはそそのかされて怪人化してしまった男子たちも居る。彼らの事は救いたいと思っている…囚人服を来た怪人を見たら俺に対応させてくれ…」
「俺の方も旧友が怪人になって居て切らざる追えなかった…怪人化した者どもを救う手立てはあるか？」
　それがあったら俺も人間に戻れるのか…プリズナーさんがグロテスクな救助方で助けると言ってるが…多分無理だと思うよ？
「ボス格のオロチ…そしてギョロギョロは間違いなく竜クラスだろう…」
「そうだな…なるべくサシでの勝負は控えたいところだが…」
「そのオロチって言うのは私が倒しといてあげるわ。虫じゃなければきっと大丈夫なはずよ。名前的に蛇だろうし。」

「おい貴様勝手なことを言うな。」
「なによ!?あんたがそのオロチとかと戦いたいって訳？私は非力なあんた達の事を思って…」
「誰かコイツを黙らせろ…会議にならんぞ」
「フラッシュさんの言う通りだよタツマキさん。相手が何を使ってくるか分からないんだし…なるべく注意していった方が良いよ。フラッシュさんも少し落ち着こう？」
「俺は元々落ち着いている。」
「ふんっ！」
「ありがとうございます。首切りさん…では話を続けますね残念だけど…オロチやギョロギョロ、人質や他の幹部階級の位置や場所は、把握しきれていないんだ。地下は相当深くて広い…」
　モニターにアリの巣のような縦長なものが表示される…えげつねぇなぁこれ…入ったら出れなさそう（小並感）
「まぁボスだろうが雑魚だろうが、遭遇した人が責任持って倒すのがいいだろう！」
　まぁそれが一番だろうな。
「おい…」
　誰かが扉を開けて会議室に入ってくる。誰だろ？
「君たち…待機室に居ないと思ったら…今回のチームメイトである僕を抜いて秘密会議とは…どういう事だ？」
　アマイマスクさんがピリつきながら童帝君の裏に立つ。少し厄介なことになりそうだ。

怪人足る所以

アマイマスクさんの乱入により部屋全体が良くない空気に包まれる。
「アマイマスクさん…いえ決して除け者に使用などと…まずはS級だけで情報整理をしようと…」
童帝君がアマイマスクさんを宥めようとするけど、アマイマスクさんはそれに反論する。さらにタツマキさんが火に油を注ぎにかかる。もうめちゃくちゃだよ!
挙句あの人僕の下につけとか言い出したよ。
「ほぉ?俺たちがお前の下に?冗談は名前だけにしてくれよ…」
フーっとゾンビマンさんが先程サラッと付けていた煙草の煙を吐き出す
煙草いいなぁ俺も吸いてぇ…でも隣童帝君だし…ゾンビマンさんはそこそこ席離れてるからだしぃ。
「…ゾンビマンそして首切り。君らはなぜ不死身なんだ?もしかしたら怪人なんじゃないのか?」
タツマキさんと童帝君の表情が僅かに変わる…ここで1つ説いておくか。
「いい説ですねアマイマスクさん…確かに俺とゾンビマンさんは不死身だ…顔色も悪い。その様はまるで死体の如く…ね」
「アシナあんた!?!?」
「でも怪人見たいなのはここにいる全員同じじゃないですか?もちろん貴方込みで…」
「ほう?それは僕に喧嘩を売っているのかい?」
短気だなぁ短気は損気だぞ★
「滅相もない…話を変えます。怪人協会にはギョロギョロと言う災害レベル竜認定のエスパーが居ます。そしてヒーロー協会の最高戦力の1人…戦慄のタツマキ。彼女ももちろんエスパーです…ここに違いはありますか?」
「何が言いたい?」

「貴方は先程俺やゾンビマンさんを不死身だから怪人だと仮定した。ならば彼女もエスパーだから怪人ですね。アトミック侍さんだってそうだ…人間とは思えない…」
「俺か？」
「はい、貴方です。なんてったって１秒間に１００発の斬撃を打ち出す事が出来るなんて、それは人間の範疇に既にありません。きっと怪人ですよ。」
「おもしれぇこと言うな？」
　アトミック侍さんがニヤニヤしながら行ってくる。
「次にフラッシュさん！貴方のスピードは明らかに可笑しい。本気を出せばどれくらい出せますか？推定でいいです。」
「俺の名前の通りだ光の速さで動ける。」
「多分これは比喩無しでだと思います。閃光怪人認定ですね。」
「他にも豚神さんやクロビカリさん…他のＳ級の方々も人間とは思えない身体スペックを有して居ます。もちろんあなたもですよ！アマイマスクさん。この中で人間っぽいのなんて童帝君ぐらいです。ですがそんな人たちも怪人ではなくヒーローと呼ばれています。それは何故か…人の味方だからです。怪人は人に敵対するだけど我々ヒーローは人の味方である唯それだけの違いです。まぁ俺は種族的に完璧な怪人ですし人に害なす同族を狩ると言う目的で動いています。その結果でヒーローだのなんだのと祭り立て挙げられてるだけですがね。本題がそれましたね今回の奴らは人に害あるもの達です。それもとてつもない力を持った。この中の誰か死ぬかもしれない、ならば人を守る為に、我々力あるものが協力し合わなければならないんですよ…１人のワガママを通してる暇なんてどこにもありはしないんですよ…大人しく一番頭のいい人に従っていれば良いんです。分かったら待機室に帰りましょうね。」
「結局あなたも喧嘩腰じゃないですか!?」
　童帝君に怒られた。
「君の言う事にも一理ある…確かに君は今まで数多の怪人を狩り市民を守ってきた…その様はまさに人の味方たり得る。だがそれがフェ

イクだとしたら！ヒーロー協会に潜伏する口実であるとしたらどうかね。」
「あぁそれはありませんよ。」
「何故そうと言いきれる。」
「だってここに来た時に首切りさん本人に尋問してますもん。質問内容は確か…怪人が否かについて、不特定多数の怪人及び怪人協会との繋がりはあるか…最後はヒーロー及び人類の味方であろうとしているか…ですね。その答えは怪人であった事を除いて、好印象を得られるものでした。彼は結局同族殺しだのなんだの言ってますけど。ツンデレなだけですね、しっかり市民の事を考えて人を守ろうとしてます。」
　なんか恥ずかしいな。
「口ではなんとでも言える。」
「嘘発見器を使って立証しましたので。僕の発明に不備なんてありません！」
「……まぁ君達が怪人か怪人じゃないかに着いてはこの際どうだっていい。僕が君たちを上手く使ってあげようと言う話だ。より合理的にね。分かったら…」
　僕の指示に従え。
「力づくで従えてみたらどうだ？できるものならな？」
　フラッシュさんがドスを聞かせて話す。結局こうなるのかぁ
「出来ないとでも思ってるのか？」
　２人とも殺る気マンマンやな
「フラッシュその殺気辞めろ唯じゃすまんぞ。」
「そうですよ。アマイマスクさん貴方がその力をヒーローであり…人間であるフラッシュさんに使おうとするならあなたは立派な怪人になりえます。フラッシュさんもです、抑えて下さい。」
　夕日を出して臨戦態勢を取る。
　流れが変わる。動くまで…3…2…
「皆様！キング様の到着です!!!」
　皆の緊張が別のものに変わる。タイミング完璧っすよぉ流石人類

最強の男。
驚くべき事実キングさんは1人で怪人協会本部近辺の怪人を狩っていたらしい。その行動力…脱帽です！
「ふっ…喧嘩していても仕方ない…今回はキングに免じて許してやる…だが僕も突入する！それだけは譲らないぞ！」
はぁ…やっと言ってくれたよ。
準備を整えて、集合場所に向かう。蝙蝠はもうしばらく寝かしておく。名前さえ呼べば寝てても手元に来るし。
「みんな！準備はいいね！それじゃあ…行くぞ!!」
怪人協会から人質奪還作戦が開始した。

進化と停滞

カツンカツンと灯りしか無い廊下を歩く。誰も来ないし何も居ない…　気配すら感じない少し気味が悪い…

他の人達大丈夫かな?と言うか人質の保護とかほったらかして各々好きに暴れ回ってそうだなぁ。

ゾワッ…

なにか…　来る…　ッ!?

ガヂィィ

「流石S級だ。その反応速度恐れ入るよ。」

無音だった廊下に甲高い音が響く。何とか凌げたけど…　腕にビリビリ来るわ。進化でもしたか?こいつ。

鍔迫り合いの状態で制止する。攻めるか

「お褒めに預かり光栄ですよっと…」

相手の鎌を押しのけて腹に一閃加え入れようとするが当然の如く避けられる。

「んもぉ物騒だなぁ、そんな物しまってくれれば良いのに。今からでも遅くはないよ?僕達の仲間にならない?」

「断るさ。今日中に滅びる組織に加わるとか先見の明無さすぎもっと未来を見据えて行こうぜ。」

俺は夕日を戻して蝙蝠を抜き取る。さすがに竜レベルの相手に夕日は舐めプがすぎる。離脱状態で攻めたいけど、やられた時に血流技が使えないからボツだな。同化なんて以ての外だ…

「まぁ君がもし僕達の一員になった所で僕は認めないけどね。」

「誘った意味がねぇじゃねぇか。」

「ギョロギョロにそう言われてるのよ…　それより…　相性が悪いと言われた僕が何で今ここに居るか。分かるかい?」

ブンッ

動いた…　やはり早い。見えない。災害レベル竜は伊達じゃないってか。

「狭い部屋の中だ!僕の速度はどんどん上がってくぞ!さぁ!!!お前に

反応できるか!?」
ザンッ!!!
一瞬のうちに背中を鎌で切られ左手が持ってかれる。奴が僕の目の前で制止する。
「おっと失礼。余りにも鈍いから君の腕を持ってきちゃったよぉ?」
やつは俺の腕をヒラヒラさせてアピールしてくる。
うぜぇ。ド肝抜いてやるか・・・
「血流技『ブラッドメイデン』」
腕が血の塊に変質してその塊が堅牢な鉄の聖女を型どる。
「なっなんだこれは!!おい!!だせ!!」
無理に決まってるだろう?あのメイデンは腕1本分を媒介にしてるんだぞ?破られる気がしねぇ。腕を再生させながらメイデンの操作を開始する
串ざせ・・・
「は?ぎっ!!!」
呻き声が聞こえて緑の液体が流れて来たのを確認する。念の為に発火で燃やしておく。煙がたって中に何も無いのを確認してから進む。
「おい・・・ どこへ行く?」
は?
振り向いた時には全て遅かった。俺の首が中に舞っており。奴が穴だらけの状態で突っ立てた。
「くくく・・・ その表情だよその表情、演技したかいがあったよ。本当に」
空中で頭をキャッチして体と接合する。
まずい。どうする?とりま切るしかない。不死身?俺と同じ?頭の中で打開策を探そう
「なんだ?貴様は、ゾンビか?流石にその芸当は気味が悪いぞ。」
「諦めろ・・・ 俺は倒せねぇよ。てかお前もゾンビだろ。体穴だらけだぞ?」
「構わんさ。僕も僕で再生能力は持ってるからね。そうだね・・・ 1

つ。面白い話をしてあげよう。その間に君は攻撃してもいいし。再生してもいい。これは怪人の進化についての話だよ・・・ 改めて名乗ろう。僕は昆虫皇。ギョロギョロの推定災害レベルは竜を超えたとされている。高温すら克服し・・・ おっと危ない。」

不意打ちの一閃を回避される。

「はっはっはその意気だよ！僕は高温を克服して。死の境地を彷徨う経験もした・・・」

俺の刀を全ていなされる。何が起きてる？

「怪人が次のステップに進むにはね？死なない程度の地獄を味わうことが必要みたいなんだ。それはどんなものでも構わない。精神的なもの、身体的なもの、死んだ方がマシだと言う程の物を死なないように味わう。これがだいぶ難しいらしくてねぇ？おっと今のは惜しかったよ？」

「血流技！『大嵐ィ』」

「無駄だよ？全部捌ける。ゴホン！戻そう。僕はこの２点をクリアしてるんだよ？君のおかげでね？あの蛇がうねる奴をくらった時、初めての敗北と死を悟った・・・ だが僕は奇跡的に生きていた・・・ そして君の甘さからか僕は見逃された。それも何気に屈辱だったわけだ。僕は脅威ではない、逃がしても対処に困らない相手、腸がはち切れるばかりの悔しさと怒りを覚えたね。挙句オロチに攻撃もされた・・・きっと君に会う前の僕だったらやられてたことだろう。だが!!僕は全てを超越したのだ！今の僕に叶うやつ等存在しないだろう!!まぁそんな感じになった訳だよ。君もあったんじゃないか？自分が明らかに強くなったと感じた時が・・・ 君は成長論と相性がいい・・・ その死なずの体は少し羨ましいものがある。だが!!!それゆえの依存があり！死なない程度の地獄を味わうことは出来ないと見た！僕と君の違いだよ？」

ビッタァ

蝙蝠が奴の人差し指と中指で止められる。

「さて説明が終わったよ？少し攻撃をするとしよう。耐えてくれよ？」

ベゴォ!!
体がクの字に曲がり後方に吹き飛ばされる。なんだ?この威力。
バゴン!!
壁に体が埋まる。間髪入れずに奴の拳が顔に入る。
「あはっァッハッハッハッハァ!!!ほらほらどうした!!さっきまでの余裕を見せてみろよ!!!ほらほらほらァ!!」
地面を突き破って下の階に打ち付けられる。反撃しなきゃ。
バズン!!!
無理やん相手の手が止まらん。どうする。考えろ・・・ 考えろ・・・考えろ!!!
「ん?何をしようと言うのかな?いいよやればいい。全部真っ向からうち潰してあげよう・・・ 絶望を味わって無様に死ね。」
立てる。今ここがどこか分からないけど。こいつだけは仕留める。
「同化・・・」
流水岩砕拳の構えを取る。
「来いよ。ボコボコにしてやる。」
「その目・・・ いいねぇゾクゾクしてくるよ。明確な殺意と憤怒。絶望に染まった時が待ち遠しいよ」
潰す。

化け物

皆でゾロゾロと目的のZ市のゴーストタウンを目指す。最初聞いた時はビビったよ…うちの地下にあんな大迷宮が広がってんだから…

「着きましたよ…」

いつも見てる光景だから特に思う所はないよね。

皆はキングさんがどっか行ったことを話し合ってる。まぁそれよりこの湧き上がる殺気の方に集中した方がいいかな…

「おい、お前ら前見た方がいいぞ。」

ゾロゾロぐちゃぐちゃ、びちゃずるずる

汚ねぇ音と共に異形が姿を現す。

四方八方敵だらけ…そそるねぇ。成長し放題だな。

上からボロ切れが落ちてくる。Z市はゴミ多いからそんな事もあるだろうけど今は無風だ…あれも怪人か…

ズギャギャギャギャギャギャギャ

後ろに廃列車が飛んできて中から怪人が沢山湧き出てくる。

ボロ布怪人がタツマキさんになんか話してる。

そんなの関係ねぇな切り込むか…

「話が長ぇ!!シィィネェェェェ!!!」

思いっきり駆け出して異形の群れに飛び込む。

「ちょっと首切りさん!?貴方そんなにジャンキーでしたっけ?」

後ろで超能力者がビルを使って他のやつに攻撃してるけどまぁタツマキさんに任せるとしよう。とりあえず雑多どもを切り刻んでいく。

前方の敵は俺だけで事足りそうだな。

血のストックは温存して起きたいからなるべく夕日で燃やすようにしてる。

「数でかかれば流石の首切りもッ!?熱いぃぃぃ!!!」

燃えろ。果てろ。

切っては燃えて切っては燃えての繰り返し。

「環炎舞!!」
1周グルって回って炎を展開する。おぉ燃える燃える。
首を落として。切り裂いて。斬撃で燃やしてと湧き出る化け物を次々と処理する。
あぁこんなに楽しいことは無いよ…今この時だけは。怪人にとっての怪人であろう。

童帝ｓｉｄｅ
僕はあの人に最初怪人だと言われた時何かの間違えだと思った。だって凄く良識のある人だし、紳士的だし。煙草だって注意したら吸わないで居てくれる。ゾンビマンさんは言っても吸うけどあの人はきちんと配慮する。僕の指示にもきちんと従ってくれるし意見もちゃんと言う。そんな人が怪人なんてって思うよ。でも今のあの人を見て思う…あの人は間違え無く怪人だ。笑顔で対象を屠り燃えてる様を嘲笑う。それはとても恐ろしく…芸術的にも見えた。怪人狩りの怪人。きっと災害レベルは竜だろう。あれが人類じゃなくて怪人に向かった力で本当に良かったと思うよ…
「童帝…首切りの奴を見てどう思う?」
アトミック侍さんが含みある声で話しかけてくる。
「何処からどう見ても怪人にしか見えません…同族を狩ることへの躊躇いのなさ。それに加えてあの恐怖さえ覚える笑顔です。まぁ目がぎらついてて口だけ弧を描いてるあれを笑顔と呼んでいいかは疑問ではありますが…」
「そうか…あいつは自分を怪人だと言っていたが…あれは見たら信じるしかねぇなぁ。」
他の市にも積極的にパトロールに出てたのはもしかしたら彼がジャンキーだったからなのかも。
考えるだけ無駄だね。目の前に集中しよう…
ｓｉｄｅアシナ
タノシイ…モット…モッ…はっ!?

俺は…何をそんな冗談は置いておいて。粗方片付いて一息入れる。サイみたいなのが1匹抜けて行ったけどアトミック侍が上手く処理したみたい。あのサイ俺の事無視して行きやがって…

ドクジャア!!!

後ろの方で何か落ちる音がする。タツマキさんの方も終わったみたいだね。

「グギギギギ」

「弱かったわ」

ボロ布怪人がつむじ風みたいになって消滅する。

「おつかれさまです皆さん。先に進みましょう。」

「アシナ…あんた返り血凄いわよ。」

「マジ?やばァ絶対臭ってくるやん。こんな事で蝙蝠呼ぶのも忍びないなぁ。」

まぁいいや呼んだあと鞘で寝てて貰お。

「蝙蝠ー」

(こちらに…)

眠そうな声で蝙蝠が手に収まる。

体に着いた血を取ってくれる?

(御意…)

蝙蝠がコウモリになって体を覆う。

(完了致しました…)

ありがとう寝てて良いよ。

(御…い…)

俺達は地下へと足を運んだ。

破滅

同化を早い段階で使ってしまう事になったが、こいつをこのままにしておくと他の人達の負担になりかねない・・・ アトミック侍さん辺りなら処理できるだろうけど、不安な事に変わりはない。ここで潰す。

「さぁそれが君の本気なんだろ？来るといいよ。ひねり潰してあげるよ。」

「んじゃ・・・ 遠慮なく！」

ズン!!!

拳と拳が混じり合い衝撃が走る。相手の手が足が俺の息を止めようと迫る、それを流水岩砕拳でいなして倍の力で押し付ける。だが相手のスピードが早くいなしてきれない物が俺の体を少しずつ傷つける。しかし拳が見えないなんてことはない！ついていける！これなら勝てる！

「へぇ。面白いことをするね。それはあれか？シルバーファングの技か、門下生だったのか？しかし・・・ 動きが先程とは別人だな。まさか今の僕とほぼ互角なんてな。」

ババババババ

実力の拮抗、それは終わらない戦いを意味する。この体は生きているから当然疲労という物も存在する。長期戦になれば辛いのはこちら側である。あぁもう・・・ しゃらくせぇな

相手の拳を掻い潜り顔に一撃加える。

「血流技『岩砕き』!!!」

ズンッ…

空気が揺れ、辺りが少し揺れた。奴が奥に吹き飛び壁にめり込む。迎撃をしようとして殴り掛かるが奴の姿が消える。裏か?

振り向いて、流水岩砕拳で流して隙だらけの胴に掌底をかます。やつはその場で腹を抑えて後ずさる。

ビキビキビキ

奴の体に亀裂が走る。

「グッ… ガハッ… ゲホッ!ゲホッ… 恐ろしいな… 技と言う物は拳が掠りしかしなくなるとは… それに加え僕は甲殻にヒビまで入れられてしまう。天晴れだよ… 首切り。」

「お褒めに預かり光栄です。まぁ俺的には粉微塵になるような攻撃をヒビで済ますお前の耐久のが恐ろしいけどな。」

構えながら茶々を飛ばす。

「そうか… そう言えば私も奥の手を隠しているのだよ。」

ビキッビキビキビキッ

「知ってるか?昆虫は脱皮する種もいるんだよ?そして… 僕の体になってる蟷螂は…」

辞めろ…　察したよ、それ以上言うな。

「脱皮するんだ。」

バリィ!!!

「能ある鷹は爪を隠すとも言うじゃないか？ククク…　さて、第2ラウンドと洒落こもうじゃないか…」

やつは抜け殻からカブトムシの仮面を外して自らに付ける。

「この仮面は僕のアイデンティティだからね。絶対いるんだよ…　色も変えておこうか？新たな僕の門出としてね？」

奴の体は一回り程大きくなっており、体色は全身緑色から、純白に変わっており一種の神々しささえも感じられた。滲み出る威圧も段違いであり、立っているだけでプレッシャーが伝わる。

「あぁそんなに緊張しなくてもいいさ。肩の力を抜いて？ほら。そんなに気を張ってると…」

消えた!?

「反応出来るものも出来ないよ？」

スッ

ゴォッ!!!

体に窪みが出来た。あの一瞬で何発殴られた？分からなかった。同化状態で反応出来ないとは。頭悪いでしょこいつ。

「あぁ!!!!!」

吹き飛ばされたが、受け身を取って体制を持ち直して構え直す。

カツン… カツン… カツン…

「タフだねぇ。面白いくらいに… でもそろそろおわりにしようか?」

奴が近づき拳を奮う。今度は少しだけ見える、それさえ見えればいい!流水岩砕…

「流水岩砕拳ってこんな感じかい?」

ズズン!ババババ… パァン

体が宙に浮く… 顎に拳を食らって体が打ち上げられたらしい。

「素晴らしい事を教えてあげよう、虫の脳はね?とても小さいんだ。でも小さいからと言って馬鹿って訳ではないだよ?その小さい中でとてつもない処理速度と学習能力を持っているんだ… その小さくも素敵な脳が人間サイズになった時どうなると思う?天才はね自分だけだとは思わない方がいいよ?」

その後の事は理解出来なかった。同化を使って尚、一方的で完璧な破壊と絶望を植え付けられた。

アシナと蝙蝠

童帝ｓｉｄｅ

人質の救出が完了した・・・ あの不死身の鳥怪人には苦戦したけど上手く対処出来た・・・ 今のところ順調に進んでいる。

外の光が見えた。良し・・・ 無事に人質を地上に出す事に成功出来た。他の人に人質救出の旨を伝える。

皆どうやらもう少し怪人を相手にしていくらしい・・・

ザザザッザザ『たしかこう使うのだったな？あーあーこちらアシナに変わって蝙蝠。現在主を背負って地上を目指してるそろそろ着くと思うが・・・』

「あっ貴方はたしかアシナさんの刀の!?アシナさんはどうしたんですか!?」

『主は昆虫怪人に敗北。気を失って居られる。あっ光が見えた。誰も居ないではないか。』

どうやら別の出口に着いてしまったらしい。

「こちらの位置は分かりますか？」

「案ずるな既に貴君の横だ。」

「うわぁぁ!?!?!」

ビッビックリしたぁ・・・ 心臓止まるかと思ったよ

侍風の男の背には外傷が特に見られないアシナさんが背負われている。やけに綺麗だ。

「あの？負けたというのは・・・」

「あれは酷かったぞ？同化という我と主の一体技を使っても尚叶わなかったからな・・・ 今の主には勝つ術は持ち合わせておらん・・・ それどころか他の奴らでも辛いのではないか？あのスピードにパワーだ。我なら対処できるだろうが・・・ 如何せん主さえ生きているのならば他の事はどうだっていいからな、動く気にならん。」

なんて淡白な人なんだ・・・ だが確かに怪人であるとするこの人なら人間なんてどうでも良いのかもしれないな。それにアシナさんはヒーローだが蝙蝠と名乗る彼はヒーローではない。言わば民間人だ、

そんな彼にこの戦いに協力してくれなんて虫がいい話だろう
「その怪人の特徴は？」
「名前は昆虫王・・・ いや奴の名乗ってたイントネーション的に昆虫皇のが正しいか・・・ 仮面ライダーのような奴でカブトムシの仮面を付けている。全身白色で恐ろしく早い。緑の小娘が1回やられてる。」
「あぁ会議で言ってた怪人のことですね？・・・ まさかパワーアップしているなんて・・・」
「うっうぅう・・・ ここは？」
　アシナさんが目を覚ました。
「アシナさん・・・ 大丈夫ですか？」
「ちょっとキツイかな・・・ 精神的にね・・・ あんなの・・・ 勝ち目ないじゃん。倒したと思ったらパワーアップして復活なんて・・・ どうやって仕留めればいいんだよ。誰も倒せんぞあんなん。それに・・・ あれより強いのがまだ沢山・・・」
　アシナさんが自棄気味に言い放つ。
「そうですな・・・ 確かに主だけでは奴を葬る事は厳しいやもしれませぬ、いや正直不可能に等しいでしょう。」
　ハッキリ言うなこの人。本当に主と思ってるのか？
「しかし主には仲間がいます、友がいます、そして我がいます。頼ればいいじゃないですか。目の前の人物に・・・ 我は今まで主に決して手を貸さなかった。間接的に色々技を教えて同化という方法だったりで手を貸しては来ましたが我自身が手を加えた事は1度たりともございませんでした。それは我に依存するのが良くないと感じたからでございます。ですが今の主なら我に依存する事無く上を目指し続けるでしょう。これは主の道具としての言葉では無く。貴公の師であり相棒である蝙蝠からの言葉でございます・・・ 立ってくだされアシナ殿・・・ 貴公が我に協力を申し出ると言うのならば共に目の前の敵を討ち滅ぼしましょう。」
「蝙蝠・・・・・ ありがとう・・・ うん分かった。手伝って欲しい。俺だけじゃどうしようもないから・・・ 俺だけじゃ倒せそうもないから・・・」

すごく感動的な所申し訳ないけど言うことは言っとかないと。
「あのーすいません人質の救出は済んだのでもう潜りに戻る必要は…」
ザッザザザザ『あ?これどうやって使うんだ?この赤いの押せばいいのか?あっ消えた』
アトミック侍さんだな?この声は… しかも音声消してるし
『まぁいい。現在子供を確認今から追跡を開始する』
どういう事だ?ワガンマ君は自分1人だと言っていた… 嘘を着いていた?
僕はワガンマ君に詰め寄ろうとするが辞めた。
「わーー!!ごめんなさい!!!僕だって助かりたかったんだぁ!!!ひーーー!!!」
今この子に当たった所でどうしようもない… 時間と労力の無駄だ…
「まて!童帝!!もう人質の救出はすんだ。どうだ?ここで撤退と言うのは……」
この人たちは… 本当に……
「セキンガルさんだっけ?俺達はヒーローですよ。救える範囲の物は救ってかないと行けない。それを見て見ぬふりをするなどナンセンスですよ。」
「そうだぞ!何言ってんだ!おっさん」
周りのA級もアシナさんに同調する
アシナさん… 立ち直り早いですね。怪人だからかな?それに…
その通りだ。僕達はヒーローだ分かってるのに助けなくてどうする。
「アシナさん… 行きましょう。事は一刻を争います…」
僕達は再び穴へと戻った。

幹部

先程・・・ いや気を失ってたからどれくらい立ってるかは許容出来て無いけど・・・ 昆虫皇に破れて少し自棄気味になったけど・・・ 蝙蝠が人間携帯で加勢してくれると会っては１００人力どころか１０００人力に及ぶ。蝙蝠を振れない今俺は蝙蝠と同じくらいの太刀の煙焔（えんえん）を使っている・・・ 能力はぶっちゃけ夕日だサブウェポンがメインウェポンになっただけである。

「アシナさん・・・ 囲まれました・・・ まだこれだけ居たなんて。」

気配は感じる。

「主・・・ ざっと３０程です。もう残りカスレベルでしょう。主は童を見ていて下され・・・ ここは我が」

「ＯＫ任せた。」

「御意」

蝙蝠が消えて怪人達の悲鳴が聞こえる。

蝙蝠の手際は素晴らしい物だった次々と異形の首が飛ばされ、体が別れる。

ゴポォ・・・

なんだこの音・・・

「蝙蝠さん!?気をつけて！」

なんの気配だ？これ？

「む？」

ピュン

気の抜けた音と共に何かが蝙蝠に向かって飛んでくる。上手く弾けたみたいだけど・・・ 銃を扱う怪人？

ゴポポォ

俺達の目の前にスライムの様な何かが聳え立つ。

「これも怪人ですかね？」

「じゃない？一緒に片ずけるよ！蝙蝠！」

煙焔を構えてスライムと対峙する。

「御意。」

スライムのレーザーが俺達を襲ってくるがおれも蝙蝠もそんな物にやられるたまじゃない。蝙蝠が切りかかるけど水なだけあって物理攻撃の類は受け付けないらしい・・・ 俺は煙焔の熱で蒸発させつつ応戦するけど。効果が薄い。

童帝君もランドセルから色々と取り出して考えてくれてるけど多分無理そう。

「1度離れた水は再生しないみたいです!どんどん引き剥がしましょう!」

「いや・・・ この量ちょっと厳しくない!?」

そんなこんなでしばらく応戦していると地面が激しく揺れて天井が落ちてきて地中に3人纏めて生き埋め状態になってしまった。

昆虫皇ｓｉｄｅ

首切りは大したこと無かった・・・ 今の僕ならオロチにさえ・・・ いやあんな小物どうだっていい・・・ 僕はこのまま森に帰って静かに暮らそう。元々キャラでは無かったんだ。あとに引けなくなっただけであって。もう僕の家族を侵害させない力も得たのだ。今夜だな・・・ 今夜家に帰ろう。ギョロギョロやオロチには悪いがな・・・ そうと決まれば早めに荷造りしておかないとな。そう言えばあの家荒らしの害獣・・・ まだいるだろうか・・・ 居るのなら討伐しておこう。今の僕なら負けることはないだろう。

「おいで・・・」

ブブブブ・・・ ピト

「今日中に帰るから皆に家に向かって一斉移動を開始してって伝えといて。やる事が終わったら僕も直ぐに追いつくよ。」

眷属に帰宅の旨を伝えて自室戻り、少し眠る。入口に糸を敷いて置いたから通れば分かる。

その数十分後地盤がひっくり返されるなどと想像もしていなかった。

アシナｓｉｄｅ

これやったのタツマキさんかな?取り敢えず早く出たいけど・・・

「童帝君出れるけどどうする?」

「僕はメタルナイトに救援の要請をしてから出ますので先に出てもらって大丈夫です。僕は僕で自分で出れますので。」
「分かったよ・・・ 蝙蝠出れそう？」
「はい・・・ 出来そうです。」
蝙蝠は腰に力を入れて天井を思いっきり殴り飛ばした。
天井が吹き飛び外の光が見える。崩れそうだから童帝君を担ぎ上げて一緒に外へ出る。
それは阿鼻叫喚であった無数の黒い何かと巨大なスライム。ひかる玉を携えたジャージ姿の者とへそを出した人らしき物、口しかない化け物に仮面ライダーのような怪人。唯一ヤツらに統一性があるとするのであればあれら全員怪人でありそして全員災害レベルは竜であるという事だろう・・・

動かざること山の如し

昆虫皇ｓｉｄｅ

いってぇなぁ突然地震が起こって叩き起されたと思ったら天井が落ちてきやがった。取り敢えずこんな所で死ぬ訳には行かないから上に出よう。

上に掘り進んで行って地上に這い出ることに成功した。黒い塊がそこら中から出てくる。黒い精子が・・・ 分裂し過ぎだろ

「おい何が起こった？なんか知ってるか？」

「大方タツマキかギョロギョロが戦闘で地盤ひっくり返したんだろ」

「まじ？頭悪いだろ・・・」

「それより見ろよ・・・ あれ。まだピンピンしてらぁ」

緑の小娘が中に浮いてる様が見て取れる。でもこっちはまだ幹部階級は誰も死んで・・・ オロチ居ないじゃん!?

「袋叩きで勝ちでしょ。てかヒーロー仲間生き埋めの皆殺しかよ・・・性格わっる。」

「黒い精子？オロチ知らない？」

「知るわけないでしょ。死んだはありえないからどっかで寝てるとか。」

死んでたらいいな！

ゴボォゴポポ・・・ ピュン

先手を入れたのはイビル天然水、でもそれでやられてくれるようなたまじゃないでしょ。てか手出すのはやすぎ・・・ この距離じゃ羽音聞こえないでしょ。まぁいいやニートしてよっと

スドボォン！

ホームレス帝の光の玉が射出されるが流石のタツマキこれでへばるやつじゃない

「あっそう？あんた達そんなに早く消して欲しかったんだぁ？」

ゴゴゴゴゴゴ

地面や空気が恐ろしいレベルで揺れる

「来るぞまじな念動力が・・・」

まずいな・・・ 近づいて羽根鳴らすか？
「あんた達全員１０秒あれば・・・」
１０秒あれば近づけ・・・
「タツマキ!!!上だ!!!」
あ？タツマキの上？誰か不意打ちに行った？
タツマキの上から見知らぬ女が降ってきてタツマキを捕縛して地面に叩きつける。あいつ・・・ ギョロギョロか!?ギョロギョロって女だったの!?えぇ・・・
「おい！昆虫王！ぼさっとしてんな！畳み掛けんぞ。」
「分かってるよ・・・ はぁ」
めんどくさいからニート決め込も。
おーおーブサイク大総統がお得意の顔面崩壊パンチを決め混んでるよ・・・ 痛そ。まじで顔面ぐちゃぐちゃになりそうな威力だな。んで追い打ちで黒い精子が巨腕化してタツマキを握りつぶすと・・・ 勝負あったな。
「焼却！」
あっ・・・ 黒い精子燃えた・・・ 嫌でもあいつなら死なんか。
あーあーイケメンサイボーグもボコボコにされちゃってるよ・・・ 可哀想に。
ギョロギョロがなんか言ってるけどきょーみねーな
ドボゴン!!!
新手か・・・ !?首切り!?生きてたの!?あっ甘さが出たかぁ・・・ まぁでもこの状況なら余裕か・・・
さて・・・ なるべく死なないように動くとしましょうか・・・

無念

飛び出して先ず目に入ったのはボロボロのタツマキさんと両腕のないジェノス君だった。
「大丈夫？2人とも、まだ戦えそう。」
「馬鹿言わないで・・・　全然余裕よ」
「愚問ですよアシナさん足だけで大丈夫です。」
相変わらず強がりな人達だ・・・　あまり無理はして欲しくないんだけど、俺と蝙蝠で何とかできるかって微妙な話だからな。
「んじゃあ皆行・・・」
くよと言おうとした瞬間すごい勢いでタツマキさんが吹き飛ばされる。
「タツマキさん!?」
ズドドドド！
光の玉が俺目掛けて飛んでくる。飛び退く事で回避出来たけど後が辛そう。
「おいおい・・・　生きてるなんてなぁ？まぁ息の根止まってるか分からないし。死亡確認なんて意味ないと思ってしなかったから生きてるなんて当然か・・・　虫達の餌にすれば良かったか？」
しまっ・・・
「させぬぞ」
ガィィィン!!!
蝙蝠が間一髪で受け止めてくれる。
「ありがとう蝙蝠！そいつ任せられそう？」
「安心して下され・・・　余裕でございます。」
心強い・・・
「了解任せた。」
俺は先ずデカ口を仕留めに行った。
先ず1匹め!!!
「血流技!!!『波打ち』!!!」
ズバン!!

口から上を両断する。存外に柔らかかった、次の相手は近いあの黒いのだな？
「血流技『血纏』」
「俺と殺り合うってかぁ？そいつは辞めとけよ相手が悪いぜ。」
「喋ってる暇があるのか？」
黒いのを両断して次の黒いのに移る。黒いのが多いな・・・ でも硬さはないから速さで攻めれば・・・
「よそ見してる暇があるのかぁ？」
は？
「ガファッ!?」
半端なく重い一撃が体を襲う。何が起きた？こいつはさっき切ったはず・・・ 分裂するのか？それとも別の個体？分からない。
「甘すぎんぜ！お前！」
ガッ・・・ ベキボギバギギ
捕まれ、握りつぶされる・・・ 全身の骨が悲鳴を上げる。こりゃ再生に時間がかかるな・・・
ベヂャア
「はいっしゅーりょーお疲れさんって感じだな」
「主!?」
「おいおい前向けよ俺の速さと硬さに着いてけて無いんだろ？」
情けねぇなぁ俺

蝙蝠ｓｉｄｅ
主は死なぬ案ずるな・・・ まずは目の前の虫に集中しろ・・・ 確かに早いそして硬い、だが敵ではない・・・
「はっはっはっはっこのスピード！貴様も首切り同様！なぶり殺しに・・・ !?」
切れぬ相手でも無い。
「おっと？掠めただけか？流石の反応速度だな？だが切れぬ相手でも無いな。」
「クソが・・・ 強いな？貴様、貴様の主よりずっと。」

「無論。なんせ我は主の師であり」
刀に着いた緑の液体を振り落とし構え直す。
「従者であるからなぁ？貴様を倒して主の元へと向かう。」
「言ってくれるじゃねぇか。」
ブッ
バカの1つ覚えだな。こやつは気付かぬのか？先程から我が1つも動いて無いという事に。
「もらったァ!!!
!!あ？」
ズン!!!
「アギィ!?!?」
虫の背中に縦1文字入れる。やはり硬いな… 首は切れぬだろうが、金の筋ぐらいは切れるだろう。狙うか
「いってぇなぁ！」
拳が振られるが弾いて胸に反撃を入れる。これは避けられ掠めるだけだった。
「クソがよォ」
グチグチグチ
「ふむ… 昆虫の類いに再生機能は備わっておらぬはずだが…」
「これは僕の特有能力だよ… まだ倒れる訳には行かないからね…」
また速さに身を任せた攻撃か… 雑魚だな。
ズン!!!
「昆虫皇!!!奴の動きを止め… うわっ!!」
一瞬だったほんの一瞬、第三者によって体が完全に制止してしまった。奴にとってはその一瞬の隙さえあれば良かったのだろう…
ズブン!!
「ゴボォ」
口から血が垂れ腹から奴の尾が突き出ている。
「いやーギョロギョロもいい動きするね… って嘘でしょ。」
最後の足掻きで奴の尾を引きちぎる。
「悪足掻きにも程があるでしょ… まぁ痛いだけでいくらでも生やせるけど。」

体が動かぬ…

刀を杖にして膝を着く。ここまでなのか？いや… 再生を待てば… まだ。毒が身体中を巡っている、傷を塞いでからの解毒が優先か…

「君は確かに強いよ？ギョロギョロが居なかったら間違いなく他の竜達を葬ってただろうねぇ？てか全力の毒だったのに生きてるの怖いんだけど早く死んでくれない？」

奴がニタニタしてるであろう声で言ってくる。耳障りな声だ…

「もうヒーロー協会も終わりだね。さっきあっちでシルバーファングが爆破四散してたの見えたし。タツマキは満身創痍。虎の子である名前も知らない君は地に伏せている。勝ち目ゼロじゃん」

すまぬ… 主…

冷たい地面の感覚を味わいながら我は地面に倒れ込んだ。

恐怖（笑）

童帝ｓｉｄｅ

不味い…　非常に不味いことになった…　アシナさん達が地に伏せてから数刻が経つ…　キングさんとフブキさんが時間稼ぎをしてくれてるけどどれだけ持つかなんて分からない…　考えろ！考えるんだ童帝！でも今この場で戦力になるのなんてキングさんぐらいしかいない…　状況は４対１！考えるんだ…

ボゴォ

プリズナーさんがアトミック侍さんを担いで這い出てきた。アトミック侍さんが突っ込もうとしたけどプリズナーさんが上手く止めてくれた。豚神さんがアトミック侍さんのお弟子さんを救出して出てきた。ゾンビマンさんも出てきて、なんと光の玉を射出する奴を無力化してくれた、これで３体１だ。黒いヤツらはキングさんに夢中らしい…　あの水は…　わかんない…　でも皆揃えばまだなんとか…

ゴゴンッ!!

「アマイ…　マスク…」

アマイマスクさんが巨大な岩を背負って出てきた。それと同時にタツマキちゃんが起き上がる。

「ブサモンの気配が消えたと思ったら、まだ獲物が残っていたなんてな…　さぁ…　正義を執行しよう」

アマイマスクさんが岩を黒い塊達に投げつけた。あのサイズの岩を投げつけるなんて…　一体あの細い体のどこにそんなパワーがあると言うんだ？

「ふぅ…」

「ふうじゃねぇよ。俺を前にして一息着く暇があるってのか？」

「アマイ！後ろで殺気が動いてるぞ!!!」

アマイさんの後ろから巨大な黒い腕があの人を握りつぶさんと迫るが、それを難なく両断してみせる。しかしその直後に水の化け物から水弾が射出され、あの人の腕が取れる。不味い…　伝えなきゃ！

「聞け！あの水は正攻法じゃ倒せない！まずは回避に徹するんだ！で

も！僕は攻略法を考え付いた！君は先ずキングさんのサポートに回っ・・・ はぁ？」
何してるんだあの人？気でも狂ってしまったのか？
あの人は自分の腕を拾い上げて切り口に擦り付け始めたのだ。
「綺麗な切断面だったお陰で無事にくっつける事が出来たよ・・・ とはいえ僕の綺麗な体に傷を付けたことは許し難い行為だ・・・ 殺す」
くっついている・・・ おかしいあの人はなにかおかしい。
ドッ
水があの人の胸を貫く今度は助かるまい。だから回避に徹しろと！・・・ いや悔やんでも遅い・・・ 次の行動を・・・
「プリズナーさん！クロビカリ救出を急いで下さい！一刻を争います！」
「わっわかった！エンジェル☆クロール！」
「イケメン仮面さんもやられた今僕とキングさんで何とかするしかない！キングさん！今から作戦伝えます！」
「おい・・・ 誰がやられたって？そんな早計でよく天才呼ばわりされたものだな。まぁいいさ」
は？今だって胸を・・・ 風穴だって。そう思い彼の胸を見てみるが傷なんてどこにもなかった。
「今は僕の事なんてどうでもいいだろ？それより君は早くキングに作戦を伝えたらどうだい？まぁそれが終わる前に僕が怪人を倒してたら君の立場がなくなってしまうな・・・ 」
昆虫皇ｓｉｄｅ
俺完全に蚊帳の外だなぁ。
「おい！昆虫王！私を助けるんだ！」
はぁ嫌だね得もないし助けたところでって感じするし・・・ もう森に帰ってもいいんだよねぇ。
「おい！」
「うるさいよホームレス帝」
「なっ!?」
いや、なっ!?とか言われても・・・

「ごめんね、僕最初から暇つぶし感覚で参加してたから。この集まりに義理も情もないんだ。だいたい捕まった時点で負けだろう？甘えて貰っちゃ困るよ…　僕は君らの味方じゃないし、仲間でもない…ただの遊び相手って感じ。その日の暇つぶし相手のが楽しいかな？まぁ中々楽しませてもらったよ。後はあそこの憎き首切りを始末しておきたい所だけど…　まぁこの姿をプレゼントしてくれたからね。今回は見逃してあげるよ。後は…　黒い精子辺りとはそこそこ仲良さげにしてたからあいつがピンチになったら助けてあげて恩を売るのもありかなぁって。」

「きっ貴様ァ！」

アッハッハッ怒ってる怒ってる、でもまぁ本心だしなぁ

「あぁ蝙蝠って言ったけ？君も主の元に返して上げるよ？」

「誰が…　貴様の…　慈悲など受けるかァ!!」

ブォン

ウッソ!?あの致死量の毒流し込んでもう動けるようになってるの!?化け物過ぎでしょ

「だんだん…　慣れて…　きたぞォ？ククク…　貴様を葬り…　あのエスパーを切り刻み黒いのを焼き払う…　完璧だな…　そして一体ずつなら造作もないことだ…　グッヴゥ」

ほらぁ無理するからまた倒れる。じっとしてろって

「おぉ怖い怖い…　さて」

僕はその場に胡座を描いて空を見上げる。今夜はいい月だなぁ。

あぁそうだ殺されちゃ困るから毒追加しとこっと。

害虫駆除

昆虫皇ｓｉｄｅ

タツマキが起き上がってイビル天然水をはじき飛ばした。僕も生きて帰りたいからあまり危ない事はしたくないんだけど・・・ タツマキ位は無力化しても・・・ いやめんどくさいからやめておこう。まだこの体に慣れていないんだろうか?だるいと言うかなんと言うか・・・黒い精子も危ないんだろうか・・・ 多細胞精子になってる。

「おい!お前も見てねーで手伝いやがれ!」

ご指名だね動こうかな?

「りょーかいっ 」

「久しぶりだねぇタツマキちゃん。元気してたァ?」

「害虫めが・・・ あんたなんてもう怖くないわよ。」

「あっはっはっ!イキがるねぇ?何も出来なくなっちゃう癖に。それに頼みのアシナきゅんは未だ伸びてるし。アシナきゅんの武器だって戦力外さ!」

タツマキの口が弧を描く。不気味だななにかあるのか?

「武器が・・・ どうした?」

はぁ?

声のした方を振り向くと侍が僕の顔目掛けて刀を振り下ろす直前だった。

「血流技『岩砕き』!!!」

ッ!?

僕は咄嗟に腕でその技を受けてしまった。それが良くなかった腕は仮面と共に砕かれてしまった。

血を滴らせながら彼の者を睨む。

「ギザマァ!!!何故もう動ける!?」

「ふむ・・・ 素顔は人と大して変わらぬようだな。何故動けるのか、という問いに対しては我の耐久が貴様の毒を上回ったとしか言いようがないのでなぁ?」

は?ふざけるなよ全力の毒を2回だぞ・・・ 企画外過ぎんか?やっ

てられるかよ逃げよう・・・ 勝てない、死ねない！
「おい？何処へ行こうとしている？」
「イギィ!?」
羽を切られ飛ぶことも出来なくなる・・・ あぁここが僕の墓場になるのか・・・ ごめんよ皆・・・
蝙蝠ｓｉｄｅ
取り敢えず害虫の羽はもいだからもう逃げる事も出来まい。ふむ・・・ トドメを指しておこう。
「なぁ・・・ 死ぬのか？僕・・・」
「そうだ。貴様は死ぬ」
「再生も間に合わない・・・ もう一思いに殺ってくれ。」
あまり受けたくない頼みだが獲物で遊ぶ趣味はないのだよ、我は。
「承知した。」
手を立てながら片手で害虫の首に刀を突き刺して命を絶つ。
「御免。」
血を吸い継承を開始する。
さて・・・ 小娘の方は上手くやっているらしいが、脳へのダメージもでかいだろう。人情だ手を貸してやろう。
「小娘、助太刀させてもらう。」
「あぁ生きてたのね。まぁあんたなら足でまといにならずに済みそう・・・ いいわ手を貸して」
「足でまといにならぬかというと厳しいやもしれぬ・・・ まだ完全に毒を克服し切れておらぬからな・・・」
「そう・・・ じゃあなんで来たの？引っ込んでなさいよ。てかそれよりアシナは無事そうなの？」
「主は既に死んでいる・・・ 魂ごと葬らない限りはこの世に留まり続けるだろう。」
「あぁ死んでるってそう言う。」
「おい・・・ 目の前の俺を目前に呑気に喋ってる暇があるのかよ？」
目の前の雑魚がほざいている、ふっ貴様らなどあの不意打ちエスパーさえいなければ遅れをとる相手では無いのだ・・・ それに加えこ

ちらには不意打ちができるエスパーがいる！負ける要素無しだ・・・
「へっへっへ余裕を見せていられるのも今のうちだぜぇ？」
ほう？ここから先の打開策が何かあるとでも？
鍔に指を掛けて居合の構えを取る。ここからやつが分裂しないように燃やし斬るなど容易い。
「おいおい動いてみろよ人質のいのちがねぇぜぇ!!!」
人質だと？そんなものどこから
「おーいこっちだ！こっちー！」
振り向くとそこには不細工なガキと黒い奴がいた。人質とはあの餓鬼か・・・ 厄介だな。
「ひっとじちーひっとじちー」
「はぁ・・・ 切るか。」
「待ちなさい、一市民を巻き込む気なの!?」
「コラテラルダメージという物を知らぬのか？１の救済より１０の救済のが尊いであろう。彼には悪いが犠牲となってもらおう・・・」
「さいってい！信じらんない！」
「おっと御託はそこまでだ。俺はあくまで１００の集合体！お前の相手はそこの１０兆分の俺だ。」
ギョミミミミミ
「１度細胞分裂するとなぁ二度とは元に戻らねぇ。ひとつの肉の中で１０兆の俺の自我の奪い合いだ。たった一つの生命の誕生にも多くの犠牲が伴う。だから尊い！だから美しい！今！おれは深い悲しみに満ちている・・・ ９兆９９９９億９９９９万９９９９の俺が・・・ 何処かへ逝こうとしている・・・ 反面喜びにも溢れている！１０兆合体！本当の俺の・・・ 誕生だ。」
黄金精子！爆　　誕
うるさい奴だな、ペラペラと真面目に聞いた我を褒めて欲しい。黄金精子とやらに目を向けるがあんまり変化はないように感じられる。
「我は大差ないように感じるが・・・ なにか変わったか？」
「舐めていますね？あなた。」
「舐めてはいないさ。唯変化が分からないってだけ・・・ ？」

ガイィン
ほら大差ない、力が少し上がっただけだ。
「貴方・・・ 何者ですか？超越した怪人である私の攻撃を防ぐとは。」
「ただのしがない刀だよ。」
あぁあああああ!!!
叫び声が聞こえる、人質の方だ。そちらを向くと未だ倒れてる筈の我が主が立っていた。

怨嗟と主役

体が…　軋む、意識が…　淀む。

あぁ…　何が…　足りない？

コワセ…　ツブセ

そうか…　分かった…

コロセ…　コワセ

少しだけ…　君の力を貸してくれないか？ほんの少しでいいんだ？

コロセ…　コワセ

あぁ敵は壊すし潰すから…　だから…　ね？

ワガナヲヨベ

ありがとう…　じゃあ始めよう。

頭の中に其れが入る混んで来る。憎しみが…　怒りが怪人としての本能が…　いつか自分が見た景色、いつか見るはずだった景色。そうだ全て壊そう、全て殺そう。大切な者を守る為に。この力は自らのために…　怪人らしく己が為に。

「我が問いに呼応せよ。怨嗟と憤怒の炎よ我に力を貸し給え。我が身体に根付き彼の者をやき尽くせ。其の名は『怨門』全てを絶つ刀よ…　我が元に！来たれ！」

動かなかった体が動く…　体が変化するのを感じる。右手には瘴

気を放つ黒い刀が握られている。これが怨門、我が身の怨嗟を放つ門。
黒い怪人と一般人と思われる子供が居る・・・ あの怪人を手始めに切ろう・・・
体がすごく軽い、一瞬で奴の懐まで潜れてしまった。そのまま奴の体を1突きする。
「あ?んだ?お前・・・ あっ・・・ アッチィィィィ!?!?!?!?」
奴の体が激しく炎上したのを確認して奴の体から刀を抜く・・・ 怨嗟それは尽きぬ思い、人を動かす闇、相手を蝕み、犯し、喰らう。喰らった記憶は新たな怨嗟となり怨門の糧となる。
「貴方は・・・ 首切り!?ヒッヒーロの首切り!?初めて見た!」
怨門がカタカタと震える。だめだこの子は敵じゃない・・・ えん
「安全な所に避難してようね。ここは危ない・・・」
子供を抱えてなるべく離れた位置に移動する。
怨門を鞘に収めると脱力感と虚無感に襲われた。鞘が蓋の役割を持っているのか・・・ にしても凄まじい。憎しみとはこのレベルの力を生み出すと言うのか。この刀はあまり抜けないね。だけど俺や蝙蝠の力でも勝てないような敵が現れるとするならば刀の力もその先も考えなければならないのかもしれない・・・ そんな物騒な事考えるの辞めよう
蝙蝠達の元へと戻る。黒い奴の色違いの姿は見えいないね・・・

タツマキside
人質の解放はアシナがやってくれたけど、アシナのあの姿は何かしら。新手のコスプレ?後で生意気侍に聞き出すとして・・・ 目の前の敵に集中・・・ はしなくていいか。生意気侍だけで事足りそうだし、大人しく休んでようかしら。
「私が・・・ やぶ・・・ れた?」
奴が胸から突き出た刀を弱々しく掴んで信じられないと言った感じに震える。

「御免…」

刀が勢い良く引き抜かれる。

ドシャア

終わったわね。相手の拳を踏みつけて裏回りからの背後刺し、綺麗に決まったわね。守って弾いて、体制崩して弱い攻撃の誘発… 恐ろしいわね。

「終わったぞ、小娘。主は来ておらぬか？」

「蝙蝠… ここにいるよ？」

今来たわね。

「主… ッその刀は…」

カッ蚊帳の外!?

「これ？まぁ… 秘密兵器かな？」

「… 左様で」

なによ… この空気。

「でもこれで怪人協会の面々は終わったわね？少しきつかったけど… 何とかなって…」

「ないなぁ？」

なによ!?まだなにかいるの？もう勘弁して欲しいわね。帰ってお風呂にでもゆっくりと入りたいのに… 早急に片付けましょ。

「不測の事態… 主役の登場ってとこか？」

「何だ貴様は？ヒーローか？」

なわけないでしょ馬鹿なのかしら？この残念侍

「おい… やめろ、虫酸が走る。耳の穴かっぽじってよく聞きやがれ。俺の名はガロウかつて人だった者だ… すぅーー… ガキンチョ!!!よく見ておけ!!!今夜てめぇを助けようとしたもの達、そして殺そうとしたもの達!!!誰1人として残らねぇ!!!てめぇの価値観を壊してなぁ!!!ヒーローってモノがなにか教えてやんよ!!!」

殺そうとしたものは多分もう居ないでしょうね。
「ふむ・・・ かつて人間だった・・・ か・・・ しからば敵であるな」
「その通りだな、俺はお前らの敵だ。」
「毒が完治しておらぬし腕は痺れてきて動かぬから連戦は避けたいが・・・ 仕方ない出張るとしようか、主は下がっててくだされ。奴は我が仕留めておきますので・・・」
「ねぇアシナ・・・ 昨日の回復するやつ貸して。」
「？わかったよ・・・ はい。」
刀を自らに突き刺して回復を促しておく
嫌な予感がする・・・ 回復しておいた方が・・・ ッ!?何？

ズガガガガガ!!!ガァン

あいつらの戦闘が全然見えない。あっちに飛んだりこっちに飛んだりしてるけど
「ハイッ次ィ・・・」

「ふか・・・ く。」

ゴシャア

「蝙蝠ッ!?刀化！」
はぁ!?毒でやられてたとは言えあの生意気残念侍がやられたっての!?
「だいぶ強かったぜ・・・ そいつ毒だなんだで弱っててくれて助かったぜ。だがそいつに勝ったことによって俺は新しいステップに進む事が出来たぜ？俺は最強にまた近づいた・・・」

もしかしたら覚悟を決めなきゃ行けないのかもしれない。

総力戦

蝙蝠に少し頼り過ぎてしまったのかもしれない。
「オイオイ次の相手は誰だぁ?まさかヒーローさんともあろうお方達がもう戦意喪失しちゃいましたァ?まっ仕方ねぇな俺は完全なる悪であり恐怖の象徴だからな?」
はぁ・・・ だいぶめんどくさいな。なるべく怨門を抜かずに超えれたら良いけど。
「タツマキさん・・・ いざとなったら蝙蝠を宜しくお願いします。」
「はぁ?何言ってんの?」
分からなくていいです・・・ 今ので継承は終わった、さて行こう。
「援護宜しくお願いします。次の相手は俺だ!ガロウ!!!!煙焔!!」
「S級6位ヒーロー首切り。愛刀蝙蝠を持って敵の首を一太刀の元切り伏せる様から着いたヒーローネーム。得意技は血流技という独自の技から成す岩砕き。その一撃は文字通り敵を寸断する。俺の敵じゃねぇなあ?」
「御託は結構。」
煙焔を構える
「血纏。参る・・・ !」
強化した煙焔で切りかかるも呆気なく避けられ、蹴りを加えられる。それを弾く事は出来たもののやつの猛攻に攻めあぐねる。
「見ろ!これが俺の拳だ!名付けて怪害神拳・・・ いや怪害神殺拳だな。神という不定形な物も俺が破壊する!!さぁ対処して見せろ!首切りィ!!!」
「クッ・・・」
相手の体勢を崩したいが体幹が強すぎる。逆にこっちが崩されそうだ。
「下がりなさい!アシナァ!」
後ろから物凄い数の岩石がガロウ目掛けて降り注ぐ。
「多勢に無勢ってかぁ!そそるねぇ!だがそんな逆境で勝ってこそ!世に俺様の驚異を知らしめる事ができる!さぁこい!戦慄のタツマ

キィ!!!!
!!」
「うるさいわね!そんなに死にたいなら殺してあげる!ハァァッ!!」
とりあえずタツマキさんの真下の位置に着いて構えておく。すごい数の岩や瓦礫がガロウに降り注いでいるが、瓦礫がガロウの元へ到達する前にガロウが弾き落としている。
「フッ・・・ 弱いな。それが戦慄のタツマキの念動力か?妹と大差ないなぁ?」
「あんた・・・ 妹になんかしたの!?」
「あっちに死体が転がってると思うぞ?」
まずい・・・ タツマキさんに妹煽りは・・・

ピィン

タツマキさんの髪が思いっきり逆上がり、顔に青筋が浮かんでいる。
「潰すゥ!!!
!!」
より激しい岩石群がガロウを襲うがまるで聞いていない、あれではタツマキさんが先に燃料切れを起こす。
「クソッ・・・ そうだ!アトミック侍さん!まだ戦えそうですか!?」
アトミック侍さんの元へと出向き交渉を始める。
「お?まだ俺自体はやれるが刀がな・・・」

「それなら自分のをお貸しいたしますので!とりあえずこちらを使ってください!」
蝙蝠の力の断片である血の変質を刀化させた『紅葉』を渡す。
「おっおう・・・ こんな良いもん貸してもらって大丈夫なのか?」
「それぐらいいくらでも出せます!タツマキさん!聞いてください!!!
1度念をガロウを制止する事にシフトして下さい!お願いします!!!
畳み掛けます!」
「さて!会わせろよ!首切り坊主!」
「止めてやったわよ!!!
!!」

アトミック斬!!!

血流技『大嵐』『波打ち』!!!!

「むらら・・・」

アトミック斬は指で止められ、波打ちは口で止められ、大嵐は片手と片足で防がれた・・・ 化け物かよ。

「フンッ!!!」

バキィ

紅葉と煙焔が折られた。うそ・・・ だろ?

「神殺拳に!!」

「ガフゥ!?」

「アトミック侍さん!!!」

アトミック侍さんが飛ばされ

「死角!!!」

俺が掌底でその場に倒れ伏し

「無しだ!!!」

豚神さんの元へと移動したガロウが裏拳をぶち込む。

出し惜しみしてる暇なんてない!タツマキさんに継承はしてあるんだ!!解き放て!!

「怨門!!!」

体と服装が変異して力が湧き上がり、怒りと憎悪が湧き出る

「残りの力全部注ぐわ!!!四方に避けて!!!霧散しろ!!!」

「むっ・・・ ほう?先程のは一時的な無力化・・・ 今回は殺しに掛かって来てるわけかぁ?」

「今決めなきゃ!勝ち目なんてもう無い!!タツマキちゃんのねじ切りを耐えている間に徹底的にダメージを上乗せするんだ!!!」

「そんなの分かっているさ、童帝。あの侍の立ち会いを見た限り正攻

法で倒せないのは事実・・・ まぁ貴様も怪人として僕達の前に立ったんだ、サンドバッグにされても文句は言うまい。卑怯とは言うまいな？」
「お二人共！俺が合図するまで好きにやってください！最大級の一撃を放ちます！」
「了解！」

ガガガガガ!!!!!

ガロウ無数の攻撃が入れられる。俺はその間に怨門を右手で持ち、左側に持っていき、左手を刀の背に置いた状態でチャージする。刀の黒い霧が増幅して目眩が起こってくる。意識をしっかり持て！俺！もうこれ以上堪らないレベルまで貯めれた。
「お二人共！1度下がって!!」
２人が引いたことを確認して溜まった物を解き放つ。
「怨嗟!!『泣きッッ声ェェ』!!!」
左下から右上にかけての切り上げ。その切り上げは悲鳴を上げながら斬撃となってガロウに飛ぶ。追い討ちで右上から左下へともう1発お見舞いしておく。全力全開の全てをつぎ込んだ一撃、本来なら塵すら残らず消滅するはず・・・ ッ!?
童帝君とアマイマスクさんが同時に飛ばされ、俺に拳が迫る。

ガギィイン

何とか弾けたが大きく後ずってしまう。
後ろから力尽きたタツマキさんがへなへなと落ちてくる。
「あんた・・・ 全力でやったの？」
「勿論だよ手なんか抜いてない。」
「今のは実に良かった・・・ 死ぬかと思っちまったぐらいだ。だがッ!!俺は耐えた!!!耐えて見せた!!!首切りと戦慄の!!!全力の一撃を一身

に受けて!!!俺はここに立っている!!!」
もう… やるしかないのか?… もう… 始めるしか… ないのか?仕方ない… か
「タツマキさん… 蝙蝠を頼みましたよ。」
「はぁ?何言ってるの?」
「… ッガロウ!!!今から俺が面白い事をしてやる!変身だよ!!!ヒーローに変身はつきものだろ!?」
「?何言ってるんだおめぇ。」
「お前は怪人… 俺はヒーロー。だからヒーロースーツに着替えなきゃならない…」
これは賭けだ… あいつが完璧な怪人に拘るのなら…
「ヒーロースーツに着替えないヒーローは一般人と変わらない!そしてヒーローは遅れてやってくるんだよ!!!今!!!俺がスーツに着替えてヒーローとなろう!!!」
「ふっ何を言い出すかと思えば。」
… ダメか?
「そうだなぁ?まだ奥の手があるというのならそれすらもひねり潰してこそ俺は完全な勝利を完璧は絶望を与える事が出来る。いいぜ、変身して見せろよ」
「アシナ?あんた何するつもりよ…」
タツマキさんに座ってもらい俺も座る。俺は蝙蝠を鞘ごと腰から外しタツマキさんと俺の間に置く
タツマキさん… 今から俺が言う事を復唱してください。」
「はぁ?… わかったやるわよ。」
感謝しかない… 継承は住んでる。後は契約のみだ
「私タツマキは。」
「私タツマキは…」
「現主アシナから」
「現主アシナから」
「蝙蝠を相続することを認め。」
「蝙蝠を相続することを認め… ってちょっ…」

タツマキさんに人差し指を立てて黙って貰う…
「蝙蝠の主となる」
「こっ蝙蝠の… 主となる…」
「ありがとう… ございます。では今までありがとうございました」
「蝙蝠。起きれる?」
「ある… アシナ… 殿!!!!行けませぬ!!?貴方の行動はただの自己犠牲ではありませぬ!!死ぬおつもりですか!!?!?」
「蝙蝠… 今までありがとう。最後の主としての命令だよ?……… 止まれそして黙れ。」

「… ッ!?!?!?ッ!!ッ!!」
ごめんね… こんなこと…

さぁ始めよう。

「待たせたねガロウ。」

「んあ!?終わったか?」
「変身は今からだよ。」
怨門を構えて首に当てる。そのまま首を掻き切るそこで完全に俺の意識は途絶える。ただ、ガロウと言う存在を討ち滅ぼすと言う思いを託して。

救済と光

タツマキｓｉｄｅ

「タァツゥマァキィ!!!!何故主からの継承を受け入れた!!!我は貴様の様な下等を主とは決して認めぬ!!!」

随分な言われようね。

「そんなこと言われったって知らないわよ私だってなすがまま、それこそ言われるがままの状態たったのだから。で・・・ アシナの考えってなによ、あんたなら分かるでしょ。さっきから倒れた状態から起き上がらないんだけど・・・」

ビクンッ!!!

アシナの体が大きく跳ねる。

びちゃびちゃグチャ　バシャア　ドロォ　ゴギギ　メキベゴォ

アシナの体が変異していき辺りに血液が飛び散る。その血液がアシナを囲い形を作る。

「始まった・・・ 始まってしまった・・・」

「ねぇ残念侍・・・ なによ・・・ あれ！」

アシナがおぞましい物に姿を変えていく。その様は黒く黒くまた黒く、足は4足で尻尾は8本目は無く、口は人の耳辺りまで避けている、口から除く牙は鋭利で爪もまた鋭利である。頭頂部に生えた耳は愛らしさの欠片もなく生物的嫌悪しか湧かない造形である。

「奴は・・・ 獣・・・ 怪人でも、ましてや人ですら無い、己が欲のままに生きる悪意の獣た・・・」

これ以上見たくは無かった。自らの友人が・・・ 信頼し・・・ 背中を預け。協力しあった者が異形の化け物にかわる様が。今まで通りアシナの声がひょいっとした感じで聞こえて来ることを祈るしかな

い・・

「現実を受け入れろタツマキよ、あれは既に主では無い・・・ 主は・・・奴を倒すためだけに自らの・・・ 自らの怪人を解き放った、それは酷く・・・ 残酷な物だ。」

『ＫＲＯＯＡＡＡＡＡＡ!!!!!』

元の形が人から出てるものとは思えない人ならざる叫び。それは既にアシナがそこには居ないことを裏ずけているように感じた・・・感じてしまった。

「それはヒーローって言うより怪人のがちッ!?」

バズゴォン!!!

ガロウが話終わるより先にアシナだった者が尻尾ではじき飛ばす。

「ギャギギギギギア゛ア゛ア゛ア゛アッア!!!」

きっとあれは笑って居るのだろう、手を叩き口をあんぐりと開けて声を張る。聞いてるだけで気が狂いそうだ。

「野郎ッ!ぶっつぶッ!!!」

ガロウが一方的に殴られなぶられ遊ばれる

「クソがッ怪害神殺・・」

「ううういあんあいえん 」

８本の尾から繰り出される無差別な破壊、それはガロウの拳をひとつずつ丁寧に受け止め弾きさらに大きな力で跳ね返す。

「キッキキィアッガァｋｋｋｋｉｉｋｉｋｉあっあぁア゛ア゛ア゛ア゛ア゛」

いちいち叫ばなきゃやってらなれないのだろうか、叫ぶ度に耳を抑えなければならない。

弾かれ砕かれ貫かれ、ボロボロにされながらもなお立ち上がるガロウ。それに比べアシナだった物は以前無傷。それどころか余力が有り余っている。本気すら見えない。その様は新しい人形を手に入れた子供のようにすら見えた。

「何だよお前!なんなんだよお前!こんな事ならあの時殺しておけば・・・ ッ!?」

「おえはあえあ?ケケッキューキキクッアアッ」

また来る・・・　耳を塞ぐ
「あっあっ・・・　ア゛」
「うぅ・・・」
　長いすごく長い、しかしその声は悲しく泣いてるようにも聞こえた。
　ガロウが殴り掛かるが相変わらず流され反撃を食らって居る・・・かと言って殴らず守りに徹すれば重たい一撃が尻尾や腕はたまた足からも繰り出される。ガロウの攻撃手段の合計が４本だとしたらアシナだった者は１２本に及ぶ・・・　その差は３倍普通に見ても勝ち目なんてないだろう。
　なんなんだ？この悪夢は夢ならばはやく覚めてくれと願うばかりだ。
　蝙蝠ｓｉｄｅ
　主が獣化した・・・　尾は八本最悪刺し違えてでも殺る。いや我の実力ではあれを止めることは不可能だ・・・　そうだ！高エネルギーの奴ならば主の暴走を止めることとも。
　奴は何処にいる・・・　そこか！
「やっと出れたぜ。あの野郎・・・　注文が多いっての・・・　ん？」
「貴公に・・・　折り入って・・・　頼みがある！」
「ん？なんだ言ってみろ」
「主の・・・　アシナ殿の暴走を止めてくだされ！！」
　地面に頭を付けて誠心誠意頼み込む
「貴公だけだもう・・・　あれを止めれるのは・・・　貴公だけなのだ！！我では力も無く主の愚行を止める事も出来なんだ！！主は馬鹿だった！最後まで自らで片付けようと・・・　我が・・・　我等が不甲斐ないばかりに

！すぎた力を解放し!!今！暴れて居られる。頼む!!!主を倒すのに…
協力して下され…」
「……」
ダメか…
「貴公が望むならなんだって…「分かった協力するよ」へ？」
「だから協力するって。お前アシナの相棒だろ？アシナがピンチなんだろ？そんでアシナ以上に強いお前がアシナを守りたいけど力が足りないだから自分より強いものに主の為に助けを乞う、自らのプライドを投げ打ってまで。すげぇよお前、プライドとか高そうなお前が他人のためにそこまで出来るなんて… アシナの事本当に大切に思ってんだな。後俺は一応ヒーローだからな人の頼みは聞かなきゃって奴だ。」
あぁこの人というのはなんと… 暖かい… とても。少しだけ救われた気がする。暗闇からたった一つの光が見えた。… 主… 安全に解釈してやれそうです。
「感謝する… このご恩は忘れませぬ!!」
「んじゃっ行こうぜ。」

「不甲斐ないことですが我は傷が深く… 戦力には… 回復したら向かいまする。」
「ん？分かったんじゃあ先行ってるわ。」
彼の者は黄色い服にマントをはためかせて威風堂々とし歩いて行った。
正義　執行

闘争そして説得

タツマキｓｉｄｅ

フラッシュが出てきて怪物とガロウに着いてあれよあれよ聞かれた。適当に流したから不服に思っているのだろう、だがきっと説明した所で奴がこの問題をどうにか出来るなどと微塵も思っていない。

化け物達に視線をやる。ガロウは依然ボロクソに弄ばれてる、猫がネズミにトドメを指すのを躊躇う様に・・・ 蟻が獲物をじわじわと殺す様に・・・ もうガロウは満身創痍状態だ、なのにも関わらず・・・ いやだからこそ奴は力を緩め、起き上がれば倒し向かって来るなら殴り、止まっているなら痛打を加える。それは見ていて酷く残酷な物だ。

後ろから足音が聞こえる、気になって後ろを向いてみる。

禿げてなにも生えていない頭、ダサい黄色い衣装に赤いゴム手袋に赤い長靴、覇気のない顔。どれをとっても頼りにならないような人物だが・・・ 彼が横切り見えた背中はとても自信に満ちており堂々としていた。

「おい・・・ アシナ」

止めなきゃ！あいつが勝ってこない！

「ちょっあんたっ・・・ 何して！」

「キュギィ？キッキ・・・ ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛!!!」

ぎっ・・・ うるさ・・・

耳を塞がずに直に食らってしまった・・・ 頭が・・・ 割れる！

「お前・・・ うるせぇよ」

バスゴン!!!

なんの訳ないチョップだった自然な流れの違和感など無い、しかしそのチョップの威力はあの化け物をうつ伏せの大の字にしてしまい地面にめり込ませるレベルの威力だった。頭がおかしい、いや威力がおかしい。

「ぎっ・・・ ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛!!!」

ズガガガガガ!!!バズンバァン

化け物の猛攻がハゲを遅いすごい勢いでハゲ頭が揺れる。

「お前・・・ どうしちまったんだ？酒でも飲んで酔ったか？1発殴れば正気に戻るか？」
　私は思考を放棄してガロウを超能力で回収する。ガロウの見た目は完全に変質しておりもはや人の原型は持ち合わせていない。それにしても酷い様子だ外殻は破れ肉体が直に抉られ傷口は変色している、これは・・・ 毒？ガロウの再生と毒の侵食が並行して侵食が勝っている様子だ・・・ ぐじゅぐじゅと嫌な音が絶え間なく発せられ続けている。私はアシナから借りていた回復する刀を迷いなく使いガロウを回復しようとする。
「何をしている・・・」
「治療よ」
「何故だ」
「私が殺すのよ・・・ アシナを返せって殴るのよ・・・」
「あの化け物は首切りか？」
「一緒にしないで！あんなの・・・ あんなのアシナじゃないわよ・・・」
　涙が出てくる、あれをアシナだと思いたく無かった。アシナは必要以上の暴力を好まない・・・ 必ず一撃でその一振で倒す。常に全力の一太刀件の方はと言うと。
「ゲギャアァ゛アァ゛アァ゛アァ゛!!オークックックッオァァァァ゛アァ゛アァ゛アァ゛」
「うぜぇ！うるせぇ！当たらねぇ!!!」
　ハゲの拳をいなして殴っているが・・・ あいつはどういう防御力をしているのか一向に響かないし傷1つ無い。
「流石サイタマだな・・・ 俺も加勢に・・・」
「あんたじゃ2秒で死ぬわよ・・・」
「小娘！無事か!?グッ・・・ ハァハァハァ何とか奴に高エネルギー体をぶつける事が出来たようだな」
　目を腫らして、汗だくで、額に土を付けながら残念侍が鬼気迫る表情で戻ってくる。
「あんた・・・ 泣いてたの？」
「ふんっ・・・ 少しな。」

「プッ弱いわね…」
私も人のこと言えないけど。
バゴン!!!
!!
大きな音がした… どうやら漸く1発当たったらしい。怪物が顔の形を変えながら大きく吹き飛ぶ様はまるで漫画のようであった。
「はぁぜぇはぁ… ゴホン!目ェ覚めたか?アシナ?ほら帰るぞ、酒奢ってやるから…」
「ギッギギ… ピィ!?」
ずっと弧を描いていた化け物の口がへの字に曲がる…
「貴公!!!逃がしてはならぬ!!!」
「あ?」
化け物から膜のないように見える翼が生え、羽ばたき始める。
「アシナ殿!待って下さ… グッ傷が!」
化け物は残念侍の言葉を無視して飛びさり空に消えていく。
「タツマキ!奴を止めろ!今すぐだァ!」
「無理よ… もう念動力は使えない。」
「グッ… 致し方無しか。」
残念侍は立ち上がりどこかに行こうとする。
何考えてるのかしら?バカかしら?
「待ちなさい、そんな傷であいつに勝てるとでも。」
「勝たなくとも刺し違える事ぐらいは!」
「無理よ… 少し落ち着きなさい… ガロウにすらボロボロに破れたアンタがそのガロウを弄んでた奴に太刀打ち出来るわけが無いでしょ?」
「… 済まない、取り乱した。」
「今は休むことよ… それと私も行くから。」
「貴様では戦力外だ」
「超能力者の厄介さは知ってるでしょ?一瞬止まることがどれだけの一撃を畳み込めるかも… アンタが身をもって体験した事じゃない。」
「… 足は引っ張るな… それだけだ。」

頑固なやつね。
「俺も行かせてもらうぜ。」
ハゲも着いて来るらしい。
「それは心強い！是非ともお願いしたいところです！」
「では夜明けに…」
「グッ… 何が… 起きた？」
どうやらガロウが目を覚ましたらしい。こいつのせいで… こいつのせいで… ！アシナは!!!
パァン!!!
気づいた時には既にガロウを殴っていた。
この手はヒーロー戦慄のタツマキとしての攻撃ではない、1人の人間としての私情を挟んだ攻撃である。
「アンタのせいで… めちゃくちゃよ！何が怪人よ！何が次のステップよ！アンタは何がしたかったのよ！」
「勝手に暴走したのはあっちだろうが!!!俺はなぁ!!必要悪なんだよ!!人類が求めるのは正義ではなくて悪なんだよ!!!今人類は結託する時なんだよ!!!そうすれば下らないことする奴はいなくなる!!皆生きることだけに必死になる!!!ヒーローなんて言う不平等な善よりも平等な悪こそがこの世界に必要なんだよ!!!」
「なぁすこし良いか？お前本当はヒーローになりたかったんだろ？」
「はぁ？俺の話し… 聞いてたのか!?お前どうやらあいつを追っ払ったみたいだけどなぁ!!!お前もヒーローだろ!?お前はなんの為にヒーローをしている!!答えろよ!!!なぁ!!!」
しばしの沈黙が流れハゲは首をひねりあまつさえ鼻をほじり始めた。全く汚いわね
「趣味？」
「しゅっしゅしゅっ趣味… だと？……… ふざけるな!!!おま…お前… おまっおまおまおま!!!お前俺の俺の話を聞いた上でよくそんな冗談を!!!… ッ!?お前!!!あの時の公園の!!!」
「あ？公園？なんだそれ覚えてねぇぞ？人違いじゃね？」
「お前は最近命を奪いかけたものの名前も覚えていないのか!!?おかし

いお前は何かが可笑しい!!そのレベルの強さに至るまでに明らかに何かが欠如してしまっている!!」
　何たるずぼらさなのだ。このハゲは・・・
「もういいもういい!長ぇよお前の話めんどくせぇ。」
「何なのだなんだと言うのは貴様は!!!貴様はヒーローとは言えない!!貴様はヒーローなんかではない!!!」
　確かにこいつはヒーローの精魂を持ち合わせている様には見えない。しかしこいつは蝙蝠の頼みを聞きあの化け物に単騎で挑み撃退すると言う結果を納めた。その強さと弱き者の頼みを無償で聞き前へと出る様はヒーローと呼べるものでは無いか?
「うるせぇ!!!!趣味だ!!馬鹿野郎!!」
　バズん!!
　ガロウの変形していた頭が割れて中からガロウの人の頭が除き、衝撃でへなへなとその場に座り込む。
「お前なんて・・・ お前なんてヒーローじゃ・・・ お前なんて・・・」
　うわ言のようにヒーローがヒーローだなんだと呟く・・・ そろそろイライラしてきたわね・・・
「なんだ・・・ お前自分の中に立派なヒーロー像があるじゃねぇか・・・やっぱり本当はヒーローになりたかったんじゃねぇか、お前は妥協して怪人を目指したんだ。世界を平和にするには怪人のがヒーローより手っ取り早いってのを逃げ場にして・・・ な?怪人の役割はヒーローを倒すことだけだもんな?自信の無いお前にピッタリだ。」
「・・・・・・・」
「でもそれじゃ俺には絶対に勝てない。」
　ガロウにはその言葉は重くのしかかった事だろう、目付きが死んでゆく。
「恐怖で世界を支配して平和を作る・・・ それは俺を倒さない限り達成は出来ない、それはお前には絶対に無理な事だ。なぜなら・・・ お前の怪人は妥協の趣味!!!俺のヒーローは本気の趣味だ!!!それだけでも負ける気がしねぇ!!!目指す前からハードルを下げたのが間違えだったんだ、半端な目標なら尚更達成なんてデッキ来ない。絶対悪はもう実

現しない・・・ だったら次だ!!」
「次は・・・」
ガロウがボソリと言葉を落とす。
ガロウの外殻がボロボロと剥がれて行き完全に中身が見えた。その顔は悲壮に満ちており、もはや先程の覇気など微塵も感じない。
「次はどうすればいいんだよ・・・」
「お前・・・ 見た目変わってたからわかんなかったわ。無銭飲食の奴か・・・ いや金払ったら好きにすりゃいいじゃねぇか?」
「お前に勝てない時点で俺の生きる意味は終わったんだよ・・・ もう・・・ 無理だ・・・」
もう限界だ。
私の足はその時勝手に動いて居た。頭に血が上っていたのか無償に腹が立ったのかは後で考えても分からないだろう・・・ タダ目的を持ってやつの元へ向かったのは確か。
「おい小娘・・・ 何をする気だ?」
「何が生きる意味もないだよ厨二病の拗らせ野郎が!!!」
ボスン
全力の助走の付けた情けない拳がやつの顔面に入る。
奴の胸ぐらを掴み上げ感情のままに怒鳴り散らす。
「ふざけんじゃないわよ!!!雑魚が!!!アシナをあんなにしておいて生きる意味がないだぁ!?死ぬなら勝手に死ね!でもアシナをあのままにして死ぬな!!落とし前ぐらいつけなさいよ!!馬鹿!!阿呆!!間抜け!!あんたは憎たらしいレベルで強いわよ!!だから手伝いなさい!!今生きる意味をあんたにやったわよ!!ほら!立ちなさい!!立て!!ガロウウゥ!!」
ガロウが向くりと立ち上がる。
「小娘!」
血流技『血潮』
私の周りに血の壁が出現して攻撃から守る。
「うるせぇよ・・・ さっきも行ったがあいつが勝手に暴走して勝手に逃げた・・・ 俺には微塵も関係ねぇ・・・ そうだなぁ?お前が頭下げて頼

むんだってなら…」
「頼むわ。それぐらいで着いてきてくれるならいくらだって下げてあげるわ。死人はなるべく出したくないのよ… あれに太刀打ちできるのはそこのハゲだけ… でもそのハゲだって攻撃1発当てるのに精一杯だったでしょ？囮でも数が居るのよ… 必要最低限だけでもあれと戦える数が… 私は完全に回復すれば奴の制止ぐらいならできる、そこの侍は毒に侵されて無ければめちゃくちゃ強い。ハゲは言わずもがなよ。あんたはそこの侍を倒してアシナと私の全力を一身に受けても尚ピンピンしていた… その力が必要なのよ… お願い… 手を貸して。」
「おいガロウと言ったか… プライドの高い小娘がここまで頼み込んでるんだ… 我としても貴様レベルの戦力ならぜひ欲しいと思っている… ダメか？」
「やったじゃねぇかお前。ヒーロー目指せるぞ？」
「いや目指さねぇよ、俺はヒーローなんてならねぇ。何になるかは追追決める。取り敢えず分かった… 頼んでねぇが、回復してもらったみたいだしな。恩もある… その恩を返して… 何をするか決める。いいな？」
今はそれで良い… アシナ… 今… 助けるから。
遥か遠くから聞こえるはずもない叫びが聞こえた気がした。

各々

蝙蝠ｓｉｄｅ

話は纏まった・・・ 後は1日猶予を置いて奴を追うとする・・・

カツン・・・ カツン・・・

誰かが近づいてくる。あいつは確か・・・ シルバーファングと行ったか？

「ジジイ」

「ガロウ・・・ 昨日ぶりじゃな・・・ 大分変わったみたいだが・・・ ほれ、少し喧嘩でもせんか？」

「あ？」

「サシで殴りあおうというのじゃよ。今のお前なら本気でやらねば辛いかもしれんが・・・ 拳で語り合うのが1番早いじゃろ？」

「何言って・・・ ブッ!?」

シルバーファングの無骨な殴打、技では無く力の一撃。

「こんの！馬鹿弟子が!!力の使い道を違えよって！」

「俺の！気持ちなんて！何も知らないで！」

ガロウの・・・ 怪人としての拳ではなく人間としての拳が強く・・・ 強くシルバーファングを襲う。

「お前の話！全部聞こえておったぞ!!世界平和だと!?泣き虫で弱かったお前がよく言うわい！」

「黙れジジイ！俺が1番たすけて欲しい時に！説教しかしてこなかった癖に保護者面かよ！いい気になんなよ！」

「お前の強がり方がうますぎて老体には気づかなかったわ！すまんかったなぁ！全力で謝らしてもらうわい！」

「殴りながら言うかよ普通！ブッ!?」

本音と本音の殴り合い。その様は親子の様にも見えた・・・ そんなものが数十分間ほど続き我は小娘とサイタマ殿に計画の程を話しておいた。サイタマ殿は長いから3行でまとめろと言う無茶を言ってきたから唯我に着いて来ればいいと伝えて置いた・・・

「ゼェハァ・・・ 気が済んだか？ジジイ・・・ 俺は気が済んだぞ。たくっ

覇気のねぇ拳だぜ…　もっとスマートに出来ねぇのかよ…」
「老いぼれにはこれぐらいしか方法が分からぬ…　お主はやはり優しいやつじゃった…　気づいてやれんですまんかった。」
「今更遅せぇよクソジジイが…」
「シルバーファング!!何をしているトドメをさせ！」
「俺もアマイマスクに賛同だな…　生かしておくメリットがない…」
　なんだコイツらは…　あぁ気を失ってた有象無象の雑魚どもが起き出したのか…　戦力にすらならん存在理由の無い雑種…　どうでもいいな…　しかしガロウと言う特大戦力を害するなら容赦はせんぞ？
「生かしておくメリットならあるぞ？」
「君はなんだい？部外者は黙って…」
「今この場において部外者は貴様らだ劣等ども黙って口を閉じろ雑魚。」
　全く…　目障りな奴らだ。
「なんだと？僕が誰だか知っての…」
　少し分からしてやろう。
　タツマキｓｉｄｅ
　アシナがいないから蝙蝠を止める奴が居ないわね私は止める気ないから止めないけど。
「ちょっとハゲあんた止めて来なさいよ。」
「なんで俺が…　あっ…　俺ジェノス探してくるわ。」
　ハゲはどこかに駆けて行ってこの修羅場に私のみが残された。
「タツマキちゃん…　アシナさんの姿が見えないけど…　後ガロウはなんでシルバーファングさんと殴りあってるの？状況説明お願いできる？」
「あぁ…　童帝ね…　あんた達が気を失う前に全力をガロウにぶつけたでしょ？それが一切あいつに聞かなかったのよ…　そんでアシナがあいつを倒すために化け物になったのよ…　それからアシナを救うのに戦力が必要なの、だからガロウを生かして置いてるんだけど…」

「その化け物の強さは？」
「ガロウを赤子同然に弄ぶことの出来る強さよ」
「やっやばいじゃないか!?それを取り逃したんだろ!?でも・・・ 中身はアシナさんなんだろ？だったら・・・」
「だから少数精鋭で助けに行くのよ。あそこのハゲと残念侍、ガロウ・・・ 今の所この４人ね・・・ シルバーファング辺りなら連れてってもいいかも・・・」
「僕も行っては・・・」
「死ぬわよ・・・ 確実に戦力外、蝙蝠の話によると狡猾らしいから良くて人質悪くて真っ先に狙われて即死ね。私だって怪しいんだから・・・」
「なら！カメラだけでも飛して！周辺警戒とか・・・」
　力になりたいのは同じね・・・
「好きにしなさい・・・ それより目の前のあれを何とかしなきゃ・・・ アマイマスクの命が危ないわよ・・・」
　他のＳ級たちも続々と起き出す。
「全て終わったのなら俺は帰らせてもらう・・・」
「あぁフラッシュあんたまだいたのね・・・」
「首切りがどうなろうと俺にはどうでもいい事だ・・・ ではな」
　まぁ・・・ 交流の無いあいつにはそうよね。
「俺は・・・ やはり・・・ ダメだ怖い・・・ 首切り君があんなのになってまでガロウを止めようとした・・・ 今度は彼が敵になってしまった・・・ あんな戦いに着いていけっこない・・・ 辞めよう・・・ ヒーローなんて・・・」
　クロビカリはボソボソ言いながら帰路に着いて行った。
「やはり貴様は雑魚だな。声をあげるだけ・・・ 力は無い・・・ 自らを過大評価しているエゴの塊・・・ 現に負傷し毒に侵され心身ともにボロボロの我に一太刀も入れる事が出来ない・・・ もう無駄だって聞こえて居らぬか。」
　あいつッ!?アマイマスクの事をボコしたわね!?
「ちょっと!?あんたっ!?加減ってものを！ 」

「知らん。それより体を休めておけ…　また日が沈み夜が明けた時に指定した場所に集合だ…　わかったな？」
ザッ
そういい残してあいつは去っていった。問題児しか居ないのかしら？全く。
「僕も…　帰ります。カメラの準備とかありますし…　では…」
「俺ももう帰るとするか…」
ガロウ達は…　ガキと話しているな…　逃げる様子はなさそうだ…　私も帰るとしよう…
「俺の家がァァァァァ!?!?」
知らない…　そんなものは知らない。

高揚

蝙蝠ｓｉｄｅ

昨晩は取り敢えず寝て回復する事に務めた。アシナ殿が心配だ、先程から貧乏揺すりが止まらない。待ち合わせた公園に予定より早く着いてしまったからか誰も来る気配がない。

「あら・・・ あんた、早いわね」

小娘が空から声をかけながら降りてきて、隣に腰掛ける。

「小娘か・・・ 自らの主が心配なのだ・・・ いっそ1人で行ってしまいたいものだよ・・・」

「でも私たちじゃ太刀打ちすら難しい・・・」

小娘の言うことに何も言えない。実際その通りだ・・・ 昨晩まで8本ではあったものの今何本まで増えてしまっているかなど・・・ 検討もつかない。

「全く・・・ ため息しかでてこぬ」

「そうね・・・」

指定した時間まではもうしばし待たねばならない。

その間も膨れる不安を拭うことなど出来なかった。

暫くして集合時間になり皆集まりだした。

来たものは、サイタマ殿、サイボーグ、小娘、ガロウ、バング、人型ロボットの4名である。我も合わせて5人か・・・ まぁこれぐらいでいいだろう。

「話は無しだ・・・ 行くぞ。」

皆それぞれ頷き我の後に続く。

「おいお前首切りがどこにいるのか分かってんのか?」

ガロウが問い詰めて来る。

「案ずるな分かっておる。」

暫く歩くと森に辿り着く、何の変哲もないただの森。

「この奥で獣は眠っておるはずだ・・・ 気を引き締めて行け。」

森の中を暫く進むと赤い糸と泥がそこら中に撒き散らされた状態が伺える。やつが巣を展開しており侵入者を足止めするものである

という事を理解するのに時間はかからなかった。
「どわっ!?なんだこれ?ネチョネチョしやがる!?」
「先生、大丈夫ですか!」
　サイボーグが子気味いい音を立てて赤いドロを燃やす。
「にしてもマジで気持ちわりぃなこれ、歩き辛ぇにも程があるぜ。」
「ふむ…誠異形な技であるな…アシナ君の技とは思えん。」
　しかしこれもアシナ殿の技だ。
『アァァァアァァァァァァァァァ!!!!』
　起きたか
「来るわよ…あんた達気を引き締めなさい。」
　それぞれがそれぞれの構えをとる
　バギん!
　最初にやられたのは人型ロボットであった気づいた時には既に足だけとなっていた。
　カサカサカサカサ…シュバババババ
　獣は木を利用しながらあっちへこっちへ飛び回る、そして飛び回る事に速さが増していく。奴の狩りが始まった。
「ちっ目で追えねぇ!」
「馬鹿者!目で追おうとするから見えぬのじゃ!感じるのじゃよ…ホレッ!」
　バングが疾走中の獣に足蹴を喰らわせようとしたが獣は手で交わして回転しながら木にしがみつく。
　やはり尾が10本に増えている、一筋縄では行かぬか。
「ケキャキャキャ?ウキャ?ッ…」
「ア゛ア゛ア゛ア゛!!!アッ?」
「マシンガンブロー!!!」
「耳を塞げ!」
　ガガガゴン!
　サイボーグがバインドボイスが効かないのを利用して獣に拳を叩き込むが全て止められ流されて反撃を喰らい後方に吹き飛ばされる。
「ジェノス!?」

サイボーグは後方の木に衝突して再び立ち上がろうとした所を１０本の尾と２本の腕から繰り出される連撃で再起不能に追いやられる。
「少しだけ止めて上げる！」
小娘が超能力で獣の行動を制限する。
「ゲキョォ？」
バングとガロウが獣に向かっていきそれぞれ構えを取る
「合わせろよジジイ！・・・ コォォォォォ」
「ふっ・・・ ワシを誰だとおもっちょる。コォォォォォ」
「怪害神殺拳!!!」
「流水岩砕拳!!!」
「キ？」
恐ろしい猛撃が獣を襲うがその全てを尻尾で力を流されている。
「ガロウ！グゥ押されかけておるぞ！」
「こっちは攻撃が４本相手は１０本だぞ！無理がある！」
「キキキ・・・ ううういあんあいえん!!」
ズババ！ズンベゴォドゴォベギィ
バングやガロウの拳を掻い潜り重たい一撃を何発も２人に打ち込む。
「火炎血流!!!」
ズバッ!!
「血流技『龍這い！』」
この間主が見せた泣き声の血液バージョンを打つ。威力は上場であるが些か厳しい物がある。
「・・・ し・・・ ね」
バズォン
「グッ・・・ ゴフゥ」
木に叩きつけられ血を吐き出す。
「なんで・・・ 止めてるのに・・・ 動けるのよ!!!ギギギギギァ！」
小娘が歯を軋ませながら獣を止めようとしているが本体のみ静止しているだけで尻尾はバンバン動いている。

サイタマ殿が間合いを詰めて目にも止まらぬ速さで殴り掛かる。
連続普通のパンチ
しかしその全てを獣に流されている。
「あっちょっ・・・ まっ！」
小娘が前のめりつんのめりそれと同時に獣が動きだす。
「ギッ！」
バズン!!!ベゴォ
サイタマ殿の後頭部に尻尾での空中回転打ちが入る。地面にクレーターが出来上がりサイタマ殿が沈み込む
「いってぇっ・・・ ？」
サイタマｓｉｄｅ
化け物になったアシナに殴られて痛みを感じた。久しく感じなかった痛みを・・・ 血は出ていないものの俺が痛みを感じたのだ。
口角が少し上がるのを感じた。
俺は今笑っている・・・ 久しく忘れていた戦いの高揚感・・・ そして自らがまともに・・・ 本気で戦える可能性のある生物。やべぇ・・・ ワクワクが止まんねぇ。
「ウゥゥゥゥ・・・ グルルルルルガルルルルル」
土から飛び出てアシナと対峙する、そのままアシナと一緒に横に掛ける。
無骨なラッシュ、それは全てに置いていなされ逆にカウンターを貰う、やはり少し痛い。
殴ってもいなされ殴られる。偶に当たるラッキーパンチでも相手は引かないし向かってくる。
後ろ向きに歩いて様子を伺う。そこにすかさずラッシュを当ててくるから腕をクロスさせて防いで行く
普通の頭突き
「ンギィ!?!?!」
尻尾で受けられたが不意打ちには成功した。そのまま相手に極限まで近づく。
「必殺マジシリーズ『マジ蹴り』!!」

足を振りかぶってアシナを全力で蹴りぬく。
「ギャギャギィ!?!?」
バズォォォォ!!!!!
アシナ諸共辺りの木が吹き飛び遠くの方の山まで抉れている。
しまった・・・ 殺しち待ったか?久しぶりにまともにやりあえたからマジシリーズ出しちゃった・・
「ギャギィオォォォォ!!!!!」
ズドン!!!
まだ終わってなんて無かった。

目には目を歯には歯を

蝙蝠ｓｉｄｅ

木に叩きつけられ頭がチカチカする・・・ しかしなんだ、毒を叩き込まれなかっただけ不幸中の幸いと言えよう。回復も問題なく順調に進んでいる、立つことが出来るようになるまで時間の問題だ。

「ちょっとあんた大丈夫なの!?もしもーし!」

小娘か・・・ こやつは無事そうだな。

「大丈夫に見えるか?骨をへし折られ粉にされた再生まで時間がかかる・・・ 貴様も確か慈愛刀を携帯していただろう・・・ それでガロウ達の手当をしてやれ、我よりかはマシだろうが相当無残なことになってるだろう。」

「えぇ白目ひん剥いて地面に倒れてるわ。」

小娘に慈愛の刃を刺してもらって治癒の速度を倍にする。白目を向いて倒れてるか・・・ まぁ一瞬で数えきれない程の攻撃をその身に浴びればそうなるな・・・ ガロウは怪人だから再生は容易いだろうがバングの方は・・・

「おぉーよく寝たわい」

無事そうだな・・・ 耐久化け物か?

「おぉ無事であったかタツマキ!」

「あんたも無事で何よりよシルバーファング。」

骨を元通りにするだけだから対して時間はかからなかった。もう立てる。

「他の奴の回収に出かけるぞ。獣はサイタマ殿に取り敢えず任せるとすれば良い。」

直後物凄い轟音と共に真横の森林が山と共に消滅した。

「何!これ!あの化け物の攻撃なの!?」

いや・・・ 獣はこの威力の攻撃は備えて居ない筈だ・・・ しからばこれは・・・

「サイタマ殿・・・ だな」

「じゃろうな」

「はぁ!?あのハゲが!これを!?うっそでしょ!?」
小娘が大口開けて我とバングそして消えた森を交互に見ている。笑えてくるな。
「それより他の奴らの回復が先決だ。急ぐぞ」
未だに信じられないと言った表情でその場に静止している小娘を引きずりながら他の奴らの回収を急いだ。
サイタマｓｉｄｅ
アシナがいなし続けるが見るからに辛そうな口をしており、への字に曲げて俺の攻撃を捌き続ける。そんなアシナに一瞬の隙が生じて俺の拳が腹に直に入る。
「グボォ・・・ ゲェゲボォ、ゲッゲッ、オッオゲェェェ」
黒い血のようなどろりとした液体をその場に吐き続け悶絶する。
「アシナ・・・ もう限界だろ?ほら楽しかったから・・・ 今日はもう帰って飯でも食おうぜ?な?」
「ギッギギ・・・ ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛!!・・・ アッアッアァァ・・・」
アシナが力無く叫び、それでも尚俺の方へ向かってくる。しかし最初の方の勢いは既に無く俺の拳が面白いように当たる。
「お前・・・ もうボロボロじゃねぇか・・・ なんでそうまでして俺と戦おうとする?俺弱いものいじめは趣味じゃねぇんだよ・・・」
訴えても尚止まらないアシナにイライラしてくる。
「いい加減に・・・ しろ!!」
全力で振り抜いた全力の拳、マジ殴りとは似ているようで違う。意識を落とすための拳。アシナが一瞬止まりポカンとする。
「コスプレも殴り合いもやめだ!帰るぞ!」
「小娘!!今だもう一度やつを止めてくれ!!」
「えっええ!?わかったわよ!」
後ろから凄い勢いで侍が駆けてくる。
あっちょ・・・ 何して。
蝙蝠ｓｉｄｅ
ガロウや残念サイボーグの回収を済ませてサイタマ殿の方へ向か

う。獣は既に疲労困憊しており、叩くなら今しかないと思い小娘に静止を頼み、我は獣の方へ駆ける。
獣の液状の体の中へ手を突っ込みお目当ての物を探す。
ぐじゅぐじゅと嫌な音を立て獣は悶える。
主のが邪魔だったので抜け殻を小娘のの方へ放り投げる。
どこだ・・・ どこにある・・・
球体のような物を確認して思いっきり抜き取る。球体は刀の形を成して我が右手に収まり、それと同時に獣が拘束から抜け出して我を突き飛ばす。
「おっとぉ・・・ ナイスキャッチじゃろ?」
鬼サイボーグを紐で自らの体に括ったバングに受け止められる。
「済まないバング・・・ 感謝する。」
「カカカッ容易い御用よ!」
刀は怨門・・・ 我は主の半身・・・ 主に扱えるというのならば・・・
刀を抜き取り黒い刀身を顕現させる。右手は黒い炎を纏い体が怨門の炎に飲まれて主が怨門を抜いた時同様、狐の耳に猫の様な目にフサフサの黒しっぽに黒色の着物を纏う。
「怨嗟を飲み込み沈めることができるのは・・・ 怨嗟の器として作られたこやつのみ・・・ ならば力を借りよう、我が兄弟よ・・・」
獣と向き合い構え、介錯を開始する。

奇跡

蝙蝠ｓｉｄｅ

やつは既に虫の息・・・ 仕留めるのなら今しか無い・・・ 主の魂を解き。介錯する

「ちょっとあんた!!これ!アシナ!?えぇ!?」

「騒ぐな!それは抜け殻だ。主は未だあれに捕らわれたまま・・・」

「意味わかんない!」

分からない方が良いこともあるのだ。

「ギィギギギ」

目を瞑り、ゆっくりと開く。覚悟を決めた・・・ 主人を救う覚悟を。

「参る・・・」

「ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛!!!」

バインドボイスをものともせずに獣に切りかかるが、奴の尻尾にそらされてしまう。

「ギア!」

体制を素早く建て直して奴の連撃を刀で逸らし体制の崩れた所に1発ずつ叩き込む。

これが・・・ 怨門の力か。恐ろしい力だ

1発切っていく度に獣の力が徐々に弱まっていく。怨門は怨嗟の器・・・ 器の中に戻していけばやつは小さくなっていくものだ。元々サイタマ殿のお陰で尻尾の本数が激減していたのもあって我でも対象できるであろう6本まで減っている。

「諦めろ・・・ 年貢の収め時だ」

獣は呻き、歯をガチガチと震わせ威嚇する。

「ぎゃあああああァァァァァ!!」

両腕で掴みかかってきたので中に潜り込み口に突き刺しを入れる。

「あっあが・・・ ガァガ・・・ グッギャァ」

ズブズブと奥まで突き刺し後頭部から刀が突き出た状態になっている。そのまま負のエネルギーを吸収して沈めて行く。奴の腕が垂れたのを確認して刀を抜き取り追い討ちで胸に突き刺す。アシナ殿

の黒くなってしまった魂が刀によって押し出される。やはり侵食の具合が酷い…　だが…　主が助かるのであれば迷う必要などは無い。
　仕上げだ。右手で押し出した刀を持ち。左手で慈愛刀を顕現させる。
「獣よ…　御免！」
　慈愛刀を顎下から頭頂部にかけて貫き、怨門に力を込めて獣に馬乗りになり浄化する。
「アガァ!?ガッガッ…　イ…　ヤ…　ダ」
　手を立て合わせ刀を引き抜く。獣はその場で灰となりその姿を消滅させた。我は迫り出した魂を掴み、浄化しながらアシナ殿の抜け殻へと歩んだ。
　タツマキｓｉｄｅ
　何が起こったのか全然分からなかった。残念侍が物凄い勢いで打ち合いを始め金属同士が撃ち合う音が辺りに響く。てかアイツらよりアシナのことよ！
「起きなさい！アシナ！あんたどういうつもりよ！ちょっと！」
　返事など返って来ない。元々こいつに脈なんて無かったから生死の判別なんて意味をなさない…　私にできるのは、先日アシナが手の甲に描いてくれた線に祈ることぐらい…
「おい…　タツマキ屈んで泣いてる場合じゃねぇだろ！」
「泣いてなんか無いわよ!!!」
　泣いてなんか…　無い！
「このまま目を覚まさなかったら骨折り損のくたびれ儲けだぞ！何が方法を…　いって!?」
「よさんか…　ガロウ…」
　わかんないわよ…　アシナを助ける方法なんて!!分かったらとっくにやってるわよ！体に外傷は見られず綺麗なまんま…　一体どうすれば…
「どけ貴様ら、邪魔だ。」
　残念侍がアシナの元へと近寄りなにかをしている。
「やはり足りぬか…　主が助かるならこの身など惜しくはないが…

む?ッ!?小娘!その手をみせろ!!」
　残念侍が声を荒らげて私の腕を乱暴に掴みあげる。ものすごく痛い。
「ちょっ・・・ ヤメッ・・・ 痛いってば!!」
「すっ済まない。しかしでかしたぞ小娘!小娘がまだそれを使ってなかったとは!主は・・・ 主は助かるぞ!」
　それはとても有難い話だった。
　蝙蝠ｓｉｄｅ
　小娘がなんと!アシナ殿の召喚印を保有していた!それもアシナ殿自身の!アシナ殿の抜け殻の中に入れようとしてた魂を持ってくる。それは食い潰されており酷く弱っており今にも消えてしまいそうなほど小さい。本来は我が自害してその魂を主のと併合して元のひとつに戻り、主を甦らせる予定だった。しかし小娘は主の血を使っていなかった!その召喚印の血の量は主の魂を補填しうる思いを多く含んでいる!魂と血は密接な関係にある。血は記憶を持ち魂は思いを持つ、心は魂であり感情だ、だからアシナ殿が小娘を救いたい寄り添いってあげていたい、助けたい等の思いが詰まった召喚印なら!主を再び甦らせることができる!しかしこれは賭けだ・・・ 失敗した時など想像も付かん。
「小娘・・・ 召喚印を剥がす、こちらへ来い。」
「えっえぇ、分かったわ」
　小娘が我の横に座り手を差し出す。主の血を血流技で操作して剥がす。剥がした物を弱りかけた魂に吸わせる。
　魂は勢いを取り戻し、主の赤い綺麗な魂へと変貌した。しかしまだ足りない・・・ 後は我の力を少し分ければ・・・ !
　何とか・・・ 出来た・・・ 次は魂を器に戻す。
「アシナ殿!起きてくだされ!修行の時間ですぞ!!」
　返事は無い・・・ ダメか?
「んっくぅ・・・ 起きるから待って・・・ ッ!?わぁ!?」
　小娘が感極まったのかアシナ殿に抱きついた。
「アシナァ!!よかっだァァァ!!」

本当に本当に良かった。
「おう！アシナ起きたか！飯でも食いいこうぜ！」
「全く世話のかかった弟子じゃぞい！意思の弱さは課題のひとつじゃ！ガロウと共に鍛え直してやるわい！」
「はぁなんで俺がまだジジイの門下生扱いなんだよ！俺はなぁ!?」
「俺確か怪人協会と戦って… てかなんでガロウいるの!?えええ!?」
全く能天気な主人だな…

数日後

腰に２振りの刀を携えたヒーローが１人… Ｓ級６位の首切り彼は今日も街を駆け怪人を狩る。
彼は間違い… 過ち… 失敗する、そんな人間らしさを残したおかしな怪人。彼の終わらない戦いはこの先も続いて行くことだろう。
ＨａｐｐｙＥＮＤ（帰還）

決断

蝙蝠ｓｉｄｅ

怨門を構え獣と対峙する。奴はサイタマ殿のおかげで、だいぶ弱りかけており尾の本数が１０本から６本まで激減している。これぐらいなら怨門を抜いた我なら容易いだろう。

「ギッ・・・ ギュウ・・・」

獣の悲痛な呻きが耳に入る。貴様に罪は無い・・・ しかし切らねばならぬのだ・・・ すまぬな。

「参る。」

「ギャアアアア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛!!」

刀と爪がぶつかり甲高い音が響く。爪が我の喉を掻っ切ろうと襲う、それを弾き反撃の一打を飛ばすが奴も負けじと爪で刀を弾く。弾き、撃ち合い、お互いに１歩も譲らぬ攻防と化す。

６本でも獣は獣・・・ やはり手強い・・・。このまま撃ち合い続けてもジリ貧・・・ 何れこちらが敗れる。

「怨嗟「泣き声」!!」

この現状を打開するために少し距離を取り泣き声を打つ。

「グゲギッィィ!?」

効果的だった様で獣は大きく体制を崩し隙が生じる。奴の元へ移動し顎を蹴りあげ胴を開ける。その胴体に怨門を突き刺し奴のアシナ殿の魂を獣から押し出す。

「ゲッギィ!?」

奴は余力で刀を掴んできたが、魂という核が抜け落ち力が抜けて行くのだろう。次第に刀を抑える力が弱まっていく。我は添えていた左手を空けて、癒を顕現させる。

「獣よ・・・ 御免!」

癒を相手の下顎から頭頂部にかけて突き刺し奴の存在を浄化する。

「グッギギッグギ・・・ イ・・・ ヤ・・・ ダ」

奴の存在が塵となり霧散する。癒しを消し怨門を鞘に納め変身を解除する。獣がいた所で手を立て黙祷する。

黒く変色したアシナ殿の魂に治癒の浄化をかけながら抜け殻の元へと戻る。
抜け殻の元へと行くと小娘が半べそを書きながらうずくまっている。邪魔だからどいてもらうとしよう
「小娘。邪魔だ、どけ。」
小娘に何か言われて居るが全て無視し抜け殻に魂を置いて体の中に入れる。
遺書を書く時間もないな… 仕方ない血に思いをしるしておこう。血は記憶… アシナ殿が目を覚ました時にこれを渡してもらえれば気づいて貰えるだろう…
血を四角く固形化させて思いを載せる。
「バンク… 近場にいて1番冷静な貴様に渡す。これを… これをアシナ殿が目覚めた時にアシナ殿に渡して貰えぬか?」
「それは構わぬがお主何をする気じゃ… ジジイの世迷言になるが早まってはならぬぞ… 他にも道は…」
「ジジイ… それ以上はダメだ。あれは覚悟決めてるぜ止めるのは無粋って奴だよ。」
ガロウ… 感謝しよう。
「サイタマ殿… 無茶いって主を止めて下さってありがとうございました。また… 主とご飯でも食べてやってください…」
お礼は済ませた… 未練も無い始めよう
「おっ?おう。」
「小娘… 現主の貴様に頼む事がある」
「何よ… 何しようっての?」
我は我自身である蝙蝠を帯から鞘ごと抜き小娘に渡す。
「それでアシナ殿を貫いてやってくれ… 我は刀状態でやることがあるからな… それと… 迷惑を掛ける。」
「それでアシナが助かるのかしら?」
「あぁ確実にな…」
「わかったわ… やるわよ。」
感謝するぞ… 小娘…

我は抜け殻の蝙蝠の中へと戻り、それを確認した小娘が我を主に突き刺す。
我は主の体の中へ血に意識を乗せて潜り込み魂を探す。
見つけた・・・ 弱いながらも潰えぬように必死に光る健気な魂・・・
全く最後まで迷惑を掛けてくれたな?我は主の魂に入り込み、今1人の・・・ 元の1人のアシナへと戻った。
アシナｓｉｄｅ
なにか・・・ 暖かいものを感じる。とても暖かくて安心する・・・
久しぶりに心地いい心臓の音が聞こえる・・・ これは誰の音だろう?
「ア・・・ し・・・ な!ア・・・ ナ」
誰かの声が聞こえたから、ゆっくりと目を開ける。
「シナァ・・・ アシナァ!」
だんだんハッキリしていきそれは俺を読んでいた声だと認識した・・・
「アシナァァ!!ヤッタァ!!生き返った!!・・・ ちょっとまって?・・・ 生き返ったァ!?アシナの心臓が!?動いてる!?えぇ!?」
タツマキさんが信じられないと言った感じで声を張り上げている・・・ 俺も信じられなかった。試しに自らの胸に手を当てる。
ドクン・・・ ドクン
一定周期で脈打つ心臓の音が聞こえる。本当に生き返ってる?どうして?なんで?
バングさんが俺の肩は叩き右手を差し出してくる
「アシナ君・・・ 君の連れがこれを君にと・・・ ね」
バングさんから四角くて赤い石のような物を渡される。
それを手に乗せた瞬間どろりと溶けだし皮膚の中に入っていく。
言葉が脳に染み渡り、衝撃を受けた
《主・・・ これが聴けてるということは蘇生は成功したのだな?あー主には済まないがこれを聞いてる時・・・ 我は・・・ まぁなんとやらという状態だ・・・ まぁ気にはしないでくれ元々別々になったものが1つになっただけである。案ずる事など何も無い・・・ サイタマ殿にはお

礼を言っておく様に！絶対であるぞ？暴走した主を止めてくれたのは何を隠そうあの方だからな！後は小娘や他の協力者にも礼を行っておいてくれ・・・ 助かったと・・・ 特に小娘には迷惑を掛けた。影の功労者は間違いなく奴だろう。生活に着いてだが・・・ 我の力を全て譲渡したからヒーロー業については余っ程大丈夫だろう、安心して取り掛かって下され！しかし無理はダメですぞ？もう主は怪人では無く人間・・・ それを念頭において立ち回って下され！後怨門については偶に毒抜きをしてやらねば大変なことになってしまわれる！頼のみましたぞ？それと・・・ もうこれくらいだな？兎に角元気で過ごしてくれ・・・ それが我の・・・ 蝙蝠の最後の願いである・・・ ではな主よ・・・ 達者で過ごしてくれ給えよ。》

「アシナ？大丈夫？」

　大丈夫なわけない・・・ しかし皆の前で情けない姿を晒す訳には行かない・・・

「うん・・・ 大丈夫。ありがとう！皆ごめんね迷惑掛けちゃって」

「うーしそれじゃ明日にでも飯食いに行こうぜ！今日はもう疲れたから寝る！」

「先生！2日連続ホテルは金銭的に・・・」

「アシナ君も帰る家が無いじゃろうて・・・ 3人とも儂の家に止めちゃる・・・」

「済まないバング・・・ 俺はこのままクセーノ博士に回収して貰うから先生とアシナさんだけで・・・」

「アシナは家に来ればいいのよ！」

「皆には悪いけど・・・ 今日は1人でどこかに泊まるよ・・・ 今日の埋め合わせは後日するから・・・」

　そのまま僕は蝙蝠の抜け殻を鞘に収めてフラフラと森を歩いて。気づいたら街に着いており手頃なビジネスホテルの部屋を借りてベッドの上に腰掛け頭を抑えた。

「蝙蝠・・・ ごめん・・・ ごめんよ・・・ 俺が、俺が不甲斐ない・・・ ばかりに!!ウッグゥ・・・ エッエグゥ」

　暗い部屋の中今は無き相棒を思い、咽び泣く。

元々無かったそれが無くなった…　しかし無くなったそれは俺にとってかけがえのない存在だったのだ。戻りたくて止まなかった人と言う存在。１度開き直っても尚人でありたいと思っていた。そんな思いは最悪の結果の元に完遂された。

ＴＲＵＥａｎｄＢＡＤＥＮＤ

人返り

決断

蝙蝠ｓｉｄｅ

怨門を構え獣と対峙する。奴はサイタマ殿のおかげで、だいぶ弱りかけており尾の本数が１０本から６本まで激減している。これぐらいなら怨門を抜いた我なら容易いだろう。

「ギッ・・・ ギュウ・・・」

獣の悲痛な呻きが耳に入る。貴様に罪は無い・・・ しかし切らねばならぬのだ・・・ すまぬな。

「参る。」

「ギャアアアア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛!!」

刀と爪がぶつかり甲高い音が響く。爪が我の喉を掻っ切ろうと襲う、それを弾き反撃の一打を飛ばすが奴も負けじと爪で刀を弾く。弾き、撃ち合い、お互いに１歩も譲らぬ攻防と化す。

６本でも獣は獣・・・ やはり手強い・・・。このまま撃ち合い続けてもジリ貧・・・ 何れこちらが敗れる。

「怨嗟「泣き声」!!」

この現状を打開するために少し距離を取り泣き声を打つ。

「グゲギッィィ!?」

効果的だった様で獣は大きく体制を崩し隙が生じる。奴の元へ移動し顎を蹴りあげ胴を開ける。その胴体に怨門を突き刺し奴のアシナ殿の魂を獣から押し出す。

「ゲッギィ!?」

奴は余力で刀を掴んできたが、魂という核が抜け落ち力が抜けて行くのだろう。次第に刀を抑える力が弱まっていく。我は添えていた左手を空けて、癒を顕現させる。

「獣よ・・・ 御免!」

癒を相手の下顎から頭頂部にかけて突き刺し奴の存在を浄化する。

「グッギギッグギ・・・ イ・・・ ヤ・・・ ダ」

奴の存在が塵となり霧散する。癒しを消し怨門を鞘に納め変身を解除する。獣がいた所で手を立て黙祷する。

黒く変色したアシナ殿の魂に治癒の浄化をかけながら抜け殻の元へと戻る。
抜け殻の元へと行くと小娘が半べそを書きながらうずくまっている。邪魔だからどいてもらうとしよう
「小娘。邪魔だ、どけ。」
小娘に何か言われて居るが全て無視し抜け殻に魂を置いて体の中に入れる。
我は一通り準備を整え用途するとアシナ殿の体に変化が起こる。
「こう・・・ もり?」
「アシナ殿!?」
信じられない事にアシナ殿が喋り始めたのだ。しかしその声はか細く今にも消え入ってしまいそうな声である。
我はアシナ殿の手を掴み話しかける。
「今・・・ 元気になられますから待っていて下され!」
アシナ殿は首を少し左右させその言葉を否定する。
「君は・・・ 生き・・・ て? 俺の・・・ 為に・・・ 死んじゃ・・・ ダメだ・・・ よ・・・」
小娘がアシナが黄泉がえったと騒いで居るので一括する。
「俺・・・ はも・・・ う助か・・・ らない・・・ 蝙蝠が・・・ 俺と1つに・・・ なれば・・・ 助かるやもしれない・・・ けどそれじゃ・・・ 蝙蝠の存在が・・・」
「我はどうなっても構いませぬ!もうそれ以上喋ると・・・」
主は震える腕を我の刀まで持ってきてそれを抜くように示唆する。
「解釈を・・・ お願い・・・ できますか?」
「それは・・・ 命令でございましょうか・・・」
声が上澄ってしまうのを嫌でも感じる。
「違うよ?・・・ お願いだよ・・・ 蝙蝠なら・・・ 聞いて・・・ くれるかなぁって」
「蝙蝠? 馬鹿な事はやめなさい・・・ 何する気よ・・・ いいかしら私の今から言う言葉は命令よ? 今すぐその刀を・・・」
小娘の髪が逆上がり臨戦体制を取り、命令を口にしようとした時。

「よさんか！タツマキィ！」
バングが思いっきり後頭部にゲンコツを叩き込む。そして倒れ込み掛けた所をすかさずガロウがタツマキの意識を刈り取る本気の一撃を加え入れる。しかしその一撃ではタツマキを刈り取る事が出来ず。足を踏み込み歯を食いしばり鬼の形相でこちらを見据える。サイタマ殿が移動して首に攻撃を当てると糸が切れたように地面に倒れる。
「俺は詳しい事はわかんねぇ… お前の事情もアシナの事情も分からん… だから俺はどこに転んだ所で文句も言えねぇし指図も出来ない…」
サイタマ殿は屈んで我の胸に拳を当てる。
「でも… これだけは言える。後悔をするな覚悟を決めろ！それが男なら尚更… な？きっとここが人生最大の決断場所になってると思うぜ？俺は。」
この人は… 全く頭が上がらない…
「蝙蝠っつったっけ？酷な願いだよなぁ？選ぶも断るもお前次第なんだぜ？」
ガロウ… 全くもってその通りである。この主は… 本当に…
「蝙蝠君… いつぞやジェノス君にも言ったが何が正解なんて、分かるぬものじゃよ。自分が決めて方を選ぶといい」
「我は… 我は… アシナ殿の願いを… 尊重します！ 」
主に背き主を切る… 従者を名乗る身としては失格所か打首ものである。しかし主がそれを望み、主がそうしてくれと言うのなら我はそうしよう。我は主に歯を向けよう。
決意し、刀をアシナ殿の魂があるところまで持っていく。
アシナ殿が我の刀を弱々しく掴み言葉を連ねる
「あり… がと… 蝙… 蝠… お願い… します。」
「グッ… アシナ殿… いや… 主よ… 御免！」
鮮血が舞いそれは花のように霧散して消滅する。主の魂を我に取り入れ、我自身がアシナ成れる。しかしその名を我は否定する。我は蝙蝠でありアシナでは無い… 生涯この命が尽きるまで我は主の道

具であり、主人にはなれぬのだ。
「貴公等・・・ 済まなかったな。この埋め合わせは後日しよう・・」
主を抱えてその場から離れる。
山へ潜り一件の寺を見つける。既に放棄されているのか・・・ 草は茂り等に荒れているその寺に腰を下ろし。
手短に主を火葬し寺横の空き地に墓を立て骨壷を埋めた。墓石を起き、お供え物を供えて手を合わせる。
これで・・・ これで良かったのだ・・・
そう思わなければ潰れてしまいそうだった。
かつてかの物が焦がれてやまなかった、道具ではなく人になること・・・ それは等に諦め、主のパートナーとして生きることを決めた後に最悪の形で完遂されることとなった。
ＴＲＵＥａｎｄＢＡＤＥＮＤ
人成り

数年後

山から離れた荒れ寺で日がな、木を彫り続けるものが1人。
「あんた・・・ 一体いつまでそうしてる気かしら？」
珍しい。来訪者が訪れたと思ったら当時見たまんまの変わらぬ姿の小娘1人。
小娘の言葉に耳も向けず、ただ木を彫り続ける。
「主の墓なら・・・」
「もう参ってきたわよ。」
「・・・ そうか」
「・・・ はぁ。そんなしょげてる姿みたらアシナ・・・ なんて言うかしらね？」
「分からぬ・・・ 暇つぶしで始めた木彫り何を掘っていても仏様になってしまう・・・ そしてその全ての仏が怒ってらっしゃるのだ・・・ 我は咎を背負っている。もう・・・ 神に祈るしか無いのだよ・・・」

「そう・・・ 深くは言わないわ。」
仏彫りは無心で仏を彫り続ける。
「酒・・・ 置いてくわね。」
「タノモォォォォ」
寺の扉を勢い良く開く人が1人。
「此方に名だたる剣豪が居ると！バング殿からお聞きした！わっ・・・わっちにわっちに剣を教えて下され！」
「ほら・・・ あんたにお客様よ？」
「知らぬ・・・ 帰れ。」
力を求める剣士・・・ それは何かの始まりを示唆しているのやもしれぬ・・・ しかしそれは別の物語。この場所で語る必要は無いだろう・・・
ＴＲＵＥＥＮＤ
新たな始まり